

は、みな、うはの空で見て来たのではなかつたか。

溪のずつと奥、露出した大きな岩と岩との間に懸つてゐる細やかな水を心から熟視したことがあるか。また、眞黒な岩にぶち當つて渦巻き立つてゐる海洋の浪を見たことがあるか。

果してあると答へ得るであらうか。

自然を愛するの、自然を見てゐると云つてゐたことの恥しさをこの頃頻りに感ずる。

○

或る日、客があつた。舊くからのわが社友で、或る山國の小學校の教師をしてゐる人である。初對面であつた。

その人といろ／＼の話をしてゐるなかに、彼は斯ういふ事を云つた。私は今までいはゆる修養書といふものを一冊も讀んだことがない、歌の事を斷えず考へて居ればそれが自分にとつてどれだけ修養になるか解らない、と。

私はそれを聴きながら心の中で、ありがたい事を聞くものだと思つた。歌が修養になる、一寸聞けば變な様だが私は夙くからさうならなくては嘘だと考へてゐた。歌は要するに人そのものである。歌を見詰めてゐるといふことは自分の心即ちたましひを見詰めてゐることになるのである。自分の心(自分のいのちと云はうか)、それを斷えず見詰めてゐて初めて歌が出来るのだ。然うして見詰めてゐるも

のを少しづつ、でもよくして行かうとするのは、これは當然ではないか。

○

詠んだ歌に靜かに指を觸れて見よ。

何のさ、はりなしに、自分の心に觸れる思ひがするか、どうか。

その四

秋田の旅の歸り、信州の松本に泊つた第二日目の夜に、土地の歌を作る女の人たちが三四人、宿に訪ねて来て何か話をして呉れといふ事であつた。その時は夕方の酒の後で、私は大へん酔つてゐた。言つた事も無論酔つての上の言葉だが、中に斯ういふ一句があつたのを不思議に覺えてゐる。「歌をば自分の鏡だと思ひなさい」といふのである。

對手が女の人であつたために咄嗟の思ひつきで斯ういつたのだらうとも思ふが、まことに歌ほどその作者の面目をよく寫すものはないやうである。その人うまれつきの性格から、歌はれた其場の態度まで不思議な位の微妙に一首の上に表はれて来る。自分といふもの、生命といふもの、人間といふものに對する理解の程度、それに對する態度如何まで表はれて来るやうである。

歌を單に鏡だ、としてそれに對して心を動かしてゐるのも可い。更にその鏡面から靜かに奥に入つ

て行く心がけがあつたらなほい、だらうと思ふ。

○

私の舊友で、ホトトギス派ではかなりの地位に居る或る俳人がある。今はどうだか知らないが七八年前同じ牛込区内に下宿して繁く往來してゐた頃、その友は下宿屋の自分の一室をいつも綺麗に片付けて、机の上に一本の線香を立て、その前に端座して句作に耽つてゐるのをよく見かけた。當時の私は、そんな馬鹿なことをして生きた句が出来たものと罵つてゐたものであつたが、然し、騒々しい下宿屋などではさうして心を静めるのも一つの手段であつたかも知れぬ。尙ほ單に手段とすることなく、さうした一縷の香の煙に全く自分の心を託するやうな三昧境まで入り得て、更にそれに對して思ひを凝すやうなことが出来たら一層い、だらうと思ふ。強ちに線香を要するまでもなく、心を澄ませば直ちに其處に縷々として立ち昇る自分の心、自分の生命を感じる様な境地にまで進めば尙ほありがたいことではないか。

閑けさや岩に浸み入る蟬の聲

あかあかと日はつれなくも秋の風

といふ様な境地はあらゆる自然の景象が私の謂ふこの香の煙をなしてゐるものと云つてい、かも知れぬ。

○

北海道函館の社友K——君から爲替券を入れて左の如き手紙が來た、ツイ先日の事である。

近來さつぱり歌が作れず。また歌が面白くなく相成申候。『創作』の歌を見てもどういふものか感動

させられず、つまらなく存じ居り候、今少し人の心へ迫る様の歌欲しく候。それゆゑ『創作』も止め

ようかとも思ひ候へども先生とこのまゝお別れする事残念に候間又々繼續する事に思ひ直し候。

昨今の歌の面白くなく、一向に直接に人の心に響かぬ憾みをば私も本誌六月號かに述べて置いた。斯うした手紙を読んで更にこの感の新たなのを思ふ。

研究といふもの、盛んな時代にはその反對に創作は必ずのやうに衰へてゐるらしく思はれる。今は謂はゞその研究時代に屬してゐるのかも知れぬ。(と云つて、ろくな研究が行はれてゐるさうにもないが)あゝでもない斯うでもないで、右顧左眄、自ら小さくなつてゐる形がめい／＼にある様である。斯くして歌の根本を成す主觀力が萎縮して各自に小さくちんまりと納つてしまつたのであらう。とにかく面白くないのは事實である。私は今度、「前月歌壇」風の批評を書いてみるつもりで何ヶ月か或は何年目かに短歌雑誌の重なるもの六七種に眼を通さうと企て、あまりにその無味單調なのに驚いて、中止してしまつた。その以前から自分の雑誌の歌の拙いのを始終氣にして居たのであつたが、他のものを通覽するに及んで、これは決して自分のものばかり拙いのではないと思つた。思つたどころか、他

より幾らかいゝところがあるかも知れぬとまで思つた。これは多少色眼鏡であるかも知れぬ。でないかも知れぬ。いづれにせよ、他のことは先づ如何でもいゝ、せめて自分等のだけでも、このK——君と同じ嘆聲を發せぬまでに押し進めて行き度いものである。少し眼のある人は、K——君ならずとも同じ感を持つてゐるに相違ない。どうかして一刻も速くそれをとり除いて了はうではないか。一人でも二人でも先覺者が出て來たらば、睡れる者も自づと覺めるであらう。作れなくなつてゐる人も、驚いて作り出すであらう。それに際し私は先づ云つて置く、世間の傾向などに決して眼を向くるなど。因循な、微温的な、村夫子風な、デレツタント風な所など斷じて排斥せねばいけない。先づ睡りより覺めよ、而して少し無茶だと思つても自分の思つた方向へ猛進して欲しいものである。

「それゆゑ「創作」を止めやうかとも云々」を讀んだ時私は實際暗涙を覺えた。難有う、未見の友よ、私は決して徒らには此言葉を聽かないつもりである。(九月下旬)

○
一人平均三十首として三百人の投書では都合九千首からの歌を見ることになる。丁度萬葉集を二倍した量に當る。之れを短時日の間に見て了ふといふ事は考へるだけでも可なり苦勞な仕事である。

で、山と積まれたのを前にして溢々ながら選にかゝるのだが、いつのまにか私は本氣になつてそれ等に對するのが癖である。上手下手、邪道正道の別はあつても、兎に角精一杯になつて各地それら

の人がみな自分及び自分の周圍に對する感傷や批判を述べてゐるので、いつの間にかわれ知らずその誠心に惹き入れられてゆくのである。(さういふ場合、ふざけたものや餘り下手なのに會ふとツイむきになつて憤慨もする。)

ことに今度は初號の事でもあり、八九分通り私には初對面の人であつた。一概には云へないが、初對面即ち初心者の人が多いやうであつた。而してその初心の人の作がいづれもみな眞面目な一本氣のものであるのを見てつくづく嬉しく感じた。他の社に見られぬ、本社獨特のものであるが様にも思はれたりした。いろ／＼な新聞雑誌の投書欄を渡り歩いて所謂投書家氣質とうしょかかたぎになり切つてゐる人の惡達者わるだつしゃな氣取つた狡猾な詠みぶりを見ると眞實身ぶるひの出る様な不快を覺ゆるのであるが、今回はそれが一つも無かつた。どうか斯の素朴な正直な調子を其儘に次第に高く強く、且つ清くして行き度いものである。

正直な一本調子な歌にはその歌つてある事柄なり技巧なりの如何に係らず、何處にか眼に見えぬ力が含まれてゐるものである。

技巧その他、自分の思ふことを自由に、上手に歌ひこなすやうにならうとするには先づ讀むのが第一である。相當の地位に在る人の歌集なり何なりを熟讀玩味するのである。その間には自然に詠歌のこつといふ風のもの會得せられるであらう。それと今一つは練習である。人にもよらうが、初めの

中は餘りかれこれ考へずに虚心平氣でどしどし思ふだけのことを詠みならしてゐた方がいゝかと思ふ。

三百人のうち、先づ二百七八十の人の作には多少に係らず戀の歌が混つてゐた。そしてその戀の歌に限つてみな拙かつた。

或人は戀歌を作らねば歌よみでない様に（若しくは一人前でない様に）心得て儀式的に作つてゐる風が見えた。或人はひとがする故われもして、みむ傾向を帯びてゐた。みな虚偽である。佳い歌の出來やう道理がない。或人はまた針ほどの事を棒程に云つてゐた。それは電車に乗り合せたきれいな人を見ても時に味な心地になるものである。あるからと云つてそれを、君を戀しぬ身も燃ゆるが、などと變な聲を出してみた所で誰も相手にしはしない。

中には眞實に戀愛状態に在つて作つてゐるらしい人もあつた。流石にこの種類の人の作にはやゝ見られるものがあつたが、要するにまだ微温的な、お芝居風な不徹底なものであつた。戀と云へば兎に角その人の生涯に於て重大な事件である。自他ともにこれほど心を動かすものは尠い、それと同時にこれほどまた玩ばれ易いものもない。眞實らしくは見えても、容易に人を動かすことの出來ない程度の戀歌は、要するにまだ戀を遊びながらの作歌であらうと思ふ。戀を遊ぶ、即ち自分の心を遊びながらの作であらうと思ふのだ。

いろいろの歌と人

本誌投稿歌の中から、よしあしにつけ眼についた歌を引いて来て、座談を試みる。

教子の枢守りてしづくと魂消ゆるがに吾はゆくなり

亡き友を弔ふ子等の歌ききて人等なきつつ夕日はかける

教壇に立ちて見やれば唯一つ空しき席に涙ながれぬ

成績を處理してあれば世を去りし教子の圖畫寂しく光る

これは或る小學の教師をして居る、假りにA——君と呼ばう、作者がその教へ子の死去を悼んでの詠である。しんみりした、少しも浮いたところのない歌ではあるが、どうも切實でない。しづくとと云ひ、魂消ゆるがにわれはゆくなりといふあたりの調子が、いかにも間のびがしてゐて、のんきなため、さう思はせるのではあるまいか。次の一首でも、人等なきつつ夕日はかけるも調子の上からも歌はれた景象の上からもいかにも悠長である。第三第四首は幾らか引き締めた印象が残るやうだが、これだとして涙ながれぬなどと大づかみに云ひ放つてしまはずに唯だ一つ出來た新しいその空席そのも

のを今少し精細に（塵が溜つてゐるとか、いたづらのあとが目立つとか、隣席の生徒の肩まで寒げに見ゆるとか）歌つた方が却つてその涙流るゝ心もちがよく出て來ると思ふ。ひとが死んだ、しかも自分の久しい間手しほにかけて來た幼い生徒がなくなつた、といふのだから悲しいには相違ない。けれど斯う不用意に歌はれてはその悲哀も誠にお疎末なものに見ゆる怖れがあるのである。あまり大ざつぱに悲しいとか涙ながるゝとか云つてしまはずに、よくその悲しみを自分の心で噛みしめて、それから靜かに言葉に移した方がよく表れるものである。場合にもよるが感じた事を直ちに歌に移すには餘程の手腕がいる。普通は寧ろその感じを心の裡で充分に醸（か）してから歌つた方がいゝ様だ。

嬉しさをどり歩きぬ教へ子の九割が高女に入りしよろこび

子供等の首尾よく合格せし今日のこのよろこびよ何にたとへん

苦と憂さのすべてがここに蘇へり斯る喜びとなりたるものか

うれしさよかかるとうれしさとおちつきがまたとこの世にありにけらしや

これは同じく教職にあるB——君の作。いかにもお嬉しさうであるが、斯うのしか、つて嬉しがられてみると、こちらはまつたく途方に暮れて、手を揉みながらうろ／＼せざるを得ないのを感じるのである。これも亦た、その感じたことを今少し押し靜めて、相當に形體（かたち）あるものとなるのを待つてから詠み出でなかつた、め斯う取り亂した見苦しきとなつたのである。思つた事を唯だばい／＼と饒舌

つてしまへば歌になると思つては間違ひである。そして、歌は一面自分の心の鏡であることをも考へてほしいと思ふ。何といふ騒々（さわ）しいこの歌の姿だ！

尾長鳥しきりに啼きて空曇る我が日の晝も更けにけるかも

霧々々まこと思ひに疲れぬき濡れつつ空にとぶ山つばめ

寂しきは風にありけりこの生命白雲のごと吹かれぬるかな

雪解水ひた騒ぎながる地も空も白雲となり光る曇り日

これはC——君の作二十七首の中から最初より第四首までを書き抜いたものである。實に私は驚いた。試みに次に私の舊作數首を書き並べて見る。

杜鵑しきりになきて空青しころ冷えたる眞晝なるかな

いしたたきやますしもなく淋しさにわが日の晝も更けにけるかな

雨々々まこと思ひに疲れぬきよくぞ降り來しあはれ聞えうつ

つめたきは風にありけりわがころ白布のごと吹かれたるかな

わが赤子ひた泣きに泣く地も空も白雲となり光る曇り日

廿七首が殆んどこの状態である。私をなぶつたつもりなのかとも思つたがそれにしてはあまりに丁

寧であり、この作者として餘りに意外である。斯うしたならば私が喜ぶと思つたのか、それともふら／＼と斯ういふ事に興味を以て作り上げたものか、いづれにしても驚いた事である。この作者はなかく熱心なそしてやりやう一つでは前途のある人だとひそかに思つてゐたのであるのにどうして斯んな心得違ひをして呉れたのだらう。眞實、私はこれが熱心のあまりの一時の發作であり、思案の外であつてほしいことを祈つて、改めて作者の自省を祈つておく。

さみしらにふと見下せば忘草その忘草われに味氣なし

忘草吸はまく煙草とりあげてそつとマツチをすりにけるかも

ふくみたる煙草の苦さ悸へつそつと吹くなり何ぞ馬鹿氣たる

我が前に手を打つ友は酔ひたるかああ幸なるわれが友かな

これはD——君のを初めより四首引いたもの、そしてこれに添へられた手紙に

どんな値の歌を作つてゐるのか自分で判りません。佳いと思つてゐても投書すると没書になります、

斯うして先生の許へ送つても掲載されたことがありません。で、自分の歌の缺點など薩張りわかりま

せん。御多忙では御座いませうが何卒御加筆御評の上御返送下さるやうお願い致します。

と認めてあつた。斯ういふ疑問を持つてゐる人はこの作者のみでないやうなので、わざと此處に引いて返事に代へやうと思ふのである。

が、いよ／＼批評しようとして筆をとつてみると、どう云つていゝ一寸自分にも解らなくなつて來たことにいま私は氣附いてゐる。とにかくこれらの歌が完全な歌でないことだけはわかつてゐるが、——なるほどこれなら毎號掲載せよに來た筈だとは思つてゐるが——サテ、細かにそのわけを云はうとすると、なか／＼むつかしい。そして一體から謂へば先づふざけて作つたとしか考へられぬこれらの歌も、この作者の手紙や、茲に引いた四首以外の歌について考へてみると、なか／＼さうでない。そして、私は次第に或る強い氣の毒さを覺えて來たのだ。

私の解する所では、この作者は何も彼もつまらない味氣ない、馬鹿々々しい心持のみに日を送つてゐるらしい。そして、それを歌つたものが即ちこれらの作であると思ふ。けれど、作者よ、さう解釋するのは餘程私の立ち入つた解釋で、普通一般では恐らくこれを滑稽視し終るに相違ないのだ。それがまた當然と思ふ。淋しさにあたりを見廻すと煙草がある、あつたところでその煙草が一體俺に何になるのだ、と斯う云へばまだ幾らかいゝかも知れぬが、さみしさにふと見廻せば忘草その忘草われに味氣なしでは誠にあつけないものになつてしまふ。第二首目もさうだ、煙草を吸はうと思つてマツチをすつた、といふことだけでほん／＼とどうなるだらう。何ぞ馬鹿氣たる、といひ、あああさいはひなるわが友かなといひ、みなその眞の心持は出ることなしに、先づ可笑しさが先に立つのみである。亂暴な言葉で云へばすべてこれらは屁でもないことになつて居る。作者よ、君は或は斯ういふかも知れ

ぬ、自分には實はすべてが屁でもなく見えて困るのだと。だが、作者よ、世の中の萬事が、自分自身が、屁でもなく感ぜらるゝやうな味氣なさは、他に比すべくもない深い悲痛であらねばならぬ。さうした色の消えた、芝居氣のない心持を歌ふには、尋常一般の心がけでは出来はせぬ。その味氣ない心持をさながらにうつす味氣ない調子は、空威張からんはりの高調歌よりどれだけ私には難有いか知れない。が、これでは困る。これではまつたく氣の抜けた、唯だ言葉のさきだけの味氣なさとなつてゐる。さうした心の味氣なさは出てゐなくて、歌そのものが味氣ないものとなつてゐる。今少しその心を平明にし、静かにし、そして落ちついた態度で歌ひ出してほしいと思ふ。實は私も其處に到り度くてたまらなくしてゐるのだ。作者よ、意を盡さないが、兎に角更に君の努力を祈つて筆を擱く。

誰しも自分の歌を描いと思ふ人はあるまい。が、出来るだけその思ひ昂る心を抑へて充分に熟讀玩味してほしい。思ひもかけぬ缺點が、何處に潜んでゐないとも限らぬものである。

或る二人の詠草

荒み果ての心を括りゆるみなき冬さりにけり陽の寒々と

カーテンを洩る午後の日にまふ埃側の男が眠と噴め居り

カーテンを洩る陽に埃透きあしが照すなり居り疲れて見上る

残業の窓の静けさ寒々と岬山端に残れる夕陽

一群の女工の歸るあとを追ひ冬の夕陽に走れる小犬

一群の女工追ふ犬鳴きもせず冬の夕陽のかろき埃す

現せ身の恍と遊びぬ黄昏の停車場を出て見る山暗し

住み馴れの吳に歸りし寂しさよ一日遠ほく恍と遊びて

霜ぐれの靄たつ朝陽冷え冷えと瞳に沁みながら官舎の道ゆく

知らぬ犬庭を歩きけるうら寂し霜ぐれ朝陽樹々に靄立ち

冬ざれの庭の静けさ晝曇り知らぬ小犬の去らざりにけり

一つ二つ一つ二つ腕を動かす列のうちかなしくなりぬ明き秋の陽

他愛なく恍と見とれぬ朝靄の消えはてぬ空とべる飛行器

朝靄の消えゆく空の快さ響き近寄るプロペラの音

現せ身ははるか忘るゝ恍として今飛行器の水際をはなれ

右は今月の詠草中、或る一人の分三十首のうち初めより十五首を引いたものである。あと十五もこれと似たものであつた。この三十首のうち私はどういふ考へでどれを探りどれを捨てたかを此處に書

きつけて見やうと思ふ。

第一首、荒み果ての心を括り、のの字怪し、同じくばこれを荒み果てしとせむ方緊張もし読みよくなるべし。心を括りゆるみなき冬さにけり、何となく違し、冬は來にけりと改めむ。瑕は多いが、説明的でもあるが、何處にか眞面目な、實感の動いてゐる一首である。故に採る。

第二首、下の句少し落ちつかず、且つ下品な云ひかただが、その實境がよく了解出来る。あやぶみながら採る。

第三首、説明のみのうるさき一首なり、棄つ。

第四首、殘業といふ言葉、其處（或る工場か會社か）のみにて用ゐらるゝ言葉ならむも意味自から解るべし。岬山端は何と訓むにや、みさきやまはか、うるさし、岬の山にて澤山なり、残れる夕陽、さきに窓の静けさといひ、此處に斯く云ひ、常に名詞どめにて云ひ切れり、かなり窮屈にて油の切れし機械じみたれどそのため何となく印象の強まる思ひせぬにもあらず、先づ改めずに置く、未成品のうまみとでも謂ひつべきか。採る。

第五首、走れる小犬、これもまた名詞留なり、前のは靜かにさせる夕陽なればともかく、これは小犬なり、ちと動かして見むかと小犬走れりと改む。冬のゆふべの日光、寒げに明らかなり。採る。

第六首、前のと同じものなれど、何となくだらけたり。採らずに置くべし。第七首、何のことやら

解らず、イヤ、大抵汽車か何かに乗つて遊びに行き歸つて來ての作なるべしと推察はすれど、それには相濟むまじ、現せ身の、恍と遊びぬ、この人にこの句、選者チト戸惑ひの感ありし。第八首、住み馴れの、のの字怪し、住み馴れしとして第二句を呉に歸りてとしては如何、第四句、ほの字不要。第五句、また恍と遊びしか。全體にだらけたり、採らず。第九、霜ぐれ、方言にやと思へどよく解らず。眼にしみながら行く、といふのも可笑しい、眼に沁む覺え何々を行くならば意味は通る。官舎の道行くも少し突然すぎる。よくなりさうだが、あまりにかた言の作ゆゑ採らざりき。第十、歩りけるとあるのを初め私はよう讀まなかつた、ありけるならば假名で書くか歩けると書いてルビを振る必要がある、が、此處で強ひて斯んな古めかしい言葉を使ふ必要はない。歩むかたの歩くで澤山である、歩めるが此處にはふさふと思ふ。いゝ境地だが、どうもガサ／＼してゐる。惜しいと思ひながら棄てた。第十一、これもザラ／＼してゐる、言葉を繼ぎ合せ／＼して作つてゐる様だ。もつとしつとりと行かぬものか。第十二、第一第二句を初めヒトツフタツヒトツフタツと讀み、あとでイツニツイツと讀み直したが、どつちでも可笑しい。作者の心持はよく解るが、獨立した一首の歌としてはなかくのことである。第十三、たあひなくでなく、たわいなくだと思ふ。餘程今月はこの作者は恍の字に參つたと見え、此處でもまた恍としてゐる。飛行器の器の字怪し。採れない事もなからうが採つた所でしかたもない程のものである。第十四、これも前同評、これらの作を採らねばならぬ作者とさう

でない作者とがある、此處でこれを探つた所でこの作者を値づけるものでは決してないと思ふ。第十五、現せ身は、といひ、はるか忘る、といひ恍として、といひ、水際をはなれと切つた所といひ、がらにない離れわざをやつてゐる形である、やつてゐるな、と選者は微笑しただけであつた。

以上より四首を採り、残り十五首より三首を採り、都合七首を今月に於けるこの作者の收穫として詠草に入れておいた。かなり鋭い眼と、鮮かな感覺と、而して絶えぬ生命のなやみとをこの作者は持つてゐる。が、それが常に部分的にしか現れて居らぬ。全身的でない。で、出来る歌がみな極めて小さなものばかりだ。且つ、言葉といふものに對する理解と同情とを殆んど持つて居らぬ。殆んどいづれもその歌が埃つほくカス／＼してゐたり、ザラ／＼してゐるのは其處から來て居る。惜しいこと、慘しいことに私はこれを眺めて居る。

めづらしく里見川原に水出でて落結くると網はる男

傾けば水もこぼれむ三日月の雨のまをうすら光りてあるも

兒童らは晴れと着かざり集ひたる運動會の心勇みや

朝寒の川もや空にひろごりて紅き太陽すかして見ゆる

お祭の千歳樂の唄の聲太鼓のひびきの近く聞え來

産土の神にまゐらすみあかしをともしてかへる松の宵やみ

産土の神のきざはし下り立ちてわがともしたるみあかしを見ぬ

稲の穂に月ふりかかる田圃道産土神のともし見かへる

局員のいたづらごとの電話さへ更けて静けき街にさす月

明日の旅氣にかゝりつゝそこそこに準備とゝのへ天みてねたり

床屋にてふと見し新紙太き筋逝きたる人の記事を見守る(小野氏の死)

あまりにも驚くことの久しかり去る月あひし人の死哀れ

あひあひて一と月ばかりその人は今は世になし十月の末

秋風はかなしみもちて長尾なる野に山にいま吹きて居るらむ

長雨の晴れし月夜に吐息して現世去りし人を思ひぬ

これは他の一人の詠草中初めより十五首を引けるもの。

第一首、佳い歌だ、落結來むと、すべきかとも思つたが、原作のまゝの方が力がある。男網はるかとも思つたが、先づ原作に従つた。落結來むと男網はる、の方がいゝやうにもあるがと惑ひながら探る。

第二首、傾けば水もこぼれむが一寸何の事か解らなかつた位私にはこの形容句が三日月に對して縁遠く思ひなされた。あまりに幼いためか、または概念じみてゐるためか、とにかくに不消化である。雨のまをうすら光りてあるも、といふのもかなりあくどい云ひかたである。探らうかと思つたが、棄

てた。

第三首、幼い歌だが、一本調子のすがすがしい所がある。微笑みながら採つた。斯ういふ場合の作者の單純な心に私は親しみをもち易くて困る。

第四首、少しうるさい。たいへん濕ひのあらねばならぬ境地でありながら、句が、言葉がみな乾いて、少し指さきで擦つて後吹けば消えてしまひさうだ。景色をたゞ報告してはいけない。第五、また同評、且つ平俗に過ぐ。

第六首、ともして歸る、といふのはどうしたわけか、神にあぐべき灯をまだ上げもしないうちに持つて歸るとは聞えぬことなり、何かの思ひ違ひと改めおけり。松の宵闇も無理なり、下蔭とせば無理もなく意味も通るわけなり。先づ平明の作。第七、これも同じ。採るべし。

第八首、第五句で作者自身の動作を叙してあるが、それではまた第四首の如くへな／＼した報告に終る。同じことでもその御燈明を主題にして、あらはに云はずともそれに對する作者の感懐を洩らした方がいゝと思ふ。改作の後採用した。

第九、こまかな歌の様で、案外間のぬけた、しなびた一首である。且つまた平俗な趣味に落ちてる。單に局員といふも無理であらうし、街にさす月とわざ／＼丁寧なことわらずとも街の月かなとあつさりしておいた方が落ちつくかも知れぬ。生氣なく、私の好まない歌である。

第十、さうですか歌、第十一、さうですか歌。床屋にてふと見し新紙太き筋、のあたり淨瑠璃の文句にでもありさうだ。この作者はこれでぐつと碎けたつもりであるかも知れないが、よくない考へだ。記事を見守る、此處でもたゞ間のぬけた自己動作報告をやつてゐる。第十二、さうですか歌、ちつと見てゐると何だか心細くなつて來る。なぜ斯う浮薄な、輕率な文句が平氣で續いてゐるのだらう。歌は決して景色や事實や感動の報告ではないのだ、謂はゞ第十一は事實の報告、これは感情の報告ではないか。斯んなそゝつかしい、輕薄な調子で果してひとの死を弔ふ眞意がのべられたと思つてゐるか、死者若し靈あらば『馬鹿にするナ！』と憤慨するであらう。第十三、さうですか歌、之も浮いてゐる。ほんの口さきの哀傷である、腹から出た深さも重さもやはりはしない。第十四、第十五、いづれ劣らぬさうですか歌、細評の煩に耐へず。

以上十五首より五首を抜き、残り十五首より一首を抜き、都合六首、今月の詠草中に收めておいた。この作者は非常に歌に熱心な人である。が、眞實の歌といふものが了解されてゐるかどうかは疑はしい。作りなれてゐるだけに大抵一通りには詠みこなす。が、さうした歌には殆んど靈が入つてゐない。たゞ多くは言葉だけのものとなつてゐる。而して當今の歌を作る若い人たちの六七分は大抵この言葉だけの上手な歌づくりである。本誌の詠草またこの例に洩れてゐない。極めて平和らしいこの作者を偶然（といふうちにも、上に擧げた挽歌數首の餘りにのんきなのに憤りを發した關係がないではな

い)その例證の様に此處に引いたことを心中氣の毒にも感じてゐるが、これを機として一轉期が作らるれば自他共に幸である。

月々三十首の詠草を送る人のうち、六七首を誌上に抜かるゝのは先づ成績のいゝ方である。その六七首さへ何の躊躇なしに採り得るといふのは多くないのだ。考へて來ると心が寒くなる。人間は眼の覺める事が肝心である。おのづから自分の身に出來てゐた一種の惰性或習慣や因循やからフツと眼を轉ずると、今まで自分の知らなかつた新しい世界のあることを知るものである。生命の進歩は其處から生ずる。フツと眼を轉ずるといふのも袖手空しくその折を待つてゐては駄目だ。絶えずその用意期待を自分の心に藏めてゐなくてはその機は來ない。この新春を期し、深くこの心がけを養ひたいものと思ふ。

加藤東籬集を讀む

『加藤東籬集』が出来る——といふ言葉は我等の仲間にあつては殆んど何等の理由を考へぬ前に先づ何とも云へぬ安堵と満足と、そして單に歡びといふよりは一種の矜りに近い或る感情を誘起すべく一致してゐたのである。その期待せられた『加藤東籬集』は創作者社叢書第一編としてこの五月二十八日

に出來上つてまさしく我等の手に置かれた。

もつとも私自身は一冊になる以前に著者に代つてその書の校正をしてゐたため、既にその内容に對する印象をばいち速く胸に刻んでゐた。その印象は先づどんなものであつたか。

曰く、何とも云へぬ暗い失望であつた。

愈々製本が成つて取りあへず身邊の諸友の間に配布した。

そして、數日を経てお互ひが出會ふ毎に交はされた言葉はどんなものであつたか。

『どうだネ、讀んだかネ』

『ウ、讀みました』

『どうだネ……………』

『さア、どうも少々困りましたネ、餘り加藤張りが出てるので……………』

甲乙丙悉くこれであつた。痛い所に觸れる様に實はお互ひこの問題に觸れて行き度くなかつた。

本が出來上ると直ぐ、他に用事もあつて、この著者が上京して來た。そして三四日間私の宅に泊つて行つた。遠慮のない間柄であるとはいへ、いかに口の悪い私であるとはいへ、この黙り入つた、常に疊の面を見詰めてゐる様な年長者の著者に向つてはなかく早速にはその讀後感を述ぶる事が出來

なかつた。愈々今夜の夜汽車で立つといふ日になつて、二人して宅の近くを歩きながら私は漸くうちを切つた。

夙うからその間の消息に感づいてゐたらしい著者は、待ち設けてゐた様にとぎれ／＼云ふ私の言葉に聞き入つた。

『そでしかナ、そでしかナ』

と國の訛を出しながら、僅かその間に一二の自分の言葉を交へながら、ほんとうに耳を傾けて聴き入つてゐた。抑へ難い昂奮はその俯向いた顔をうす赤く染めてゐた。

これで生れ代つた氣で、今後の歌を作る、と云つてこの寂しい人は遠い郷里へその自身の最初の著作を抱へて歸つて行つた。

見送つたこちらの心にも、前にも増した寂しさが喰ひ込んでゐた。

この寂しさを懐きながら、私はその後幾度かこの歌集を繰返した。忙しい日が續いたので、僅かに一度に五首十首つつと手當り次第に讀んで行つた。そして、さうしてゐるうちに私は次第に勇氣づいて來た。

『よし、加藤君は終ついにに加藤君だ、他の誰も持たぬ別種ない、所を彼はしつかりと持つてゐる、難有

い！』

と、繰返せば繰返すほどにこの會心の微笑を深めて行きつゝあるのである。

『要するにこれは書物の編輯の爲方が間違つてゐたのだ、味噌も糞も餘りにごたく／＼に詰め込んだため折角の彼獨特の光明も見わけにくかつたのである。つまり屑が多過ぎたのだ。その屑のために元來が餘り冴えない彼の特質が全く掩ひ隠されてしまつたのだ、惜しい事をした。』

と思ふ様になつた。あんな人に編輯などさせずにこちらでもう少し注意したならば斯んな事にもならなかつたであつたらう、といふ自責に似た愚痴も出る様になつた。いかに忙しかつたとはいへ、彼は自身の十年間の勞作を輯むる處女歌集の原稿作成を自分よりずっと年下の少年たちに一任してしまつて、其處の雜誌此處の雜誌から舊作を寄せ集めさせ、書き寫させ、自身殆んど眼を通す事もせず私の方に廻して來た。こちらはまたこちらで、送つて來た原稿を直ぐそのまゝ印刷所の方へ渡してしまつた。數年來信じ切つてゐる彼のものであつた、め斯うもしたのであつた。それ無くして一應こちらで氣をつけたらばまた方法もあつたのであらうにと憾まるゝのである。無頓着同志の爲事が此處に思ひもかけぬ大きな穴をあけてしまつたのだ。

私が加藤君の歌を初めて見たのは——昔話を始める様で少々變だが——明治四十四年の三月であつ

た。第一期の『創作』を出してゐる頃で、その頃は本誌はあらゆる人の投稿を自由に受けてゐた。毎月何百通となく寄つて来る原稿の中に他の雑誌では折々見てゐた様であるが直接に見るのはその時が初めての或る一人の歌があつた。驚くべき異色を持つたもので、私はまったく昂奮してしまつた。當時は現今より選歌を嚴重にしてゐたので大概の人が先づ一首二首位から三首五首と進み、相當の素質のある人でもかなり永い月日を通して漸く半頁組一頁組になつてゐたものであつたが、その時私はこの初対面の人の作物をいきなり最上級の位置にある一頁組に採用してしまつた。それが即ち加藤東籬君のものであつたのである。それほど當時にあつては驚異に値する作を彼は作つてゐたのだ。『加藤東籬集』を披くと、なつかしいかな、その時初めて見た作物が先づ第一頁に出て居る。

舊き友何を思ひし籬のあつもの作りわれ待つといふ

あを海のほとりの友の心より書きたるたよりにまた披き見る

錢なくて愁へず二月花咲かず南の山のうす霞むかな

鬱々と愁へに眠り二月の日林の中に暮るゝを知らず

祈らざる心をいかになぐさめむ白晝靜かに野を焼く男

野火放てば青き煙は立ち昇り一縷かなしくかきろひにけり

深々と入日の光山に滿つ胸に沁み入る何のさびしさ

公園の松に立ち寄り松風に吹きすまされぬさびし春の日

盆栽の梅咲く頃となりにけり衝に塵は軽く起れり

かすかにも市のどよみの聞え来る香取の宮の春の樹に凭る

出水して向ひの町の白壁の水に映りぬやよひ雁啼く

斯うした歌は、『創作』第二巻第四號を持つてゐる人はあけて見るがよい。ちやんとその百七十八頁から百八十頁にかけて出てゐるのである。

當時は『明星』はなくなつたが新詩社がまだその偉きな餘威を振つてゐた時であつた。まだく星や董の時代であつた。さうした間に、しかも突如として斯うした歌が私の手許に舞ひ込んで來たのである。私はまったく驚いてしまつた。しかも後にその作者が中年の農夫である事を知るに及んで私の心は益々動いたものであつた。現に急速な推移を遂げつゝある現在の歌風から一昔前の此等の作を見る時には其處に云ひ難い粗雑や幼稚があるに相違ない。然し斯うした漲る様な心の流を感じるには「今」も「昔」も無い筈である。いや、斯うした澄み動く心の流が果して今の歌壇の歌に見らるゝであらうか。

舊き友何を思ひし籬のあつものつくりわれ待つといふ

蒼海のほとりの友の心より書きたるたよりにまた披き見る

これらの歌は當時と全く同じい力を持つて今の私には迫つて來る。
斯うした大まかな、額を擧げてものをいふ様なまつ正直な歌が彼にはかなり多い。

そろそろに彼岸櫻の咲くといふ都邊戀し上らばやと思ふ
丘に登れば杳かに心かなしみぬ煙のごとき春草の色
樹には樹の思われには我の思の恣まなれ冬のしづか日
鳥が子を捕られて騒ぐ夏の朝うつかりと起き青稻田見る
折も折子を捕られたる鳥奴が狂ひて低くわが上を飛べり
喰はぬ目にあふかも知れず働かうといふ心になりぬ
不平なく今年の夏を送らむと土を相手に働かうとする
己が手一つに世の幸福を作らむと酒の如くに酔ひて思へり
憎しと思ふ人が死ぬればその子供大きくなりて世を歩むなり
一飯を恵みてやればその乞食わが所有の如くなつかしきかな
わが畑の玉蜀黍とうもろこしに來る鳥その黒鳥憎からぬかな
梨の實のうれて靜に落つる音に聽けよ餘りに逸まる心
五十路にはなほ十三年を餘せりき何か爲さむと或夜思へり
午飯はことに身にしむ眞赤なる漆紅葉の散る頃ほひに

泣くが如き磨臼の音は父母を思ふ心に響き來にけり
冬の家の焚火の如く靜かなれ愚かになれと此身をおもふ
馬の如くまたも獨りとなりにけり野に草を喰む馬の心に
七八日畑に來りて働けば太陽もまた寂しかりけり
野の末に見ゆる町あり語り得ぬ寂しさをもて夕陽に眺む
秋更けし青森灣の海見むと我に連れられ來にし妻なり
村雲の月の面を流れゆく見ればか胸の騒がしきかな
朝なさな物など言はであらむより猫柳など折りに行かまし
諦めて四十男が眠らむとすればま青き夏の夜の月
津輕人遠くも來つれ駿河なる富士の高嶺を仰ぎ見にけり
色もそつても無い、云はうとしたことを唯だ云つたに過ぎないといふ此等の歌に、歌らしくもない
歌に、捉へどころのない人間の心の寂寥や悲哀が、心のうごきが實にみづ／＼しく盛られてゐるでは
ないか。彼の持つ「言葉」といふものこそ豊かでなければ、粗野ではあれ、日常生活に使ふそのまゝを
用ゐてみな相當に用ゐる活かしてゐるではないか。これらを見て私は貧しくとも眞實の「言葉の使命」
はみな相當に此處で果されてゐるのを感じるのである。

然し、彼は右云つた一本調子の歌を作らうとして——イヤ、彼の考へてゐるまゝの歌を何の氣なしにびよいくと詠み出づる事のあまりに無關心なために遺憾なく彼の歌の缺點を暴露して居る。あまりに無頓着なあまりに自由な（といふよりはあまりに疎漏な無知な）ためにその作られた歌は易々として平板單調な、一本調子な、内容空疎な、たゞごと歌に墮して行つてゐるのである。集中よりその例を引くべくいま餘りにむごたらしいのを感じざるを得ないまでにさうであるのである。折角出來たこの第一歌集を手にしたわれ等友人どもを何とも云へぬ失望の淵に沈ましめたのも謂はゞ一に其處から來てゐるのである。然り、彼はあまりに歌に對して無知であつた。あまりに輕々と取扱ひすぎた。いま少し言ふ。

それは單に「言葉や」「表現法」の問題のみでなく、今少しつき込んで「彼そのもの」の何處にかまだ／＼お疎末なところがあつた故であらねばならぬ。彼の感情が、彼の思想が、彼の生きかたが、生命に對する彼の態度や知識が、それを「歌」に盛らうとする彼の態度や手際が、薄つぺらであつたからであつたのだ。

彼は決して世に謂ふおつちよ、ちよいではない。それこそ、毛ほどもそんな所はない。唯だ、少しい氣な所がある。自己に對して安易過ぎる。何かを感じながら、感じ詰め様とせずにとゞふわ／＼と浮んで流れつゝ、而かもそれに我流な色をつけ、匂ひを添へ様とする様な所がある。進んで徹せず、

退いてまた徹しない。それに、ものを深く考へ様とせぬ彼の弊は案外に世の悪影響などを不知不識の裡に深く受け入れてゐる、イザ歌ふといふ段になつて無闇に最上級の形容詞や副詞を使つて大上段に振りかぶりながらいかにも誇張した云ひ方をする。内容の影のうすい所へもつて來て徒らに恐しい大きな言葉——單に言葉といはず不消化極る身振り手振りの表現法を行當りばつたりに使ふ爲に、その作物をば實に眼もあてられぬ滑稽な、安つほい悲惨なものにしてしまつてゐる。引例の要はない、隨所のページを披いて見よ、そのの眼につかぬ所は殆んど絶無と云つていゝだらう。

斯うした事などが、親しく彼を知らぬ人にいかにも彼を安つほく見せはせぬかとまで氣遣はるゝのである。今更ながら「歌」のすがたと「人」のすがたの離し難い微妙な約束を思はずには居られない。

さういふ危険はあるがそれが成効すれば右に引いた如き自然な、豊かな熱を持つて極めて主觀味の勝つたものとなる。それと共に彼の作に多いのは退いて靜かにもを觀る様な、ひそかに／＼われとわが心に親しまうとする様な寂しいものごしの歌である。寧ろこの方に彼の佳作は多いかも知れぬ。

心なき草木に身をやたぐふべき山の櫻の下にまろべば

心よく死を思ひたる曉の如くに人のなつかしきかな

地の上に春の夕の煙たつ樹のかたはらにねて身を思ふ
 ゆく春の風につらなりほろ／＼といへばと鶴の啼く胸の痛さよ
 心深うわが住みなれし青桐の葉の散りそめし家にとら鶏啼く
 曙の青葉のなかの板屋根に鳥つどへり啼くこともなく
 定かにも秋の虫なく眼の前の青き林のはつ秋の風
 野蒜の香背戸の畑に漂へり夕月の頃飢ゑて歸れば
 春淺き林のくまに立つ時のわがもの足らぬ目に雁の見ゆ
 おのづから言葉少なになりけり山に櫻の咲ける頃ほひ
 呼びとめて語らふ人もなかりけり道の柳の花ちるゆふべ
 藁枯木枯の音みなわれに親しみ深くなれるこのごろ
 野の畑に青油菜はみのりたりわが語り得ぬさびしき心
 笑はざる父の顔より逃れむと蛾をとりにきぬ青田の畔に
 歸り來れば秋風の吹く古家に誰も居らざりき子等をらざりき
 革の帶うすら冷くなりけり秋風の家に兔を飼へば
 この九月畑の豆を盗まれて腹立たしきに畑の虫鳴く
 父が手に畑の南瓜はとり去られ跡に靜にこほろぎの鳴く
 わが家の飯焚く煙ほそ／＼とわが落葉搔く身をめぐるなり

秋餅をつき一騒ぎして裏畑に出づれば晝の陽は黄いろなり
 この夜の深きにまたも風おこり落葉の村の晝の如き月
 木枯の風の寂しき萱刈りて雪がこひする霜月の朝
 わが馬もわが櫓もみな音を立て靜なる林の道を行くなり
 雪を掬ひて手を洗ひけりさて仰ぎ冬の夜の村の小き月見る
 赤き鳥啄つ木鳥の來りて樹を叩く煙の如く雪の降る日は
 木の葉散り過ぎ靜かになれば啼き出づる鴿をきく朝の食卓
 働けば身につき纏ふ勞れありおんばこの實の零るゝ秋の日
 遙かなる岩い木山い曇らし降る雪にいざやわが櫓乗りも出さむ
 かたはらの茶壺をとりてふりてみぬかの宿無しの犬吠ゆる夜半
 兎をば忘れて草にまるびぬぬ草をとりに來りて
 夏の夜の更けしづまりてやがて月山の端あかく入るあはれなり
 わが窓のうす青かるは我を待つ妻のさびしき灯なるらむ
 村雨も野末の風も秋の木にをり／＼來りわれ騒がせぬ
 雨につけ風につけても身にしむはわが軒に來る雀なりけり
 何がなし宮の落葉を踏みたくて出でゝ來れば里の子等ある
 町裏に海鳴のする秋の日は友が店ごと訪ね行かまし

假初に唄ひすてゆく行きずりの男の唄も多なりと思ふ
 錢欲しと思ふ心を吐りつゝ對へばしろき岩木嶺の雪

わが背戸の木に啄木鳥の來る頃となれり寂しき如月日和

斯うした歌を拾つて行つたらまだくゝ眼につかぬ澤山の數があるとおもふ。胸を張り額を擧げて歌ふといふ種類のものには前に述べた幼い缺點が出易いが、此等の、靜かに塵を落して歌ふといふ部類になると流石にそれが誠に少い。

加藤君には非常に熱情的な所と、まことに冷靜な所との二方面がある。それは前に引いた歌といま書き並べたこれらの歌とを比べて見れば直ぐ解る。その何れが加藤君の本質であるか、それは俄かに決すべき問題ではないが、歌の方面で若し私の希望を云へば此等の難の少い歌風より寧ろ危険性を帯びた前に引いた純主觀の詠みぶりを同君によつて更に洗鍊し更に高調して歌ひ出してほしいものと思ふ。いま此處に引いた種類の詠風は謂はゞ一般的な、誰でもが少し注意しきへすれば詠み出し得る側に屬するのを思ふからである。

彼の孤獨な、靜かに澄める心は隨所の自然物に常に安らかな宿りを見出す。かの單調を極めた北津輕の平野に在つて彼はこのためによく秀れた叙景詩を作つて居る。これは前に引いた歌の中にも數多

混つて居るが、今少し附加するならば次の様なのが目立つ。

鶏と鴉と啼きて明けむとす羽後の山脈あからみそめて

野分の後の水氣ふくめる遠木立しろき日影に見やる寂しさ

をちこちの刈田の面の水色の煙の中におりゐる鳥

きいゝとまたももぎ取る音がしぬ玉蜀黍畑の初秋の風

秋なれば斯くもあやしき水色に澄みたる煙ひねもす晴れず

丘を越え落葉を踏みつと立てば小學校の唱歌の聞ゆ

木枯の風を染めつゝわが庭のとゞ松のあたり夕陽かなしき

雪はれて一朵の雲の影落ちてさびしかりけり岩木川原は

薄々と雪降りみだれ門の内の籬の如き樹に月いづる

わが家の近くに來り啼く郭公あを葉に暗き家の近くに

馬鈴薯の畑の草とりわがすなり近くの野木に郭公の啼く

頻りにも蛙は鳴きて雨呼べり曇日の雲光り輝く

大空の曇日はよしうち煙り野邊の青木に觸るゝ風無し

鳶とべり秋のはじめの海原のごとく震める野の邊の空を

切株に腰うちかけて休らへばもの靜かにも鳴く鳥のあり

木枯の風吹きやみて靜なる月夜となりぬわがちさき窓

彼の作る叙景の歌にはみなその底に人間の匂ひがしてをる。いはゆる單なる景色の歌ではない。眼前の風物におもひをやつてゐる彼の周圍にも社會がある、家がある。一軒の戸主として、子とす夫とし、父としての彼がある。

桐の葉に明るく秋の雨降る日寂しや泣きて生るゝみどり兒
容貌おもてしのどこかすぐれぬ妻とゐて黙して春の雁を聞く宵

氣まぐれにわが兒の頬に唇つけぬ明るき窓に馬追とせば

無慾なるわが父の手より引受けていかにかせむと思ふ古家

無我なる事父の如くば尊かり米飯の如尊かりけり

母が畑の胡瓜をとりに行く後を子供の如くついて行くなり

いつになく沁々母の可懐しくついてゆくなり初秋の畑

土くれの如く無爲にあれかすと父は願ひぬ我の身體を

大粒の雨となりたる夕まぐれ軒に菊つる父はさびしも

はや父の寢覺なるらむマチすりて煙草を吸へる秋の靜か夜

この一巻の歌集に含まれた特色——よき方面のそれをば大抵右に擧げ盡したとおもはれる。いま一つ最後に、全體を通じてこの一巻の基調キトウをもなしてをるべきものを謂ふならば寧ろ可笑しいほどの正しさ無邪氣さと、寧ろ無知に近い根強さ執拗シツテウさがこの作者の生活に、その作品の根柢に横はつて居るといふ事である。初めに云つたこの一巻を通じての缺點——あらゆる幼稚や誇張も多くは唯だ讀者に一種の微笑か苦笑を強ふるに止つてさほどに深い反感を催さしむることの無いのは（意地悪く云へばまた別であるが。）一にこれにもとづいてゐる。十首のうち僅々一首か二首かしか出來てゐるものはなほどの不完全な作品でありながらなほ且つ何處にか人を惹きつけずにおかぬ強みもまた此處から出てる。云ひ得べくんばこれ實に質のよき東北人の持つ特色であるかも知れない。單なる無知と滑稽とに終つてゐないのはこの作者が東北人としての秀れた一人である事を語つてゐるものかも知れない。

詠歌に従ふ十年、しかも刻々と變化し推移し來つた過去十年間の歌壇の風潮を全然よそにしてそれこそ實に十年一日、こつくと自分獨りの世離れた道を歩いて來たといふ事は、それだけでも既にこの著者の、この歌集の占むべき極めて稀な獨特の境地であらねばならぬ。私はこれを尊敬すると共に、更にこの著者が果して如何なる態度に出でて今後の境地を開いて行くかに慎重なる期待を捧げねばならぬ。

加藤君は年齢に於てもう若くない。従つてこの問題は他の多くの場合に於けるより餘程の緊張さを持たねばならぬ。私はこの『加藤東籬集』一卷を以て加藤君の全部だとはどうしても思はれない。彼は要するに今までは歌について餘りに何も知らなかつた。まつたくの子供であつた。而してこの第一歌集を出した事によつて僅かにその眼が開きかけた事の様考へらるゝ。彼自身、この一卷を手にして寧ろ感無量のものであらう様に考へらるゝ。寧ろ不思議なる人としての彼が生命のみづ／＼しさを信じ、彼が持つ「素質」のなほ處女地の如きものなるを信じ、私は此處に改めて新たなる尊敬と期待とを彼に寄せて、彼の健康を祈るものである。(天正八年六月二十三日)

和歌評釋

その一

圖書館の大きな時計のもとにゐてしんと本
讀む眞黒き頭

圖書館のがらんだうな大きな室、其處にひつそりと集つてゐる大勢の人たち（自分もその中のひとりである）、何となく息苦しいやうなその場の沈黙——さういふ場合にふいと顔を擧ぐると向うに大きな時計が懸つてゐる、そしてその直ぐ下にしいんと何かに讀み入つてゐるひとつの眞黒な頭が眼にいた、といふのである。何でもないことだが、あせらず巧まず、寧ろぼんやりとその時の自分の眼についたげを云ひ下したなかに、その場の空氣も、それに對した自分の氣持も誠によく表れてゐると思ふ。この作者は常に自分からも、を遠くに引き離して眺めながら詠んでゐる。うろたへてその中に自分自身飛び込むことをしない。だからその眼は常に澄んでゐてその心にはとり亂したところがない。

だから歌の上に寫し出された景象はよく明瞭で、それを取り扱つてゐる言葉には何處か心憎いゆとりがある（まゝ、そのゆとりが過ぎて駄洒落や空語に近くなつてゐるのではない）。次にあぐる母を詠んだ數首の中にも、さらぬげに云ひすてた中に誠になつかしい心が満ちてゐると思ふ。

早起の母は乏しき灯のかげにひとりさらく
と茶漬食します

早起の母は茶漬にここだくの鹽ふりかけてさ
らさらと食す

乏しらの灯かげに母が面見ればつばらつばら
に見ればかなしも

先生が笛吹きければ生徒等は集る集るひなた
のまんなか

先生が笛を吹いた。それを聞くと今まで散らばつて遊んでゐた生徒どもがばらばらと四方からとび集つて來た。見て居ると何だかその處ばかりが一際日の光も濃くなるやうだ、といふのだ。集る

集るひなたのまんなか、といふ十四音のなかに作者の躍つた心持がよく出てゐる、飛んで集る雀子のやうな生徒達も。

しまりなき日ごと日ごとになにものかわが身
をぬけてとびゆくごとし

だらしない日夜を送つてゐる。さうかうしてゐるうちに、何だか、自分のからだからほつくと何やら抜けて離れて行くやうだといふのである。斯うしてゐては爲様がないと思ひながら、なか／＼その不快な境地から身を脱し得ない。さうして、日ごとに自身の生命のちからの褪せ萎えて行くのを悲しんだ一首と思ふ。ぐたりとしながら、而も常にいら／＼した不安さを忘れ得ない時の心持が先づ一通りは出てゐるやうだ。斯ういふ種類の歌は餘程心を押しつめて混濁をとり去つてから詠んだのではなくては、多くは空言空語に終りがちのものである。この作者もまだ全くその境地を離れ得てゐるは見られぬ。

遠見せよ近くを見るなといふまゝに霞む香貫
の山を眺むる

眼を病んだ時の作。幼い歌だが、私には先づその素直さがありがたい。而かも素直に作らうとして
 のそれでない。まつたくふらくと出て来た純粹の心そのものであるのだ。近くを見てはいけない、
 遠方を御らんさいと云はれてその通りに病い眼をあげて見ると、遠くの方に香貫の山が霞んで見え
 て居る、といふのであるが、さうした場合の静かな景情がよく表れてゐるではないか。では俺もひと
 つ素直に幼く詠まうかな、といふのでほい／＼産出したのでは、斯のしんみりした味ひは到底持つこ
 とは出来ない。歌はまことに正直なものだ。

風もなき冬の日だまり石垣にもたれつ、見る

青海さびし

其處には風が少しも落ちて来ない。そしてほとりと日光が澱み溜つて居る。その石垣にもたれな
 がらぼんやりとして眺めやる冬の海のさびしいことよ、といふのである。斯様のものをば斯う一本調
 子にぐつさり、と云ひ下してしまはないで、さうした場合の感觸、即ち自分の身に感ずる日光の色だ
 か、匂ひだとか、温かさだとか、若しくは石垣のそれ、或は眼の前の海に對するそれ、それらをもつ
 と小きざみに歌つた方が効果のあるものであるが、これだとして決してわるくはない。少くとも嘘を云
 つたものでないだけの強みをばこの一首は確かに持つて居る。巧拙にかかはらず、しんから身に感じ

たことを云ひさへしたら不完全ながらに生命のあるものであるのだ。

孤りなる生きのさびしさ飲みそめし寢酒の癖

も春となりにけり

こゝろもちをよくわかるが、さりとてひとりなる生きのさびしさなど、大上段に振りかぶるべき場
 合でもないと思ふ。もつとほかにしつくりした言葉は無かつたか知ら。春となりにけりも大づかみす
 ぎる觀がある。ひとに同情を強ひる無自覺なずるさがある。

夜を寒みたらちねが手の霜やけに塗る獸のあ

ぶら悲しも

恐らくけだもの、あぶらが云つてみたかつたのではなからうか。次の一首は見たところは淡いが正
 直だと思ふ。

いつになく和めるこゝろネクタイをかへてつ
 とめに出で、ゆくかな

眞夜中といまなりければ飯を食むいやかしま
しき工場の隅に

身もこゝろもつかれはて、はわづかなる隙を
ぬすみて窓によるかも

調子の引き緊つてゐるのが難有い。それも此頃流行の強ひて高まらせた形ばかりの高調でないのが好ましい。この二首に限らずこの作者の前號の作は（今號のも）みなよかつた。寸分もたるみのないその心が見えるやうであつた。

頼ぬらし寂しき朝を起きいでぬさまさまの夢
を見てしものから

種々雑多な夢に襲はれて、鬱々とこの朝を起き出でた、氣がつけば何やら自分の頬は濡れて居る、といふのである。夢のうちで泣いた涙に氣づいたこと、いひ、あゝまた今日も明けたのだといふやうな重い心で見つむる朝の日ざしといひ、かなり複雑したこゝろもちをよくすつきりと歌つてある。

衣ずれの音して友の起きいでぬさびしき朝に

歩み入るはも

同じく朝の寂寥を歌つた一首。眠つてゐるともなくさめてゐるともなくうつ／＼としてゐるとうす暗いなかにこそ／＼といふ衣ずれの音がする。ア、もう友は起きたのだ、と思ふと、また今日一日の寂寥のうちに歩み入つて行くそのうしろ姿が眼に浮んで来る、といふのである。

その二

濫き朝餉食し居れば裏畑の麥はみどりに日に
煙りたり

郷里に歸省した時の作。何の他奇の無い、すら／＼とした一本氣の歌だが、なかなか斯う軽く歌へないものだ。朝の御飯をたべながら、見るともなく眼をやると、すぐ縁さきから續いた畑の麥は煙るがやうに青々と遠く眺めらるゝといふのだが、御飯から立つ湯氣も縁さきから麥畑にかけて照つてゐる早春の朝日の色もさながらに自然のあたゝかみを持つて目に浮んで来る。平凡な、そして靜かな作だ。イザ歌に詠まうとすると、大抵の人は多少にかゝはらず見えを切るものである、きまりをつけるものであるが、この作者にはそれが無い。他の作もみなさうだ。

おだやかに日の落ちゆけるこのゆふべ庭に出

づれば潮鳴り聞ゆ
 煤けたる提灯さしよせふるさとの風呂にひた
 れば夜の親しも
 きさらぎの空青々し日のひかりすかせば羽虫
 群れつゝ流る

神崎を過ぐれば早も煤煙にうすぐもりたる大
 阪の見ゆ

大阪の弟を訪へば路次の奥まひる小暗く雪は
 降りつゝ

この作者の詠みぶりも前のとよく似てゐる。何の嫌味も無い。がこれが過ぎれば例のたゞごと歌(私
 の謂ふさうですか歌)になり易い。心を靜かに保つてゐて詠むと同時にその心の張りを失はぬやうに
 注意せねばならぬ。この二首は但馬から大阪の弟を訪ねた時の作、作意は説くまでも無からう。

しょうくくと雨に濡れつゝ、麥畑のよく見れば

そこに雲雀がゐるも

蕭々と降る雨に眼の前の麥畑は一面に濡れ浸つてゐる。ぼんやりと雨を見、麥を見してゐると、オ
 ヤくツイ其處に雲雀がゐるぢやないか、といふ歌。この作者は平常はどちらかと云へば才の勝つた、
 謂はゞ俳味のある作をする人である。この一首にもそれがほの見えて居るが、嫌味になる程度に及ん
 でゐない。才氣走つた、乃至俳味のある作といふと、一寸見たところは引き立つが、多くは底の淺い、
 臭いものになりがちのものである。でも、前號のは概してみな佳かつた。

晝餉食し出づればいつか鶴鶴二つとなりて屋

根を歩み居り

いしたゝき一羽がとべばまた一羽ばらばらと

びて屋根を去らずも

風のかげの土手にまろびて小半日舟を見て居
 る身も世も忘れ
 ひとしきり舟の往來の絶えしかばわれもさび
 しと立ち上りたり

この作者も腕の冴えた、眼の利いた作をする人である。大きくはないが、常に齒切れのい、歌を詠む。唯だ、風をよけた土手の蔭に寝ころんで半日近くも舟を見て喜んでたといふのだが、身も世も忘れといふ結句にこの作者の面目はよく出てる。子供のやうに舟を見て喜んでた、といふ自分に對してにやりと漏した微笑が即ちこの結句となつたものと思ふ。永らく病んでゐる人と聞くと、一層これらの歌に點頭かるる。自分の居る下宿屋の娘が海苔とりに行くのを見送つては、

病み上り美しき吾妹が海苔とりに出でゆく日
なり風な吹きそね

と歌ひ、その海苔とりの側に出かけて行つては、

はしけやしわが見に來れば舟寄せて乗らずや
君と問ひし妹はも

など、馴れたものだ。

明るさをしたひてひとり山に來ぬ鶯の啼く二
月の山に

山に來て山松原の枝わたる鶯の羽根ひかるを

見たり

山に來てうれしきものは松原の枝なき渡るう
ぐひすの聲

すがすがし松のこむらの奥に聞く向つ谷間の
うぐひすの聲

一人の美少年を見るやうな歌だ。怜悧で、瞳が澄んで……幼いながらによく細かで、自然を失はぬ程度の粉飾を施すことを忘れて居らぬ。眼さき、指さきの巧を楽しむのに甘んじなかつたならば、たいしたことにならうと思ふ。

うらゝ日の畑に雲雀のこもり聲姿見えずも麥
深ければ

空をゆく由布山風の寒ければ雲雀は畑にこも
り啼くかも

似てゐるが、前者よりやゝ硬い。而して、より多く小手さきの冴えを楽しまうとする癖がありはせぬかと思ふ。どこまでも自然で、どこまでも全身的で押し進んで行つて欲しいものと思ふ。

紅椿ひとつ綺麗に見えにけり折りに行かうか
寺の籤かげ
友の呼ぶに走り降れる梯子段三段目よりすべ
り落ちたり

この作者はまだ高等一年生の娘さんであるさうだ。さう思つて見ると、この幼い歌がまことに快く破顔一笑されるのである。

道のかたへに小犬よけたれば大犬はのそりの
そりと歩みて行けり
頭より尾まで嗅^かみて犬と犬なんとも云はず別
れて行けり

なんともない歌のやうだが、面白い。作者の靜かな心をなつかしく思ふ。

わが前に一かたまりの埃立つ春まだあさき裏

のほそみち

これは何でもない歌のやうだが、いかにも好いところを見附けてゐる。イヤ、見附けてゐると云つてはわるい。常にその心を新鮮に且つたるませずに保つてゐたならば、斯うした好境地が斷えず自づとその心に映つて來るであらう。

月々集つて來る歌だけでも、千紫萬紅、實にいろ／＼なのがある。實にうまいと思ふものもある。が、たゞ憾むらくはこれらの歌がみな小さい。底力のある、器宇の大きいのが誠に少いのだ。要するにこれは人間そのもの、問題になつて來るだらうが、飽くまでも偉大な生命を持つた人が出て、山の様な、また海の様な、作を見せて呉れるのが待たれてならぬ。而して、これは單に本誌の歌のみでなく、現下の歌壇一般に對して缺けてゐるところなのではあるまいか。

その三

心こめ大股に道も踏み急ぎやすみなせそと心
ひきしむ

溪川の古りぬる橋もいそぎゆく身にしあれ、

ばあやぶみもせず

今のわれは改札口のひらくをもたぬしく思ひ
て汽車まつ身かも

このほか尙ほ數首、いづれも作者が舊友と逢はむがために或る場所へ急ぎゆく心を歌つたものである。數首とも、いづれもみな素朴卒直、くきりくきりとその眞情を一首々々の上にうつし出してゐる。白狀すれば私はこれらの歌が果して完全なものであるか否かを知らぬ。けれど、昨今の私は一首々々のちんまりした、見たところのきれいな作より、斯うした活きた心そのまゝに躍つてゐるやうな、生々した歌により多くの同感を持つてゐるのである。云ふだけのことをつぎぎと云つてしまふ、といふ風の飾りのない平淡な、而して力の満ちた作をありがたく思つてゐるのである。正直私はこの作者の歌を讀み終へた時、心の踴躍を禁じ得なかつた。いま再び見て、その感を繰返してゐるところである。

高く笑ひ梯子を登る友の聲に學びやの日の手
にとるごとし

心ゆるし語る言葉も折榮えてすればいよいよ
たぬしき我等

重みあるなつかしき聲をきくまへに深くたの
めり友のいのちを

唯だ、斯うした風の歌を作らうとして作り損へば三七八頁所載「いろいろの歌と人」の中に引いた B——君の作に墮る怖れがあると思ふ。同じづきくと云つてしまふといふなかにも、うろたへ騒いで取り亂したまゝに云つてしまふのと、その場の自分をよく自分の眼にうつすやうな態度でいそぐしながらしかも靜かに云ひ出るとでは大變な違ひがあるものである。

毒を飲むほかにこの世にたのしみはなきもの
として死にし君はも
死ぬるべき命と知りて玄海の濤の遠音を聞き
けむその夜
はるばると聞ゆる濤の遠音さへ死ねよ死ねよ
と聞えしものか

これは自殺せし友を思ひて詠める連作中の一部である。前のより餘程力の無い云ひかたではあるが、

平凡な、謂はゞ座談平語とも見ゆる調子のなかに矢張り掩はれぬ眞摯なこゝろが響いてゐる。これが唯の座談平語となるもならぬも、要はたゞ作者の態度と技巧とにあるだけである。

わらはれても悲しまれても今更にさはりはなしと思ひ死にけむ

死を思ひて頭重ればふらふらと呼子の濱へい行きし君よ

雨はれの朝の空気を爆々とうちひゞかせて飛行機来る (A—君作)

爆々と音いさましく飛行機のこの朝きたる空はかゞやか

電光の眞黒雲まろくもにきらめけば墜ちたりといふ飛行機あはれ

いなびかり黒雲黒風に引裂かれ眞逆さまに墜ちたる飛行機

蒼ざめし顔して來りきぞの夜も眠らざりしと云へる友はも (B—君作)

病める身に黒きマントを引き廻し歩める友を見つゝさびしき

鉢植のチュリップさげて病める身に黒き帽子をかゝむり居るも

ねもごろに鉢のチュリップ床に置きその蒼ざめし顔は笑みつつ

あをざめし友の顔よりさびしきはそのかゝむれる眞黒き帽子

いづれをも同じやうな心に於て喜び讀んだ。私には斯うした型の連作を作つたといふよりも、寧ろ斯うしたみづ〜しい心でぞく〜と作歌したといふことがうれしかつたのかも知れない。詮ずればいろ〜これらにも缺點があるやうだが、私は先づその佳い所を云ひ度かつた。

一人ゐるこゝろ著しるしものつそりと墓が穴より

田に這ひ入れば

のつそりと墓が穴から出て来たがやがて田の中へ這ひ込んで行つた。と、其處に自分だけたゞ獨り居るのだといふ氣持が急にはつきりして来た、といふのであるが、穴から田に這ひ入る墓を前にした作者のしいんとした有様がよく鮮かに出てゐる。

田の水にむらがりて居るひきがへるおのれお

のれとつがへるあはれ

かたすみに鳴ける蛙のひそまれば春としもな

き田のけはひかな

田うちびといまだ乏しみ田の畔を烏わたりて

動きけるかも

みな細かで、そして柔かだ。

ひとところ黒雲うごき櫻咲きつよく吹きしく

春風の音

菜の花のいちめんにはひかり揺れてをりふみ讀

みつかれ窓ひらきしに

この作者の歌はずつと前から餘程他と變つてゐた。びく／＼と動きやめぬ神經其ものが歌となつたと思はれるのが殆んど全部であつた。此頃は割に平凡に（よき意味の）なつて來てゐるのだが、兎に角この二首だとして幾らか變つてゐると見てよい。第一首、青空には一ヶ所だけに黒い雲が浮んで居る、地には櫻が咲いてゐる、その間を烈しく（春風の音といふのでさう思はれる。）春の嵐が吹いてゐる、といふのだ。これを繪にして考へて御らんさない、文展の中には到底入りさうもない。よし入つたところだ。一點か二點の異つた作品として取扱はるべき種類の繪ではないか。第二首、讀書（だらうと思ふ、ふみなど、いはずに書籍なら書籍、手紙なら手紙とはつきり解るやうに詠みたいものだ。）に勞れて窓をあけると、窓前一面の菜の花に日光が流れてゐるといふのだが、いちめんにはひかりゆれてをりといふのを見てゐると、何だか唯だ一面の菜の花といふでなく、さうした一面の菜の花のなかの一本々々がそより／＼と光りゆらいでゐるのを感じるのである。他念なく一心に詠むといふこと、もしくは新鮮にその感覺を働かせるといふことは、知らず／＼の間に斯うした機微を讀む人の心に感ぜさせるものである。のほ、んの作にはそれが無い。

山なかの一もとさくら山櫻誰も見に來ずわれ
の來て居る

直譯すれば、山の中に一本の櫻がある、見ごとな山櫻だ、誰もそれを見に来てゐない、自分だけ來てゐるのだといふのだ。妙な云ひかただが、それでもさうしたなかに一脈の氣分が動いてゐると思ふ。山の深さも、櫻の静けさも、それにたゞ獨り對してゐる一個のすねものの姿も、小さくはつきりと出てゐるではないか。(さうだ、この人の歌は決して大きくはない、槍薙刀乃至二尺八寸三尺五寸のわざものではなくて、小さく鋭い七首である。)

みなわるくはないが、作者に云つて置きたいのは、斯うして段々小さきみに入つて行つたらばやがては身動きの出來ない、苦しい凝りに出會ひはしないかといふことだ。ほどくで大きく背延びがして貰ひたい。遠い峰でも望む氣で、腫をひとつ轉じて貰ひたいものである。

それぞれに花を見ると動き居る人の姿はさ

びしきものよ

ちつとして櫻の花をながめ居るに誰かうしろ

でさゝやき居るも

さびしくも横道をして崖に來て谷底の川を見

つめ居るかな

谷底のながれの音を聞いてゐるしが疲れの出で

てねむくなりたり

東風寒き夜半にはあれど電柱の球にはすこし
蟲の來て居る

その四

青田中をさな兒一人走り來てくるりととんぼ

がへりしてをり

青田中鍬を光らす農夫あり空には烏大圓をゑ

がく

この人の歌を詠む心の中には餘程ふざけた所が混つてゐる。少くとも眞剣でなくうはの空で手先で作つてゐると思ふ。歌の中心點、即ち作者の心の光といふものがどの一首にも宿つてゐない。青田の中に子供が來てとんぼがへりをした、といふ事に作者が異常の感興を催して、つまり實際に作者の心が光を發してこの一首となつたのなら今少し歌に力があるわけだ。ところが何もありはせぬ。青田といふものの子供だのとんぼがへりといふものが並べてあるだけで、それ等を貫いて流れてゐねばならぬ作者の主觀は心の力は影も形も出てはゐない。第一くると蜻蛉返りしてをりなど、いふ間

のぬけた調子があるものでない。く、り、と、と云つたら刹那の感じでせう、其處へ持つて来て、を、り、など、間だるい永續を意味する言葉の使はる、道理は無いのである。想ふに青田だの蜻蛉返りだのといふものを見て、こいつは一つ歌になりさうだぞといふ程度で作りあげたものであらう。即ち作者の心は留守になつて唯だ眼と手とが動いたわけである。次ぎの一首も田の中で百姓が鋤を光らしてゐる、が、どうもこれだけでは乃公の歌にはなりさうにない、何か近所に無いかなア、と仰いだところが烏が、どうも其處で即ち空には烏大圓を、ゑ、が、く、となつたわけだらうとおもふ。もう少し突込んで考へれば、とんぼが、へり、とか大圓を描く、とかいふことが云つてみたいばかりの爲事であつたかも知れない。若し作者が鋤の光るのを見て何か心に感じたのなら何も勘左衛門公の援助を乞ふ必要はないのである。歌はもとく、三十一文字しかないのだ、なるだけ道具立をば少くしたいところではないか。

作者N……君よ、君は此頃言葉を使ふのが少し上手になりかけた、と同時に初め君の下手時代の作中にあつた眞摯さがなくなつた。即ち歌といふものを作るそもく、の素質を失ひかけて來た。それでも尙ほ君は一般的にいほゆるお上手にならうとするのか。

われは悲し百姓の家に生れるてみんなにまざり稼ぐことせず

み、づから弱きを知りて百姓といふが悲しや

野良の秋晴

こ、ろをひと所に集めて、靜かに詠み出づる事をしない歌は大方例の「さうですか歌」になりがちである。(解らない人があるかも知れぬ、さうですか歌とは普通いふた、と、歌のことである、さうですか)とよりほかにその歌に對し返事の出來ない種類の歌の事である。(この歌なども歌つてある事はみなかりそめならぬ事のみである。が、たゞ斯ういふ一首々にせられてみると一寸御挨拶に困るのである。詠み出づる時の心が散漫ではなかつたらうか、たゞ「フィ〜」とひとり言でもいふ氣持で作られたのではなかつたらうか。今少し引き緊めて、自分で自分の心を洗練して、消化して而して後靜かに一首にまとめる心懸があつたら斯んなつかまへ所のない歌は出來なかつたらうと思ふ。斯うした作が寄稿の中で一番多い。この作者などはまだ物の解つてゐる方だ。

かくも戀ゆれかゝる日君に逢ひたらばわがあ

やまつにかへる日あらめ

おほかたの戀さびしもよ月見草さけばとて泣

く君にあらなん

戀ゆれは戀ふれ、あやまつはあやまの誤りである。あやまつなどは東北の人には止むを得ぬあやまつだといつてしまへばそれまでだが少し心すれば直せぬことはないと思ふ。戀ふれ、あらめは特別の必要でもなかつたら文法からは戀ふ、あらむとあるべきである。一首の中に誤りが都合四つあるわけだ。それは尙ほい、として一首の大意はどういふのだらう。斯んなにも戀しく思つてゐる、斯ういふ日に君に逢つたなら……、サテそれからどういふのだ。要するに解らない。斯ういふ一人合點の作も今少し一首々々を大事に考へて心をひそめて作つたならば出来ぬ筈だと思ふ。第二首君にあらなんも君にあらざらん、の思ひ違ひか何かと思はれるが、それは先づとして矢張り一首の意味が解らない。全然何か思つてゐることを云ひ違へてゐるか、若しくはおほかたの戀さびしもよ月見草だの咲けばとて泣く君にあらなんといふ様な美しい歌らしい口調や詞句に眩惑されて作つてゐるのではないかと思ふ。

作者よ、これは私の推察だから違つたら御免なさい、君は君の地方で一方の牛耳をとつてゐる人らしく想はれる。種々の地方など歩いてみるとよく解るが、さういふ地位に立つてゐる人に私は割合に同情を持つてゐるのである。で、どうかしてこの雑誌の上でもそれだけの待遇をしたいと従来も人知れぬ苦勞をして來てゐるのであるが、さういふ人はそれだけにまた自分の方でも一倍の努力をして欲しいものだと思ふ。さうでなくて、徒らにその地位のために自ら驕り、自ら悶え、他を恨むなどのこ

とがあるとするれば、即ちその人自身の不幸だと謂はねばならぬのだ。小さな自身の境遇や周囲の批評などに悶々するのは誠に愚かである。何故それらを一氣に脱ぎ捨て、一本立の自然兒として立ち表はれて來ないのか。私は時々不思議に思ふことが多い。

とりどころひとつもあらぬ人間と思ふ心をし
みじみ叱る

笑ふ時腹に力のなきごとく淋しき日なり風の
聞ゆる

風吹けば二階の居間のほのゆれてほのかにあ
はれ身にひびくかも

一杯の水にあきたる後のごと何かに厭ける心
地す今は

前號を通じて私の眼を引いたのはこの人の作であつた。而も急轉直下(直上か)の變りかたであつたので一層驚かせられた。全體を通じて、いかにも腹の底から出た様な、嘆きといふべくあまりに沈んだ、おちついたこの嘆息の聲を聴いて、自づと心を正しうせらるゝのを感じた。見よ、その歌には

一點の銜氣がない、見えがない。見て呉れのカや光が被せてない。たゞ、自分自身を對手にしたゞけの眞實の聲である。自分の生命を見守り、自分の生命に向つて語つてゐる寂しい獨語である。完全な歌としては尙ほ幾分不消化不洗練の所がないではないが、イヤに歌らしい歌、徒らに讀者のみを對手にして作られてゐる歌の流行する昨今に此等眞摯の作を見出して私の胸は異様に躍らざるを得なかつた。

耕しのわがそば近く今日もまた一羽の鴉いづ

こよりか來

そば近く來つる鴉をこよなくもなつかしみつ

つわれ耕しぬ

塗りたてし畔を歩める鴉さへ憎からぬまでこ

ころおちるぬ

これも上手な歌ではないが眞實の歌である、小さくともわびしくとも何處かに人間の姿の動いてゐる歌である。次の數首などもまたさうである。

雨晴れて田へ來ぬ父のすがたはも遠く畑に見

えいでにけり

ふる雨のはげしくなりてしよんぼりと遠くの

人も見ゆる田の中

ふる雨のはげしくなれば鋏の手をしばらく休

め耳澄ませけり

たまきはる生命の病めばいぶせかるわが生み

の家に歸り來にけり

夕さればひと日の仕事なし終へし父をまこと

の心に迎ふる

草も木も土にひれふす犬吠のみさきの風をお

そろしと思ふ

白き波に嘯まる、岩の黒々とかしらあらはす

犬吠の海

かなり不器用な歌だが正直だ。正直だ、といふ中にも唯だの饒舌では困るが、これらはみな相當に

魂の眼のあいてゐる正直である。病氣をしてわが生家に歸つて來たといふだけの一首の裡にも相當に時間も含まれて居り、背景も出てゐる。犬吠崎の歌などは子供の描いた風景畫の様な稚趣と新鮮とを持つてゐる。眼の澄みと心のおちつきとがなつかしい。

隣りにもひとは籠りて夏眞晝たまたま蠅を打

つ音聞ゆ

君待つとつけし灯にしみじみとわが掌を見入

りけるかも

蠅うちの一首は調といひ何といひ間然する所のない歌である。森閑とした夏の眞晝の景趣も、それを背景にした作者の面目も、一絲亂れぬ清澄裡に浮んでゐる。次の、灯かげに自分の掌を見入るといふのもまた女人ならではと思はる、位微妙な作である。

その五

故郷の母のいたつき癒えたりや旅に悲しく秋も更けぬる

秋の風さはな吹きそね故郷の古き家ぬちに我が母は病む

薄日さす古き家ぬちに病む母の秋をさぶしみ

寝ておはすらむ

みな餘りに安易である。他郷で病母を思つてゐるといふその心に同感が持てぬ。歌に表れただけを主とすれば、加減のお座なりを云つてるとしかとれない。また作者が眞實に母を思つてゐる（それは母だから何か思はないことはないだらうが。）といふのなら、歌が嘘を云つてゐるわけである。（つまり技巧が足りないのだ）何となれば眞實に思つてゐるといふだけの強い調子を此等の歌は持つてゐない。旅に悲しく秋も更けぬる、といふのんきな調子でやられると少し忙しい時などには、ハイ々さうですかとツイ言ひたくなるではないか。秋の風よ吹いて呉れるな、といふのも、秋をさぶしくといふのも作者眞實の心かどうかを疑ひたい様な氣までして來るのである。秋の風よ吹いて呉れるなど空を眺めて眼を細めるより、熱が出て呉れるなどか、又は母その人に就いて今少し密接な固有な聯想の起るのが自然でもあり、歌となつても力がこもると思ふのだ。また、普通相當の年輩の人が秋を特別に淋しく思ふなどといふのも、少しわざとらしくはあるまいか。これらは少し立ち入りすぎた批判ではあるが、軽い調子のあまい歌を見てゐるとツイ斯うした穿鑿もしてみたくるのである。い、

氣持で歌を作るといふ事もそれが非常に強い力を持つてなら、即ち止むに止まれぬ力を持つてなら、幾らあまくとも宜しい。でなくて唯だフイ／＼としたい、氣持でいかにも詩人らしい、氣持か何かになつて作つて行くと、ともすると斯うした軽いものになりがちである。

なく蟲の暗夜更けたりなやむべき心は澄みぬ

われねむとする

更けたればぬるべきものを蟲なけば窓おしや

りぬ此闇ふかし

鳴く蟲の暗夜ふけたり、はまだいゝとして、なやむべき心は澄みぬは變だ、悩んでゐる心は澄んだと云ふ意か、それだとべきが可笑しい。亦、そのあとへ突然われ寝むとする、と結んであるのも變だ。句がバラ／＼で、一向一首の統一がない。バラ／＼の句そのものもまた随分不純粹なものである。歌を作るには今少し言葉に鋭い感覺を持つてほしい。畫工が畫をかくのを考へて見給へ。繪具がパレットに出る、それを刷毛に受ける、そしてカンバスに向ふ、その時はもう繪具でなくなつてゐるのだ。畫工のたましひ、即ち畫工の描き出さうとする彼自身の主觀そのものとなつて一個の畫を形作つて行きつゝあるのではないか。歌よみは繪具の代りに、言葉を持つ。言葉はその時のその作者のたま

しひを表はすべき大事の使命を持つてゐるのだ。それを無機物扱ひにして、粉か土くれ同様にこね廻さうといふのは無理である。この一二首に限らずこの作者は何か意味深いことを云はうとしてはゐるらしいが、ごみ／＼してゐてすべてその意が通らない。

魔睡劑にてねむりしあとの頭のつかれ眼にし

ろ／＼と秋の風吹く

さうわるい歌でもないが、魔睡劑と書いてくすりと訓ませるのは無理だ。魔睡劑といふのを利かせやうとならばはつきりさう云つたがよろしい。が、この場合にたゞ藥の一字でも事は足りると思ふ。朝月と書いてつきと訓ませ、秋風とかいてかぜと訓ませやうとする類をよく見かゝるがこれらはすべて無理だ、私はみな消してゐる。秋風なら秋風とはつきり一首のうちに詠み入れるがよろしい。卑怯な、または瞞着の態度をとつてはいけない。頭のつかれも可笑しい。づと云つて直ぐ頭と解りますか、「私は少し頭が變だ」など、どうも變だ。明瞭を缺くばかりでなく、づといふ發音は餘り快い音でない、何となくきたならしい思ひを誘ふ様だ。同じことならもつとはつきりした、自然な、そして心地のいゝ音を使つてほしい。これも言葉に對する敏感を缺いた一例である。

夕の森風のまにまにまふ落葉笠かたむけて人
は過ぎける

西行法師、といふわけでもないが、薄黄葉した森のはづれを笠傾けてゆく旅法師の姿など聯想せらる。落葉がするからといつて笠を傾けてゆく人は先づ現代にはない。謂はゞこの一首は落葉に對する作者の趣味觀だとも見るべきであらう。趣味も強ちにわるくはない。が、斯うした月並の、團扇の繪にでもありさうな程度では心細いと思ふ。同じ繪模様この場面でも斯うした團扇繪風の人物でなく、夕風にしきりに落葉してゐる森蔭に一人の人物を置いて、これを新しい畫、ゴッホでもない、コロでもいゝとして眺めて御らんさい。どれだけそれから受くる印象が強いか、また鮮かだか。

白壁に釘をさすごと一すぢにわが胸に吹く初

秋の風

深林に一本の枯木立つごとくわが生くことの

淋しさ極まれり

血をこのむ人の亡びに似たるかなをどりつ沈

む秋の落日

この作者の歌は全部殆んど比喩から出来てゐた。比喩もよく生かして使へば悪くはないが、多くは單なる興味に留つて極めて幼稚な淺薄なものになりがちである。此處に引いた歌などはまさしくその部類に屬するものである。何處にもうるほひのない乾いた、寧ろ氣味の悪い比喩のみである。一種の幼い概念からのみ出てるからである。前の落葉の歌でもこの比喩の歌でもその人の鑑賞眼の甚だ低いのを示して居る。この低い處から脱けたならば、諸君の今まで知らなかつた新しい、廣い世界が必ず諸君の眼前に展けて来る。それを信じて一日も速くその脱出を企て、ほしいと思ふ。

今號の歌で眼についたのは末の郎子君と河脇萍花君とであつた。河脇君は全體としてよく郎子君の一首一首見るのに興が深い。前號の槐の歌や、わが宿を訪ふ人々はの歌でもみな眞珠か何か彫りつけた様な明るさと細かさを持つてゐる。今號の下り鮎の歌でもさうだ。

遠つ瀬の音をさやけみ下り鮎い群れて下るけ

ふのよき日に

川下に網を張られて逃げ上る鮎はかなしもけ

ふのよき日に

など、いかにその一句が、その一首が、かなしく澄んでゐることか。うら、かに晴れた平野の川、

芒の穂が光り、小石の粒が光り清らかな水が流れてゐる、その小さな澄んだ遠景が双眼鏡か何かを透してのやうにはつきりと胸の奥に映つて来る。さうして、さうした光景はとりもなほさず作者の心の反映ではないか。その光景を通して作者の心が出てゐるのではないか。

河脇君のは一首々々は一寸引けない。三首なら三首、五首なら五首、まとめてみると其處にや、あらげづりな作者の心のはつきりと浮んで来る。夕映の雲の下に山の嶺が静かに聳えてゐる様な、といふと少し大き過ぎるが、何處やらに沈んだ重々しい氣分を彼の歌は持つてゐる。初め幾らか帯びてゐた浮華な調子（それは恰も水に油の浮いてゐる様なものであつた。）が此頃殆んど除れて來た。いま少しみがきが、れば難有いと思ふ。たゞ硬くなりたまふな。

その六

小さな籠にかはれてなき急ぎ死にいそぐ蟲の哀れなるかな

いくそばく命あるぞとなき急ぐ松虫の聲をき

く寝ざめかな

秋たけていまだも吊れる青蚊帳の床にめざめ

て聞くは松虫

小さな理智と小さな感傷とを強ひて働かせて作つてゐる、といふ觀がある。形はみな整つてちんとすましてゐるが、慘しいかな血が通つてゐない。小さく固まつて、極度の近眼鏡の人が細字でも書くやうに、眼と指さきとのみがつ着いて、そこだけ働いて作られたのを感じる。見る方でもそれだけの部分としか見ない。四肢五體を寛やかに置いて、心を開いて讀むといふ自由も活氣も與へられてゐない。みな、歌の、作者の罪である。

川千鳥まなくひまなくしば鳴けばまた思ひ出

し汝なりけり

吉田河たぎりうづまき流るれば心もしぬにい

まし思ほゆ

二首愛人たま子の爲に、と詞書がしてあつた。また思ひ出し汝なりけりの出しは出すか出でしか、この擬屋さんに不似合のことである。この歌も形は出來てゐるが、一向その眞情が通じてゐない。斯うした切口上で見えを切つて居るあはれな作者の風貌だけが僅かに想見せられる。そしてそれはもとより歌の志す所でなくまた作者の狙ふ所でもないと思ふ。言葉や調べがもの／＼しいだけに、却つて

彼の祭日過ぎての山車屋臺が埃にまみれて立つてゐる慘めさを想はせられた。斯うした古めかしい堂々たる歌の言葉や調べを私は一概に否定し去るものではない。たゞ古歌などにあつてはそれが自然であり、且つ必要であつたから尊いのだ。斯うしたこの歌がその必然性を持つてすらくと歌ひ出されたものか如何かは甚だ疑はしいことである。そしてその結果は右言うた如く徒らに無機物に近い綺麗さを見するに留つたのである。

本を忘れて末に趨るは徒勞ではないか。

これの世を憚りつゝの戀ゆゑに泪しけかる逢

瀬なりけり

身をふせてうつゝなきがに泣いじやくり別れ

ともなし夕かたまけて

百日の別れといへばひとすぢのねぎごとを云

ひて身をふする汝は

愛人N、F市にかしまだたん日近づき初秋の風、空、みなおのづからなるかなしみがあり、と詞書がしてある。どうせ戀の歌だ、あまいののは豫て承知だがこれではちと熱が過ぎはせぬか。そして、心

の迫つたげにも似ぬ何といふ科白のくだいことぞ、これの、世を、憚り、つつ、の、戀、ゆゑに、涙、繁かる、逢瀬、なり、けり、これでは首をあげたり下げたり、かなり手間をかけて聴かねばならぬ。次のでは、うつゝなきがにないじやくり、の小唄口調に似もつかず、別れともなし夕かたまけて、と急に固くなつてゐる。腰折といふ言葉は文字通りに此等の歌にあてはまるのではなからうか。

私はこの詞書に見える熱情を持つた人が斯んな間のぬけた、蒞弱の舞踏然たる歌を作る心理状態の解釋に苦しむものである。私は自然に湧く滑稽味に馳られて以上半戯談に言つてのけたが、この作者は決して戯談に作つてゐるのではないらしい。而して知らずく、斯うした調子に出たものらしい。私に斯うして引用せられて恐らく大いに意外に感ずるであらう。私は矢張りこれを作者の歌に對する眞實性を缺いた、めと思ふ。詞書を正直としてさうした一本氣や熱情がありさうに見えて、何處か遊んでゐる。純粹の涙以外の氣味のよくない微笑が何處かにひそんでゐる。作者自身はさうは思はないか。何故斯うへなくした手並などを用ゐるにむき出しに眞劍にならないのか。どうしても眞劍になり得ずとならば、何故もつと飛びのいて切れ味鋭い光つた遊びや皮肉を見せないのか。どつちつかずの半可通はおのづからなる苦笑である。

大形の浴衣の襟をくつろげてよし戸のかげに

三味線ひくも

衣架にかけしひとへの千草花ざかり宵の灯に
来て松虫のなく

三軍の兵さしまねく將軍が端居の夢をつゝむ

かたびら

夏衣十首とある中の三首。悲しいほど月並である、團扇縮風である。斯うした幼い趣味に止つてゐる人を見ると、太陽のありがたさも、自分の踏んでゐる地のありがたさも、自分の生きてゐる難有さも、少しも知らぬ人らしく思はれてならない。

斯う云ふ人たちがまだ大分多い。ひとから傳へられた、習慣から養はれた趣味以外に、なぜ自分自身の鮮かな感覺を信じ、理智を信じて、自分の世の新鮮と不可思議とに驚かうとしないのか。

せきあへず涙ながして語りけり大き朱纒を賣

りし土人は

休らふべき御胸もとめてわが心障子に襖にぶ
つかり歩く

二首別人の作だが、亂暴さはよく似てゐる。何の爲に土人は泣いたのです。朱纒を賣るのが惜しいと云つてゐるか。とても思はなくはこの歌の意味は解りません。連作としても無理だが、連作でも無い様であつた。斯ういふ一人合點の作は歌の出來た時に少しく自分で反省すれば直ぐ解る筈でせう。また、後の一首は自分の悶えを抱き慰めて呉れる人の胸の代りに自分の心は障子や襖に打つ突かつて歩いたといふのです。襖は嘸ぞ驚いたでせう。

成程どうかしたはずみで斯うした氣持が若い人に無いとは云へないが、それを斯うした歌にしてどれだけの價值があると思ひます。これも何の氣なしにいゝ心持で一首にしてしまつたのに相違ない。餘り無意識にびよゝと三十一文字に並べて行くと大抵結果は斯うなつてしまひます。一首出來たら先づ自身で作者氣を離れてよくそれを眺めて御覽なさい。

○

常盤樹のなかに紅葉の散りしけば山里の秋は

さびしかりけり

檨の葉散りしくころは山の峰にしらじらとし

て雪ふりしかな

二首ともに平板な歌だ。然し、いかにも自然で、(歌はれた景象も極めて自然であり、それを歌ひ出

でた作者の心にも何の構へが無い。事無く澄んだ裡に強いちからを持つてゐる。平板若しくは平凡な歌といはるゝ種類は大抵この目に見えぬちからを持つて居らぬ、いはゆるさうですか歌になりがちのものである。それは、たゞ目前のありのまゝを殆んど何の感動なしにとり入れてそのまゝ、歌にしてしまふからだ。云ひ表はしかたの上手下手もあることだが、大抵は歌を作るそもぐの態度を誤つてゐるから起ることである。景色なら景色を詠むとする、少くともその景色と一致するまで自分の心の醇化するのを待つてから詠まなくては駄目だ。やア、いゝ景色だといふので自分の心のしなび切つてゐるのには目もくれず三十一文字にしてしまつたのでは、いゝ景色もたゞ苦笑のほかはあるまい。右に引いた二首などは、左程深くはないが歌はれた境地と、それを歌ふ心とが或る程度まで一致してゐるのを見る。そしてその間に離し難いちからが生れてゐる。

木の實こぼれあらしのあとの青空のひろごり

ゆけばこころよきかな

下を見て思へるときも御空ゆく雲の心にうつ

る秋かな

ふり仰ぐ身は朝空にきよらなる素肌の人のご

とき雲みる

これも平凡な歌、そして魚のはねてゐる様な生力を感じしむる歌。第一首を讀めば、第一句によつて先づ我々の眼には成熟しない青い木の實などが落ち散つて、雨に洗はれた大地の新しさなどが眼に浮ぶ。この第一句はよく利いてゐる。それを背景にしてあらしの後の空を眺めてこころよきかなといふあたりに少しの無理も少しの芝居氣もない。下を向いてゐる時でも秋空の雲の心が通つてゐる様な、といふ小さな一首の裡にも何となく若い人の心臓の血を見る様な親しさが罩つてゐる。第三首もまた鮮かな感覺と澄んだ心との表はれである。

故郷に歸り來りて二三日ひとに逢ふのを願は

ざるなり

こつそりと知らぬふりして或る夜われ友を尋

ねん心もすなり

たゞ今とおのづと下るわが頭父と母とはあり

がたきかも

濫かに腕を握らん人のあれしつかりとわれも

握り返さん

弟の遺せし鶏は今日もまた卵をうみぬさびし

き卵

おのがじし扱く稻こきの音にひたりだんまり
て何に思ひ入るかも

弟のとむらひの日の村太鼓さびしう納屋にま

だありにけり

梢にゐるて柿もぐわれを仰ぎつつ呼びかくる吾

子にひとつを落す

斯うした人事を歌うたものが極めて少い。多くは山や川や草や木を歌うたもの、みである。これは人々の好みにもよることであらうが、ひとつは諸君の心のまだ充分に開いてゐないせゐであると思ふ。正直、草や木を歌ふのは容易だが、人事はむづかしい。右に挙げたのなどもたゞその傾向を持つてゐるといふだけで、まだ佳く出来てゐるとは云ひ兼ねるかも知れぬ。人事を詠む人の多くの癖としてどうも粗笨に流れ易い。いはゆる俳句趣味を以て見た日常生活や、一寸新しいものを讀み嚙つて得た生活観などから出る人事の歌が多い。山間の溪に向ふやうに、一莖の草に向ふ様に、心を澄ませて對し

てゐたならば、溪や草より遙かに自分に直接であるだけにこの人事の歌が好んで作られねばならぬこと、思ふ。佳い歌が作られねばならぬこと、思ふ。(人事と云つたのもかりそめの名で、實はもつと人生に直接であるべき題材をとり扱つたもの、謂である。)

その七

かつてわれに叱言をのりし父ながら今も罵る

父はかなしも

かつてわれをののしりしごと罵れど父の御聲

のおとろへはもよ

同じ人の二首のうち、どちらがいゝだらう。解るには後のがよく解るが、何となく力を覺ゆるのは初めのだ。後のは説明があらは過ぎてゐる。前のはかた言乍ら一本調子で云つてゐる。前のを何とか直したいものだ。

昔ながらにののしりませど老の日の父の罵り

聞けばかなしも

昔ながらにののしりませど老の日の父の罵り

いまはかなしき

常日頃ののしりませる父の聲今日聞けばなど

いたましきかも

常日頃ののしりませど父の聲けふの聲のなど

いたましきかも

など、まだ幾つもあるであらう。ついでに言っておく、歌のよしあしを見る眼には私にはかなり自信がある。これは理窟からでなく常に多くは直覺から來てゐる。が、歌を直すことは誠に下手である。で、大抵選歌の中のを直さぬことにして、いゝ素質があると思へば形のまづいまゝに採つて居る。まゝ、たまりかねて手を入れることがあるが、果してそれが前よりずつとよくなつてゐるかどうかは自分にも確信のない場合が多い。

裸木の梢すすく空をさし目路いたましき冬

は來にけり

どうも第二句が氣になる。すすく、すすくといふ音が果して斯ういふ透明な、緊張した場合に相應するであらうか。すすく、すすく、御自分口のうちに繰返して御らんない。

はつはつに麥ぞ芽をふけ楢立てる霜ふかき道
の目には親しく

小松生ふる丘越えゆけばそこにまた冬の島に

日は降りしきる

清き川いくつ渡りて來しものぞみ寺の見える

またも橋あり

一月號N——君の作。

大きいところはないが、よく神経の動いたこまかな作である。第一首は、おゝゝ、麥が芽をふいた（はつはつ）には元來やうやうに、辛うじて、僅になどの意。何といふこの道の親しく見ゆることぞよと路傍には楢の並木が續いて霜の深く降りてゐる麥畑の中の道の行く手を見渡しながら歌つたものと思はれる。氣持のよく解る、また氣持のいゝ歌ではあるが無理が多い。麥ぞ芽をふけは芽をふくである可きである。強い感動を表す時にその位の文法上の約束をば無視する方が却つて効果の多い事もあるものだが此處ではそれほどの必要はないと思ふ。楢立てる、霜ふかき道の目には親しく、のあたりもかなりうるさい耳ざはりである。麥ぞ芽をふくとし、楢立ちてとしたならば幾らか落ちつくかも

知れぬ。それはそれとして、サテ一二句の麥が芽をふいたといふ事と、その道との關係はどうなのだ。麥畑の中の道と解したのは推察したにすぎない。眞實は句その物が今少し明確であらねばならぬのである。一體に昨今は歌を作るのがぞんざいになつて來たのでそんな事にお構ひなしの人が多い。然しそれは決して心ある人のすべき事ではない。歌を唯だ雑誌上一ヶ月間の生命だと考へてほしくないものである。第二、第三の二首とも、調子の平俗幼稚で且つ低いのを憾むが、生氣のゆたかなみづ／＼しい處がある。この調子でこの作者などが歌に甘ゆることなく今少し靜かに正視して作つて行つたら必ずよくなるであらうと思ふ。甘えたり、玩弄物視してゐては要するに所謂投書家で終る。

さゝがにの蜘蛛の巢をはるさま見つゝ、母戀し

さの泪たまれり

妹も大きむすめとなりはて、空の秋陽に傘か

ざすらむ

同じくT——君の作。

二首とも懷郷の歌である。N——君のよりや、落ち着いた老巧なところが、それと共にまた何處か乾いた所をも感ずる。第一の下句などさほど悪いとは思はぬながら、何やらそらく／＼しいのを覺ゆる。空でものを云つてゐるのを思ふ。第二の空の秋陽にの一句はわざとらしい。見えを切らないことである。矢張り落ちついて自然に自分の氣持どほりを歌ふに限る。背景や鳴物に苦心してゐる間には折角燃え上つたその心もいつか消えてしまふであらう。湧いて來る感興、こゝろ、それをたゞ大切にそのまゝに育め。さうして詠め。ちらと感興がわく、大騒ぎでそれに尾鰭をつけたり、彩色をしたりするな。

屋根の霜庭樹の霜もとけそめて日は漸くにた
けにけるかな

青幹をとけて流るゝ竹の霜家の蔭のつちにし

たゝる音す

同じく他のT——君の作。

正直な歌である。由來正直な歌といふと多くはぼんやりした平板な作が多いものだが、同君のは常に相當の鮮かな生氣を持つてゐる。

明け六つを撞き終へたれば製絲場の汽笛は鳴

りぬ嬉しかりけり

線香を開山堂にたてにゆけばひときは繁く鶏

なきたちぬ

看經を終へて歸れば田面より霧濛々と流れ來

るかな

同じくS——君の作。

これも正直な歌である。前のT君には個性的な感覺の新しさがあり、この人にはそれが無い。(此處に引いた歌のみでなく、全體として。)そして極めて通俗な普遍的な感情の親しさがある。この二傾向はこの二人に限らず、全體を通じて流れてゐる様である。而して後者は多く平板單調、たゞごと歌に納り、前者は往々奇矯に走り、作爲に墮つる。

堀割の坂を越え過ぐとわが馬車の眞白の馬は

嘶きにけり

冬といへどまだ枯れはてぬ野の草はほのかに

温き心地こそすれ

同じくK——君の作。

坂をのをはいらぬ、これがないとどれだけ調が引き立つか知れない。二首とも素直な、佳い歌である。第二首など、この頃の若い人の作に珍しい歌ひぶり、歌そのものがあた、かい様に思ひなされる。

戸を繰れば間近く見ゆる烽火山今朝はつはつ

に霞かけたり

ひとり身はさびしきかもよひんがしの烽火の

山に春は立ちつつ

第一首、わるい歌ではない、相當に出來てゐる。が、この一首から讀者は果してどれだけの力を感じずるであらうか。戸をあけたところが、烽火山が大さう近く見えて、(この間近く見ゆるといふ言葉はこの一首で最も生々した一句である、けれどもこの朝に限つて間近く見えたといふのか、それとも元來ツイ近く見えてゐるといふ意味がよく解らない、惜しい事である。)かすかに霞がかけてゐるといふかなり心を動かされねばならぬ境地であるが、果してそれだけの實情がこの歌を通じて味はれるであらうか。私は不幸にしてそれを感じない。さうした説明された景色とそれに對する作者の情趣とを

たゞ輪廓的に知り得るだけで、それ以上のこの境地に相當すべき筈の力、感興をこれから感じないのである。それかと云つて決してこの歌が説明的であるといふのではない。要するに作者の呼吸、作者のこゝろが張らなかつたのである。張りのない淡いこゝろ（私は此こゝろを生活力ともいふ）でこの歌が作られたものであることを私は想像する。而してこの種の歌が現今最も汎く行はれてゐるのである。わが『創作』には元來少い方であつたが、近來甚だ多くなつて來た。この作者などは相當に理解力のある人で、そして斯うした（此處には一二首を引いたゞけだが、この人の作は概ねこの傾向である。）作をしながら内心必ず一種の不満を感じてゐるであらうと思ふ。自身みづから食ひ足りないとも思ふであらうし、また他へ對しては（假りに選者たる私などに對して）それほど悪い作品とも思はないのに案外それほど認められないといふ風な不満も恐らく懷かれてあるに相違ないと思ふ。私もさういふ人（かなり多くある）々に對して誠に氣の毒に思つてゐるのである。歌を作る呼吸もよく解つて居り、また眼も手も相當に發達してゐて、そしてその作品の影が常にあまり濃くない。これはまことに氣の毒な事である。要するに私は夫等の人々に對して自ら努めてその厭ふべき一種の水平線を打破せよといふの外はないのである。不満だとは云ひながら恐らくその人たちは自分自身行きついた一定の場所をたゞ空しく彷徨してゐるだけで、それをどう處置するか勇氣をば持つてゐないのだらうと思ふ。さういふ低徊派の群を私は一面また甚だ嫌くも思ふのである。

第二首、これは正直に駄作である。ひとり身は淋しきかもよもかなり甘たるい空疎な言葉（従つてそのこゝろも）であるが、更に續いてひんがしの烽火の山に春は立ちつゝ、は氣の無い事夥しい。空言空語たゞ所謂歌らしいあまえごゝろを歌らしい言葉でおしやべりをしたにすぎない。

母うへの焚きたまひたる風呂ゆゑに沸く音し

みじみ身にしみわたる

しみじみと素はだ沈めてきゝ居ればわきたつ

風呂の音のよろしも

第一首、たゞ微笑に値するだけの作である。焚きたまひたる風呂故にといふあたり、甘えてたゞ他にこびむとするに留り、句そのもの歌そのものとして何等の力を持つものでない。母上に焚いて貰うた事を心から喜ぶとならば今少し正直に、斯う芝居式でなしに云ふ事が出來ると思ふ。年少らしい作者の作として人情的に一種の同情は持ち得るものゝ、獨立した歌としては價値の無いものである。調子も自然とひねくねしてゐる。

それに比べて第二首は佳い。これならばこれだけ切り離して立派な歌である。句から句への調子もよく伸びてゐるまことに心地がよい。

遠そらにあかね流れつあけ近み降りし雪かも
木ぬれたわわに

そのかみのわが大祖父が朝なさなうましようま
しと召せし寒の水

をちかたにたかだか話す誰が聲かはつきり聞
え雪野はさみし

第一首、かなりごたくした歌である。この一首に限らずこの作者の作は一體にみな落ちつきのない、喘息病ぜんそくびょうの呼吸の様なものが多い。大づかみな、大味おほあじな中に何處かに澄んだ、生きたところがあつて、よく磨いたら嘸なぞよくなるだらうと楽しみにしてゐるのだが、今のところ常にその期待は裏切られてゐる。つけくともものを云ふ様なその歌ひぶりを決して私はわるいとは思はぬが、その中にかのりの不純の混つてゐるのを憾むのである。かなりなわざとらしさを常にその多くの作品中から私は感じてゐる。もつと丁寧ていねいに、もつと自然に歌といふものに對する事は出来ないものであらうか。この一首、遠空とんくうに茜せき流れつで一つ切れ、あけ近みで切れ、降りし雪かもで切れ、木ぬれたわわにで切れてゐる。そしてこれらばらくした句を統一する何等の力、主觀も流れて居らぬ。尙ほ第三四句のあけ近

み降りし雪かもといふのも少しも生きてゐない、寧ろ無意味の句となつてゐる。茜せきさす遠空の晴を眺め、サテ曉方あけにでも降つたのであらうかといふ驚きも歎美も殆んど表れてはゐない。要するにお粗末だからである。

第二首、これは謂はゞ作者得意の境地で、一氣呵成に云ひ下した裡によく言外の心が動いてゐる。が、さほど深みのある作ではない。たゞ即興の妙である。作者の作、概ねこれを出でないのを憾む。第三首、いゝ場面であり、いゝ歌にならうとしてゐるが、矢張り投げやりに失してゐる。うち見た所では第五句が難らしいが、更に全體からも考へ直す必要があると思ふ。

常陸なるを筑波見ませ拜みませしらたへにし
て二並ななませる

玲瓏とふたなみませるを筑波を見つ、馴れつ
つかたじけなけれ

夕ぐれの青葉がくれによき音もて吹かなとね
がひ習ふ尺八

満身のひゞきとおもふ太き音のありがたや時

に鳴りもこそすれ

異色あり、また出色の作をいまこの作者はつくらむとしつゝある様である。いづれもみな達意の作、而してまたその内心もよく澄みよく張つてゐる様である。いまだその生活にその歌に透徹した深みを見ないのを思ふが、兎に角に思ふ事を割合に障りなく云つてしまひ得る技能と、一途になつてゐる念力を私はひそかに尊んでゐるのである。斯の種の歌を作る人の癖としてとすれば饒舌になり、はやくちになるものである、それを先づ慎んで頂きたい。そして専ら内に努むる、内を養ふ事を心がけて貰ひたい。

その八

梅の實が大きくなれりなが雨がつゞくころかも夕ぞら曇る

読みあきてかんがへあきて窓をくるくればつ
つじの紅のよろしも
やはらかきわか葉のほつ枝が夕かぜにもみな
らされてたそがれにいる

世の中がむやみに悲しくなりにけり楢の若葉
のそよぐゆふぐれ

灰色の雲がいくつもわがまへをすぎゆくごと
しうれひにしづむ

なにものか來りてわれをそこなはばそらおそ
ろしきうれひにしづむ

以上は本號に發表すべきであつた某君の詠草のなか、ら抜いたものである。

第一首、梅の實が大きくなつた、長雨の續く頃であらう、夕空が曇つたといふ、間違ひのない、實際の事を歌つたものであらう。サテ、歌としてこれをどう見るか。

先づ表面の調子から見ると、梅の實が大きくなれり、(これからしてだれてゐる様におもふ)ながさめが、つゞくころかも、夕空くもる、二三度これを繰り返して見給へ。いかにも間のぬけた、何處にどう力を入れてゐるのか一向わからぬのを誰しも感ずるであらう。世に空つ調子といふことがある、その空つ調子すらこの歌には無いのである。梅の實が大きくなれり長雨が、我等は普通の世間話にでも斯うしたふやけた口調をば使ふまいと思ふ。一句々々重ねて讀んでゆくうちに何だか馬鹿にされた様な肝癢すら起つて來るのである。

一體作者は何を歌はうとしたのか。梅の實の大きくなつたことをか、空の曇つたことをか、それともこれからの雨のことをか。そしてまたそれがどうしたといふのだ。

恐らく雨に對する感じを詠まうとしたのであらう。が、作者の心には、楔くさびが無い。イヤ、その心の有無からして怪しいものである。たゞぼんやりした眼をきよろつかせ、これだけのものを繼ぎ合せてむぐぐと云つてみたに過ぎないのであらう。紙屑が雨にうたれてちりぐくになつてゐる形である。

第二首、所謂へなぶり口調である。そして洒脱をも缺いて居る。讀んでしまつて『ふざけなさんナ』といふほか、文句なし。

一體作者はこの躑躅を見て眞實いいと思つたのか？

どの程度で？

どんな氣持で？

そしてこの歌を作つてその躑躅に對したこゝろとよく適つてゐると思つたか。残念だとも、面目ないとも思はなかつたか？

おもふにこの歌を作る時、作者の心は極めてふやけた、締りのないものであつたらう。私は歌に必ず正しい事をうたへとはいはぬ。曲つたこと、暗いこと、また正しいこと、そのいづれでもよろしい。唯だそれが必ず張りつめたものであつてほしい。ドストイエフスキーなどの小説を見たまへ、篇

中の人、多くは善人でない、けれど必ずこの張りつめた、眞劍の心を持つた人である。即ち作者がさうである。斯うしたふやけた、ふざけた氣持で作られたものに何處に藝術としての資格があるか。少し小生意氣になりかゝつた連中は（云つておく、この作者はそれではない、何も知らないのだ。）えてさうした、變な道に行きたがり、以て得意となす傾向がある。憫むべきである。

第三首、前二首に比べて幾らかい、かも知れぬ。が、何といふ氣の無い歌だ。ことに第五句、それが、れに入ると急につめたい説明に折れたあたり、完全に死んでしまつた。

第四首。

なぜ斯う意氣地なく外れて行つてしまふのであらう。屹度何かを云はむとしたに相違ないのだが、云はうとしたこと、感じた事に正面して極めつくすことをせず、われから碎けて斯うした屁の様な駄洒落に落ちてしまつたのである。斯うした無氣力者、自暴自棄者に對しては寧ろ憫れむにも足りぬのを思ふものである。

第五首。第六首。

空言空語、それにしてもまた餘りに安つばい空言空語ではないか。一體云ふ氣で云つてゐるのか、寢ごとの様に云つてゐるのか。私にはその區別からつきかねる。

この作者の名を云へばあゝあの人かと誰しも氣のつく程度の地位を本誌では持つてゐる人である。

よくなりさうで一向によくならず殊に今月あたりは斯うい風に態度を墮して來た。云ひ難い嘆きを私はこれに對して持たざるを得ぬ。歌といふものがよく解らぬのかも知れぬ。それならば何故解らうと努めないのか。兎に角に歌といふものに親しみ始めて、ことに或る程度まで踏み込んで來たものが、何故もう少し敬虔な熱心なこゝろが持てないのか。歌は兎に角として、その人のさうした一生すらも眼に見えて來るではないか。私はそれを悲しむ。

自己をおろそかにすな。行く路の西はあれ東はあれ、とにかくに自己の一生を疎末にすな。われひと共にこれを念じ度い。

此處ではこの作者の歌を引用したが、決して一二人に限らない。殆んど悉くが昨今この傾向を持つて居る。歌に現はるゝこゝろの影がみな極めて薄い。胸をひらいて歌ひ出すといふ力が殆んど無い。多くは眼さき、手さき、乃至は頭ばかりで作つて居る。一首の生れいづるそもゝの感動、一首を貫いて毅然としてゐねばならぬ筈の強い感動といふものが歌の裡に動いて居らぬ。景物配合の妙を誇る輩か、言葉や口調で嚇し、ごまかし得たりとなす手合か、いづれは本末轉倒の形を帯びてゐぬ者は少い。よし淺くともその本末だけは正して置き度く、今後専らそのために力を注ぎたいと思ふ。

批評と添削

その一

批評添削を求めらるる人が近頃甚だ多い。その希望に應じたいは山々だが、どうも時間がないので、その代りにこれから毎號詠草の中から歌を引いて批評添削し、それを誌上に掲げて各自の参考に供したいと思ふ。歌の弊は大抵似たものである。指摘せられた他の歌の缺點が直ちに自身の作の上と思ひ合せらるる場合が多いに相違ない。それを思ひ、これを思ひ、なるだけ丁寧な作歌に従つて欲しいと思ふ。なるだけ初歩の人の作を引くつもりだが、中にはさうでない人も混へる考へである。それゝの作者を標準にして筆を取るの、批評の程度は一致せぬであらう。

秋草の實のなる草を探ねてはしばし佇むわが
心かも

意味不明瞭である。秋草の實のなる草とは先づ何を指すのか、實のなる草なら何草でもか、或はまた草に限定があるのか。(斯く細かに云ふはその事でも解つて居れば一首の意が解るかも知れぬと思ふ

がためである。暫し佇んだのは何の意か。

役所の報告書のように明確にする必要はないが、一首の形を成すべき何等の意味も捕捉せられぬ様な歌は困る。在つて無きに等しい。然し、この作者はこれを作つて甚だい、心地になつたに相違ない。何を云つたか自身でも或はよく解らなかつたかも知れないが、斯うなだらかに云つてしまつて見ると何か知ら素的な(或は詩的な)事を云つた氣がして大いに收つたかも知れぬのである。それでは困る。作つた歌をば先づ自分で批判して見ねばならぬ。反省して見ねばならぬ。ぼんやりしたい、氣持で作つたり發表したりしてはいけない。

斯ういふ歌は添削のしやうがない。改めるなら作者の意を訊いて全體から變へてゆがねばならぬ。これをば作者の再考に待つほかはない。

見出でては草の實を彩り何時になり蒔かむ種

かもあはれなす業

これも全然不明瞭である。

彩りは採りの誤りだらう、第一斯ういふ簡単な文字を間違つてまで漢字で書くことはない、とりと假名で澤山である。いつになりはいつにならばであらう。あはれなすわざは全然無意味。これを作つ

て作者には何か意味が解つたのかと思ふと私には不思議である。或は私に斯う云はれてみると作者自身にも次第に解らなくなつて來るのではあるまいかとも思はれる。兎に角に今少し氣をつけて可憐に作つて頂き度い。

ひとりゐるて電車のひびき聞きをればこ、だく

淋し土の匂す

こ、だく淋しがいやだ。私はこ、だくといふ様な古めかしい言葉をばよくくの必要のない限り使ひたくない。こ、にその必要があるかどうか、電車の響にこ、だくでもなからうではないか。それは兎に角、こ、だくさびし、といふとかなり調子が高くなる。それがこの一首にふさふか如何か。私の想ふ原作の意味は、日の當つてゐる眞晝、靜かに居れば電車の軋が聞えて來る、聞くともなく耳を澄ませばあたりには其處となく土の匂ひが立つて居る、といふのではないか。そのつもりで斯うして見た。

ひとりゐるて電車のひびき聞き居ればかすかな
るかも土の匂へる

まだ不消化だが、今はさきを急いでゐる。第四句をそ、い、い、もなくとするがい、か、さうすれば五

句は原作通り土の匂ひの方がよい。第三句の聞きをればも何とかしたい氣がする。

なぐさめも足りぬるものを現身うつしみの身に淋しけ

れ蟋蟀の聲

第二句まで意味不明。或はもう澤山だ、どうかこの上鳴いて呉れるなといふ意味か、それとすれば實に厭味だ。慰めも足りぬるものは随分舌つたるい云ひ方である。斯うしたあまえ口調で身をくねらせた有様は田舎廻りの新派悲劇をつくりで、眞面目な歌には禁物である。一時かうした流行が、歌壇に無いではなかつた。或は私自身その一幕位相勤めた事があつたかも知れぬ。それだけに今は厭らしい。かうした甘えた様な情緒はその時作者の或る一部の慰藉を購ひ得るものである。しかも一部に過ぎない。全身的ではない。所謂ちよつといふ氣持になるに過ぎないのである。またかうした歌を見せらるゝ方でも一寸いゝ氣持になり得る事がある。やつてるナ、と云つた様な相手の（作者の）胸のうちを見透した快味、若しくは他人の芝居によつて自身のさうした芝居氣を満足せしむる快味など、要するに眞面目な、生一本な鑑賞では決して無い。

第一鳴いてゐる蟲に向つて、あゝもう慰めには充分だよ、など、本氣でやられるものでない。淋しいと感じたならば淋しいだけで澤山ではないか。何も變なしくさで見えを切る事はないのである。ううつし身の身に淋しいけれども矢張り芝居附屬の鳴物にすぎない。浮華にして空語、一向淋しくないひゞきである。

斯んな甘え歌、芝居歌は次第に少くなつたのだがまだ幾らか残つて居る。これは少し言葉などが自由に使へる様になつた半可通程度の人に多い様である。斯ういふ所に通り懸つた人は成るだけ早く通り抜ける覺悟を持たなくてはいかぬ。また大抵斯うした程度の人が斯うした作をした時は並ならぬ手柄をしたつもりであるのだから始末が悪いのである。

垂穂續く稻田過ぎれば蝗あまた驚きて去る晝
深みかも

此頃この晝深みかもだとか浅みかもだとか何々ゆだとかいふ言葉が無闇に用ゐられる。特にゆなどは大抵の場合誤つて（例、夕立ゆいたくな降りそ夕時を雨戸を閉ざす遠近の家。）用ゐられてゐる。古めかしく上品で、いかにも意味深長らしいから使ひたいのであらうが、使ふには矢張り使ふ場合があるのである。使ふのではないがそれだけの覺悟をもつて使つてほしい。この晝深みなども斯う蝗の飛ぶのは晝の深いせうであらうかとわざ／＼首を傾けることではないと思ふ。深いと感じたら直截に深いと云つたらいい。想ふに深い浅いが問題でなくみかもが問題であつたのだらう。見たゞけの好きこのみ

で何の必然性を持たぬ言葉を濫用することは甚だよろしくない。そのため折角の歌が空虚になり、浮華に陥りがちである。假りに次の様に改めてみた。

晝深き稲田よぎればふためきて蝗はとべりわ

れの手足に

驚きて去るといふといかにも大きな者がのそくとして立ち去る様だ。言葉に對する眞實の感覺をば今少し鋭くしてほしい。

芝山に童べ騒ぎつ塵もちてすべりるたりぬ秋

のま晝を

さわぎつ、ふたりぬ、斯んなぎこちない片言めいた言葉がよく氣にならぬ事だとおもふ。これでは子供が秋のよき日に三つたり轉んだりして遊んでる輕快な姿は見えなくて中風病みの爺さんが石ころ道を歩いてる様だ。

芝山に童騒ぎあひ塵もちてすべりあそべり秋

の眞晝を

とく起きて庭に出づれば朝顔の露もしとゞに

花咲く處

朝顔の聲も立つかにばつと咲く其の花見たり

朝の心に

朝顔の聲も立つかに咲く見れば其たまゆらは

樂しきものを

これが歌を作り始めて一二ヶ月もたつたといふ程の人の作ならば先づよき出来としても見ねばならぬ。が、二三年も苦勞した人の作であつて見れば唯だ『さうかい』とか『さうですか』とかより返事のしやうのない駄作である。歌にすこしも力がない、感激がない、心が動いてゐない。作者よ、君は博物教科書の中に有る標本晝としての朝顔と立派な藝術としての朝顔の繪との區別を知るか。そして歌は標本晝としてのそれか藝術としてのそれをかを知るか。君は歌を作るに常に自身より遠くへ離して置いて作る。歌を作る時、恐らくは君の心は閉ぢ、感覺は埃にまみれ、唯さかしい眼と、器用な手さきとのみが活躍して、あゝでもない斯うでもないと同じくさかしい意識の赴くまゝに組み變へ挿し變へして作つてゐるやうに見受けられる。君の歌を見る事もかなり久しい。その時ごとに君のその怪しい苦心もほゞ察することが出来る。そして一面それに同情してゐる。が、私はいまだ曾て君の作に心

を動かされた事がないのである。時には反感を起させられる位の君は折々の取材や表現法を變へて來る。そして、それは常に君の本體(こゝろ)と常に私の云つてゐる)とはかけ離れたものである。あゝ作らう斯う作らうと働いて居る君の様子は眼に見えるが、いまだ曾て歌を通じて君の内心の發露を見た事は無い。君の心にふれた事はない。若し君が眞實に歌を作らうとするならば「歌を作る」といふ概念から離れて先づ自分の心を天日のもとに曝らし出さねばならぬ。その感覺に末梢神經に眞實の自分の血液を注ぎ込む事をせねばならぬ。歌、といふ事をさりと忘れて君自身を先づよく注視したまへ。そして、これが俺だ、おれの歌だと思ふ様になりたまへ。さうしたならば或は君の歌にも血の氣の通つて來ることになるであらうと思ふ。

幼いことを云ふ様だが、文字通りに眼を瞑ち手をふところにし、其處に自分の心を集めて出來て來る歌を先づ自ら唯だ獨りして咀嚼する癖をつけて見たまへ。歌は紙に書くもの、他に見せるものと最初から思つてかゝる習慣をさりと忘れてしまひ給へ。

わが思ひ人には告げずひとり來て夜の潮鳴り
涙して聞く

また一種の芝居歌である。涙して聞く、は新派悲劇である。單に自分の舉動を叙して他に何等かの

推察を強ひる風の手法は既うあまりに幼く餘りに古い。しかもその舉動が自然に出でぬ芝居が、りの甘いものふざけたものに於てをやである。わが思ひ人には告げず、人には告げずとも折角三十一文字にするからには歌にだけはもらしてどうか。私は此頃斯んな大づかみな、他に甘えたやうな歌が大嫌ひである。自分の思ひを歌はうとならば自由自在に歌ふがい、。海鳴りを聞きながら涙を流す程の事があつたらそれを突込んでつきりと歌ふがい、。浪打際に立つてゐたなら夜の浪のうねりが見えたであらう。なぜそれだけでもつきり歌ふことをせぬか。遠くには悲しい空の光が見えたであらう、なぜそれを歌はぬか。涙がひとりでに流れたら、なぜそれを切實に歌はぬか。

すつかりみな投げてしまひてほんとうの男一
人になるべかりけり

へなくの瘦男が一人相撲をとつたらば斯うもあらうかといふなか／＼行き届いた歌ださうです。
近く寄つてお手にとつて御覽なさい。

夕庭の樹群をしげみ暗ければ自づから風は雨
呼びにけり

木立が茂いので庭が暗い、といふのは解る。が、これも腹には何も無く、木群を茂み暗ければ、だの、自づから風は雨呼びにけり、だのといふ繊細な言葉が使ひたいばかりに作り上げられた一首である様に思はれる。若し庭の茂みがうす暗くなり、今にも風出で雨降らむとする氣勢を歌はうとならば今少し實感的に、活きた感じを活きた言葉で詠まなくてはいかぬ。斯うした安白粉をぬりたて、喜ぶのは子守女のする事である。

敷石の濡れて冷たく土ひゆる秋をしもだし虫

の音を聞く

秋をし黙し虫の音をきく、粗雑な感じを粗雑な言葉で述べてゐるにすぎぬ。斯うした大掴みな、お粗末な事を年中云つてゐる腹の蟲が満足してゐる所を見るとよくく慢性になつてゐる者と見える。

われ未だ若かる故に此の酒も多くな飲みそ害

になるべし

さうです、およしなさい。

足もとを離れし雲か目下野の面にひろごり動く白雲

わるいと云ふ歌ではないが、この歌には感動がない。あの雲はいま僕の足許を離れて行つた雲かな、さうらしいよ、といふ程のものとして先づ受け取られる。目下野もをかしいが、目下野の、面に、ひろごり、動く、白雲、のあたり、かなりねちくとしてぼんやりしてゐる。

その二

無花果を食みつ、蜂が薄き羽根動かす秋とま

たなりにけり

これは「愛兒の一周忌に」と詞書がしてあつた。無花果に蜂の來てゐるのを見て、あゝまたあの頃になつたのか、といふ一首である。心の痛みを露骨に云はずに、しかもその亡兒の親しんでゐたらしい果物の木を歌ふことによつて、ことに其處に小さな蜂の姿をまで點じて（意識的にわざとさう巧んだものではなく、自然に出てゐるだけに特に）その深い細やかな心を現はさうとしたものである。そしてそれが十分に想像出来る。一誦愁然、實に深みのある佳い歌である。唯だ第二句の食みつ、はどるか、牛や馬なら食むもい、だらうが、それを蜂に使ふのはどうしたものか。この一語だけは飯に小

石の混つてゐる様な感じがしてならぬ。で次の様に改めた。

無花果に寄りつ、蜂が薄き羽根動かす秋とま

たなりにけり

こゝろもちとそれを現はす言葉との關係、それは實に微妙なものである。心がそつくりそのまゝ言葉となつた様な、乃至は言葉の中にしつとりと心が浸み入つた様な調子にゆかぬと眞實の心持は出ぬものである。ことに歌に於てそれが重要なことであるのだ。

曇り空いつしか晴れてとほつ山の秋の山肌の

黄葉せる木々

遠つ山のと云つて、おいて更に秋の山肌のと押し重ねる必要があるかどうか。しかもそのすぐ下には黄葉せる木々といふ言葉もあるではないか。これは、眼で見ただけ心に感じたゞけを遮り無二ごたごた云つてしまはねば氣がすまぬ様なところから出た弊だと思ふ。これでは「歌ふ」のでなくて「饒舌つてゐる」形である。普通の世間話にしても同じ様な事を繰り返しく、饒舌り立てらるゝは決していゝ氣持のものではない。況して歌に於てをや。此頃「歌ふ」といふこと、「語る」といふことをよく混同する人がある。歌はやはり體を眞直ぐにして、額をあげてうたひあぐべきものである。首をか

しげ、眼つきを變へ、手ぶりを混へて饒舌り込むのとは全然に違つてをる。この相違はよく心得べきことである。この一首はさほど優れたものではないが、とにかく次の様に直してみた。

曇り空いつしか晴れてとほつ山のその山肌の

黄葉つばらか

是でもまだその山肌の、そのなどかなりにうるさい言葉である。たゞ山のはだへのとした方がおとなしくていゝかも知れぬ。

一しきり風は過ぎたりチクチクと静寂のなか
の時計親しも

しまのなかの時計親しもは子供の片言かたことに似て、かなりにうるさい。うるさいのはその歌ひかたが（或はその語りかたが）説明になつてゐるからである。これでもかくといふ風に悪丁寧に拾ひあげて説明してゐる傾向があるからである。それにチクチクも可笑しい。蚤にさされたのに使ふならばチクチクもいゝだらうが、この風の過ぎたあとの尊い静けさを歌ふには矢張り清水にごみの入つてゐる感がせざるをえない。

ひとしきり風は過ぎたりしみぐと時計は聞

ゆこの静けきに

しみじみ初めひそやかに、ともしてみた。それはその時の作者の心持によつていづれか、選ばるべきであらう。

二つ三つ梢に花もつ山茶花にゆふ風しるく冬

ざりにけり

夕風しるくはほんの瞬間の、眼前の出来事である。冬ざりにけりは秋から冬に移らうといふ永い期間のことではないか。言葉を用ゐるに不用意甚だしい。

二つ三つ梢に花持つ山茶花にこがらし著き日

となりにけり

これには夕方の心が出てゐないが、これは上の句がたゞ山茶花のみでなく二つ三つ花をつける様になつたといふ同じく永い期間のことわりがついてゐるので、一寸入れにくかつた。強ひて入れるならば連作にしてそれをば別な一首とする方がよいだらうと思ふ。

いそくと雪解の澤を過ぎにけりいづれゆ春

は來る心地して

下の句は「何處からか春が來る心地して」の意であらうが、云ひかたがいかに變である。

いそくと雪解の澤を過ぎにけりはや其處此

處に草の萌えたる

あまりいゝ添削ではないが、春の來る心地がするといふことをあらはに云はずとも眼前のその光景を云つた方が上にある雪解の心もはつきりする様に思はれたので斯うしたのである。

明るみを戀ひつ悶ゆる冬の雲鉛の如く垂れに

けるかな

戀ひつ悶ゆるは實に苦しい。斯ういふ擬人法は特に幼稚に云ふ時か滑稽味を帶ばしむる時でなくては使ひたくないものである。たゞ單にその光景を叙するだけではなぜ満足出來ないであらう。

あかるみを底ひに宿し冬の雲鉛のごとく垂り

て來にけり

やがてしてしぐる、ならむ時雨風吹けば深山

は榎落葉する

時雨風も榎落葉も宇面が綺麗なだけで不消化である。それはとにかくとして時雨風吹けば深山は榎落葉する、はかなりあくどい。悪丁寧である。言葉の上にだけ變な趣味臭い味ひがあるのみで、その實景の心持などは一向に出てゐない。

やがてしてしづる、ならむ風立ちて山の榎の

葉散りしきるなり

とすればいくらかその風の立つてゐる感じが直接に出るかも知れない。やがてしても間だるいが、まアこのまゝにしておく。この作者は一體に歌になる實體のことを忘れて言葉の上の變な趣味から歌を作りあげようとする傾向がある。歌を作るに、言葉は誠に必要であるが、言葉からは決して歌は出来ぬことを覺悟せねばいけない。

秋立てばおほかたの日の風にして槻は既に散り盡したり

第二三句は「大抵の日は風が吹いて」といふ意味であらう。おほかたの日は風にしていへばまよしく説明である。これをおほかたの日を風吹きてとすれば説明を離れて句が活きて来る。「大方の日の

風にして」は背をくゞめて相手を上目づかひに見あげながら説明してゐる形である。「大方の日を風吹きて」はすなほに自づと歌ひあげた形である。僅かな違ひだが其處で歌の死活は生ずるのだ。槻はつきである。恐らく樺の誤りであるとおもふ。

田のくろの枯れ草の群れに火を放ち蝗の卵焼

きにけるかも

變にしやれた言葉を覺えて隠白粉を塗る不良少年式に使ひ廻されるのも困りものだが、枯れ草の群れでも困る。枯草叢といふ言葉があるではないか。

冬がれの梢眺めつ疲れける心に弾かなゆふぐ

れのセロ

夕暮のセロ、晝のセロ、朝のセロ、やがては午前五時五十六分のセロなどが飛び出して来るかも知れない。疲れける心とはなんだ。言葉といふものをまるで路傍の馬糞の如くに心得てゐる人たちよ、お前の心を馬糞で包んでもお前はなんとも感じないのか。

冬がれの梢眺めつ、疲れたる心に弾かな悲し

きセロを
 冬がれの梢眺めつ、ゆふぐれの疲れ心に弾か
 ばやセロを
 ゆふまぐれ冬木の梢を眺めつ、今日の疲れに
 セロか弾かまし

その三

今回は女流の作から此處に引かうと思ふ。先號の批評が少しきびしかつたので或る夫人からは「どうして先生はあんなに思ひ切つたことを仰有るでせう、私はあの批評に全部眼を通すことが出来なかつた」といふ意味の手紙を頂いた。で、今度は幾らかその程度を低め、言葉を丁寧にするつもりである。が、サテ實地に當ると如何なるか。

一本のボプラの朽葉さわわ音立てつつ吹けり

空はすみけり

さわ、音も可笑しい。立てつ、吹けり、空は澄みけり、この調子で風やえて空の澄み渡つた秋晴の光

景がよく想像出来ますか。朽葉といふのは地に落ちて朽ちたのを云ふのだが、此處ではまだ梢に在るのを指すものらしい。或る樹木に風がやえて空が晴れた、といふ風景を詠んだものには類歌がかなり多い。この一首を添削したところでそれら類歌の上に出るらしくも思はれぬので、以上たゞ缺點だけを指摘するに留めて置く。斯く調子のへなくなのは心の張つてゐぬこと、及び一首を成す素因である調子といふものに初めから無神経であることなどから來てゐるらしい。また題材を採るに斯うした類型的のものを平氣で選ぶのは「自然」を見る眼が開いてゐないためである。世間流行の趣味とか極めて月並な鑑賞眼を以てせずして、今少し感覺を新鮮にし鋭敏にしたならば斯うはなるまいと思ふ。

入海に夕もやこむる堤道くりやの母におもひ

ははすれ

佳い歌だ。イヤ、佳い歌になるべきところだ、惜しいと思はずにはゐられない。夕靄のこめて來た入海に沿ふ堤、此處まで讀むと實に豊かな情緒を帯びて明瞭にその光景が眼に浮ぶ。其處へ突然、厨の母に思ひは馳すれ、と云はれたのでは折角靜かに心に浮んで來てゐたその光景さへ散らばつてしまふ。先づ聲に出してこの上の句を誦んじて見よ、而して次ぎにこの騒々しい下の句を續けて見よ。其間の心持がよく調和し得るかどうか。これは一首の中に餘りに複雑なことを詠み入れようとしたため

の失敗だと思ふ。堤をゆきながら母を思ひ出したのならば先づその事だけを詠んだらよろしい。そしてその母は今こそ厨に居らるゝだらうといふ様なことを歌ふとならば更に別に一首として若しくは二首三首として詠んだがよい。連作といふの、難有味面白味は其處にあるのだ。

入海にゆふもやこむる堤道みち長うして母を
こそおもへ

道ゆきてそぞろにおもふゆふぐれの厨にいま

か母立たすらむ

夕もやのふれる海邊の道をゆきおもひぞいづ

るかなしき母を

など、拙いけれど原作よりはよほど作者の心に近いものであらうかと思はれる。それにしても原作の下の句は惶しい、まるで針箱を引つくり返した形ではないか。女流の作には不思議にも「静けさ」と「落ちつき」とを缺いてゐる。或は作者たち自身には氣がつかかなかつたかも知れないが、讀みかへして見たまへ、大抵さうであらう。腹の底から呼吸をする落ちつきと静けさとが無く、いつも咽喉の端でせか／＼云つてゐる調子である。「男の深み」と「女の深み」との差がさうまでひどいとは思はなかつた。お互ひの前に「歌」は正直にそれを語つてゐる様である。

百舌のなく聲をし聞けばかなしさのうしほの

ごとく胸におぼえぬ

「百舌の聲をきいてあなたは潮のやうな悲しさを覺えたのですか」と改まつて訊かれてみると作者自身も少々「オヤ／＼」と感ずるだらう。無邪氣にやつてのけた可愛さはあるが、少々度がすぎた。斯ういふのはいつも云ふやうに作つたものを後でよく注意して見直してみるとすぐその缺點がわかるものである。やりつばなしがいけない。(悲しさのとあるから、胸にせまりぬとでもなくては文法が合はない。注意。)

なるまゝになしておかむとおもひつゝ、わづら

ふ心の深みゆくかな

右と同作者の作であり、同じく憎氣のない可愛い歌である。私は元來大上段に振りかぶつた誇張たつぶり芝居氣たつぶりの作より斯うした、自然な、おとなしい歌を好む。が、これではあまり「たゞのお話」すぎる。平氣でこの歌を繰返して御らんさない、一向わづらひも無ささうな歌ではないか。聞く人が少し皮肉屋か何かであつたら早速「オヤ／＼さうですか、御愁傷さま！」と一本參るところ

である。参られても致し方がない、それほどこの歌は浮き／＼してゐる力が無いのだから。

あかときのむらさき色の雲ひく、ながれゆく

空野分の強し

一向に腰が据つてゐない、ボー／＼浮いてゐる。雲の歌だからこれでいゝ、でせうなどと云ふ可からず。

この一首に歌はれた景色は實に清爽な、磨き上げた玉か銀かのような感じを與ふるものであらねばならぬやうである。要するにたゞのお話のやうに「歌」に對するから、斯う言葉や調子が浮いて來るのである。眺めた景色を一度靜かに胸に映して御らんない。そして其處に生るゝ感興を待つて徐ろに——早口に饒舌らずに——それを言葉に移して御らんない。決して斯うはならないと思ふ。戸口から馳け込んで來て「アノネ、阿母さん、いま斯う／＼だつたのよ」では歌は甚だまごつく。

あかときの雲むらさきにたなびきて野づらに

ひく、野分するなり

むらさきに朝雲ひく、みだれあひていちじる

きかも今朝の野分は

つぼみたち花さきいまか散りいそぐ萩はさながら世のうつりざま

甚だいけない、あなたにも似合はない歌である。萩の花の咲き散るさまを眺めてうつし世のさまを思ふといふ、それはなるほどさういふ感じをふつとお持ちになつた事があるかも知れない。月並な述懐ではあるが、それも感傷的な女性として強ちに無理でない。唯だいけないのはこの一首の言葉と調子である。さうした微妙な（萩を見て無常を思ふといふ、よほど微妙な心境であらねばならぬ）寂しい、しんみりと落ち沈んだ心持を歌ふべく餘りにこれでは元氣がよくはないか。荅だち、花咲き、今か、散り急ぐ、と丁寧とその言葉と調子とをしらべて御らんない、かなり荒つぽい聲色だ。萩はさながら世のうつりざま、と大きく見えを切つたところも「やア、高島屋ア！」と來べき形だ。いけない、今一度その心を絹漉しにする必要がある。

初旅やうらかなしさとよろこびの渦巻となり

身ぬちめぐるも

説明である、斯う／＼あるといふ感情の説明である。かなし、喜ばしといふ感情そのもの、現はれ

では無い。感情の説明と感情そのものとの差は初めは一寸區別のつかぬものらしいが、然しどうしても其處までゆかねば駄目だ。

もがく／＼と四つの牛は喰みながら大いなる車
につながれて居り

さう悪い歌といふではない。さうした情景が兎に角に一首の上に浮いて居る。けれど、要するに唯それだけだといふ程度のもので、一首から浸み出る感動の強みといふものはない。作者自身さう力んで作つたものでないらしいと思ふが、さうした極く簡素な、寂びた情景にはまたそれに附随した味ひがあるものである。その無いのがわびしい。矢張り言葉がぞんざいである、洗練せられてゐない。

秋悲しこのさびしさにたへかねて文庫にあま
る文を見にけり

文がらをなみだながしつかきあつめ落葉につ
つみて火を放ちけり

先づこれを芝居として聯想せしめよ。(その外には一寸思ひよりが無い。)一人の女が涙を流して文が

らを抱いて庭におりて、サテ落葉をかきあつめて其處へ文がらを載せ、思ひ入れよろしくあつて火を放つ、煙は濛々と立ち昇る、それを眺めて……、先づ此頃ではあまり本舞臺などにはかゝらない型である。それを最も靈的な、身ぶり手ぶりの筋がきを嫌ふ歌で行かうといふのである。作者の大膽驚くべし。斯んな大づかみな、上つ皮ばかりの趣味や感興からはもう大抵でお離れなさい。さうして振り返つて御自分の心を靜かに噛みしめて御らんなさい。あなたはまだ少しもあなた自身といふもの、自分自身の生命といふものを御存じでない様だ。外形だけの生活、外をのみ見てゐる生活、根の無い生活、あなたはいまそんな生活しかしておるで、ない様だ。云ひ過ぎであつたら、御免なさい。

針もてばなごむこゝろか一すぢにたけりやま
ねばかなしきかもよ

早口になりすぎました。意味もわからぬ位です。而して誠に軽い。

その四

雲のかけ野の面をおほひひとところ日のさし
てゐて人のかげ見ゆ

雲の影がいちめんに暗く野に落ちてをる。そのなかに唯だ一ところほつかりと日がさして其處に人の居るのが見ゆる、といふ如何にも静かな、はるかなおもひをそゝる一首である。調子も割合にしつかりと動き無く歌はれてある。たゞ初句に雲の影といひ五句に人の影といふのは拙い。日のさしてゐても弱い。斯ういふ調子は無意識で使ふのだらうがそのためだけ一首の腰を危くするか知れない。下句を「日のひかりさし人のるる見ゆ」とでもしたら幾らかよくなるかとおもふ。

日もすがらほこりのなかに立ちあつ心ほと

ほとつかれぬるかな

しみじみと疲れはてけり都べのきほへるなか

に起き臥すわれは

ともすれば沈むところにむちうちてわがなり

はひにいそしむわれは

どうかすれば氣取りになり思はせぶりになる境地をよく一本調子にしつかりと歌つてある。斯うした述懐風の作は詠み易い様で、何でもないう様でなか／＼詠めぬものである。餘程はつきりと正面にものを（詠まうとする）見詰めて眞實に心の底から湧きあがる眞摯さ正直さをもつて歌はないと、とも

すれば厭味いひに陥り、あまいセンチメンタルなものになりがちだ。たゞ正直に歌へばいゝワ、といふわけにもゆかぬ。厭味や思はせぶりはなくとも其處に一首のなかにこちらで歌はうとするだけの力が籠つてゐなくては駄目だ。例のたゞごと歌さうですか歌は多く其處から生れる。この難澁な境地をこの作者が或る程度まで詠みこなししてゐるのを嬉しく思つた。斯んな作風を澤山見たいものである。（たゞ都邊みやまのきほへるなかは少々無理だとおもふ。はつきりしてゐない。）

日のひかりさびしき此處はもやもやとうまご

やし生ふる野のひとところ

日のありか見えつつ曇るさつき野の銀のそら

より草に雨降る

麥熟れてひざしも赤き六月の野に湧く水はゆ

たかなるかも

明るい、みづ／＼しい歌である。鮮かな感覺の産物である。斯ういふものに限つていやがうへにも純粹に洗練しなくてはならぬものであるが、まだ其處まではこの作者の作は到つてゐない。作者に感覺の鮮かさはある。が、それを歌のうへに、言葉のうへに移す時、かなりな不純が混つて來てゐるの

を見る。技巧の洗練といま一層の感覺の豊かさを望まざるを得ない。第一首はまだよいとして第二首の下句は少しごたつてゐる。第三首のひびきも赤きのもあたりには稚氣と厭味とがまざくと出てる。

青葉がくれ登りて來れば陽はつよし麥畑あり

て人黙し刈る

い、場所が詠まれてある。青葉がくれに登つて來ると山上には陽が強く照つてゐる。其處の黄熟した麥の畑に人がゐていつしんに刈り入つてゐる、といふいかにも初夏らしい風景が詠まれてゐるのだが、このまゝでは唯だその説明に過ぎずして、さうした場所の眞實のこゝろもちは一向に出てるない。青葉がくれに登つて來てちつとその眩い様な光景に對して佇んでゐる作者の輝き澄んだ心といふものを現はすべく餘りにこの一首は粗雑である、がさくしてゐる。第三句で句を切つたのも、第五句の「人黙し刈る」といふ不消化な云ひかたも、まだく餘程考ふべき餘地がある。單なる記述説明と歌との差のどんなに大きいかを考へてみる必要がある。

ひつそりと靉蒨き入る、眞晝田の水の面ゆた

けき陽のひかりかも

これも前の歌に似た、明るい輝やかしい境地が歌つてある。そして前のより整つても居る。が、ひつそりとは厭味である。靜寂そのものでなく、「ひつそり」といふ言葉を使はんとする作者の態度、心事、が先づ眼につくのを感じる。眞晝田といふ言葉も少し無理ぢアあるまいか。一時は少し位るの無理な言葉を使ふのもいゝが、出來るだけ早く其處から離れて完全な動きのない言葉でのみ詠み出づる必要がある。「眞晝田」といふ風な言葉乃至文字には一種の新しい『趣味』が味はるゝ。が、それに誘惑されてはいけない。

靜かなる外の面をいまし行く馬車の響に晝の

こゝろとなれり

うす陽さす小庭の晝のしづもりをふと鳴き出

づる雨蛙かな

正直な、靜かな歌である。これこそ前の、様に表面には云つてゐないがいかにもひつそりした歌である。「ひびきに晝のこゝろとなれり」とよそごとの様に云ひすて、あるなかにも不思議に實感が動いてゐる。眞實にさう感じて、それをそのまゝ、氣取る事なく徐ろに落ち着いて歌ひ出した、めであらう。

雨蛙の歌にも微かながら蛙の聲のしめやかさが籠つてゐる。

尖り葉の松の葉がくり松のはな咲きてさびし
も夕陽のなかに

言葉の歌である。寧ろ言葉のみの歌である。そしてこの松の葉は青いみづ／＼しいそれではなくて枯れ乾いたとげ／＼しいのを聯想する。見たところはなかく／＼手際よく作られた苦勞人の作の様だが要するに作りもの臭い。作者の手と頭とで作られたのを思ふ。「夕陽のなかに」も取つてくつ着けた様だ。

をちかたの山邊にこよひちら／＼と灯の見ゆ
れ春蠶飼ふらし

「灯の見ゆれ」は言葉の調子が据つてゐない。なほ「灯の見ゆれ春蠶飼ふらし」は一種の思はせぶりに似て歌を弱くして居る。斯ういふのは妙に他にあまやう媚び様とする一つの作歌手段であつてその結果はみづから自分の歌を害ふ因となりがちである。寧ろ「春蠶飼ふらしきともしびの見ゆ」と正直に云ひ下した方が歌の姿がすつきりと据つて來る。試みに「ともしのみゆれはるかかふらし」と聲に出して云つてみるがよい。へな／＼として腰のすわらない様がおのづからにして感ぜらるゝであら

う。改むれば可憐な、わるくない歌である。

數珠玉の蔭にかくれて魚釣れるそこはくの人
小川邊に見ゆ

「そこはくの人小川邊に見ゆ」は「これ／＼でこれ／＼ですよ」と云つた按排である。説明しようとするからいけない。説明は要するに心の落ち着かぬところから生ずる。瞳を澄せて靜かにその歌はうとする對象に見入りながらその對象と自分の心と融け合ふ境地にまで到れば自づとこの乾燥した説明などはしてゐられないものである。及び腰で、腰を浮かしながらものを云はうとするからいけないのだ。

はた、神鳴るよと聞けばたちまちに氷雨降り
しく初夏の野に
教へ兒がものをぬすみてひと知れず出して置
きたる心根あはれ

雷が鳴り渡るよと見る間に氷雨が降つて來た、この草青い初夏の野に、といふのだ。その心持が自然に出てゐる。自然現象を自然現象のまゝに——わざとらしい誇張や、一種趣味化して之れを眺むる

といふ態度やを捨て、——純粹な心にとり入れて歌へばおのづからにして佳い歌が出来る筈のものである。この一首などは一寸見ればいかにも幼い様だがその光景に對して躍つてゐる心のさまがよく出て歌が生きてゐる。第二首にもその自然さが出てゐて自らひとの心を動かす作となつてゐる。この人の作には常に瞳のちら／＼せぬ落ち着きがあつてなつかしい。(第二句、「ものを盗みて」は「盗みはしつれ」の方がよくはなからうか。)

その五

暮ちかく頭おもたくつかれたりひびくともな

くいかづちきこゆ

窓ぎはにすわりつつ見れば雨あしのふときゆ

ふだち埃立つるなり

一本のビールをひそかに冷しおき庭をあゆめ

ば口ゑまむとす

多少の不純が見えぬでもないが、いづれの歌にも心を押し沈めて壓搾して云つてゐる様な底力のあつる所がある。空洞くうつうな中から強ひても大きな聲を張り上げ様とする不安定が無い。一首のうちの一句々

々にも生命の籠つてゐるのを感じる。

暮ちかく頭おもたくつかれたりひびくともな

くいかづちきこゆ

う。段の音が重疊してゐるのみでなく第三句で一首を切つた上に、暮ちかく頭重たくと響くともなくとが相對してゐる様な不用意な置き方がしてあつて誠に危つかしいのであるが、不思議にもそれが左程に氣にならぬ程度にこの歌は生きてゐる。これは心の正動(可笑しな言葉だがまさしく動くといふ程の意である)が技巧の不足に打勝つたものである。

これに就いて思ひ出した。本號所載K——君の作に

曇りふかく暮るゝゆふべの庭草に觸るゝ風あ

りこゝろはゆらぐ

暮れかゝる家のなかよりうち見やる外面あか

るくうごく草の葉

など、いふのがある。此等はいかにも氣力浮薄な、不愉快な作である。つまり歌になる底の力が缺乏してゐて乃至は一首を洗練する熱意が缺けてゐて、たゞうはの空で作つてゐるからである。自つと「行きかかる來かかる足に水かゝる足輕怒るお輕こわがる」の亞流に近いのを思はしむるに到つたの

である。

降りしきる雨のさなかのふるさとの山低かれ

どみな青きかな

白壁のところどころの落ちこぼれわがふるさ

との家古びたり

鳥屋の邊にくぐみるたまふわが母のうしろす

がたの老いませるかな

これらもみな生一本の作である。金の伸棒とまで行かずとも磨き澄した鐵の棒が一本づつ光つてゐる様な清澄さを感じる。第一句から第五句まで一氣に歌ひ下してあるのもいゝ氣持だ。歌は出来るならば斯くの如く大まかで、純潔で、つまり天に向つて長息を吹くといふ形であつてほしいと思ふのだ。然し、歌はうとする心の複雑さが増し色彩が混雜して來ると歌の姿の上にも千姿萬態が自からにして生じて來るわけである。斯くして歌のきめの細くなるのはよいとしても、歸する所は一首の姿に「亂れ」があつてはいけない。「たるみ」があつてはいけない。きめの細かいは細かいなりに整然としてゐなくてはならない。凜と張つた絲の如くにあらねばならぬ。その絲の何處に觸れてもおのづと澄んだ音色を發するものであらねばならぬ。絲がたるみ、乃至は切れては歌とはならぬ。各自に考へて見よ、

胸に張れるわれ自らの絲の姿を！

同じ作者の作でも、

汽車窓にわがふるさとの海は見ゆ雨にくもり

てかそけくも見ゆ

には何處にか身體を曲げたさまが見えて居る、媚態がある。この媚態を喜ぶのは作歌者としてまだ極めて低級な「心のなぐさみ」に遊んで居るものである。

また

常緑樹の葉のしげければ室の内冷たけれども

蚊のわづらはし

ふかぶかと青葉たれこむる家の内に山あきつ

いま流れ入りたり

の二首に見るに、二首ともその下句には作者獨得の明快さを持つて居るが上句はいづれとも不十分であり不明瞭である。樹木と室内との印象が甚だ朦朧として居る。解るには解らうが、いつもいふ通りそれでは歌にはならぬ。「たるみたる絲」である。

三句で切るとか四句で切るとか、或は初句から五句まで歌ひ通すとかいふ事にもみな相當の了解を持つてやつてほしい。三句で切つたがよいか五句まで一氣に詠んだ方がよいか、一首の出來た時によく自省して欲しい。口から出まかせにやり放して置くのは自己に厚いものでない。一首を動きのない、たるみのないものにするには是非それ位の覺悟は必要である。さうしてゐるうちに自然と言葉のありがたさや句調の微妙さが了解されて來るのである。

雨の夜の廊下をつたひひそかなるはづれの部

屋に案内されたり

しみじみと雨の紫陽花見てあるに宿の朝餉の

はこばれにけり

うつうつと耳にしながら目ざめたる家をめぐ

りて啼く朝雀

夙く起きてまづ嬉しがる鳥の聲すずしき聲に

啼きちらけをる

いづれも靜かな歌である。總體の重量から云つて多少の物足らなさを感じないではないが、それは

作歌當時の作者の身體なり心なりがさうであつたものと先づ諦めらるゝ。出來るなら今少し調子の張つた、生命の核心に觸れて行つたものが欲しいのである。これではこゝろの中心から出たといふでなく、それを遠巻きにして撫でてゐると云つた風な所がある。が、さういふものとしては先づ完全に出來たものと云つてよい。三人や五人は斯の流儀があつてもよいであらう。あまり澤山出られては困る。

陽のほれば雀もいつか啼き減りてけふの勤めの支度などする (同じ人の作)

にはたるみがある、下句がいけないのだ。

汗ながし白髮の母を連れあるくこの新兵をあ

はれとおもへ

小きざみにわが母うへのあゆみたまふこの足

音をいとしとぞ思ふ

501
兵營に母が面會に來た、その時の作である。無駄な心持(芝居がかりの人情などの)や無駄な言葉のない、小さいなりに引き緊つた歌である。ともすれば斯うした作は所謂人情にからんだ新派悲劇式のものになりがちであるがこれにはそれが無くていかにも淡泊に而かも純粹に人間の心情の出でゐる

酔ひはて、は妻をうたがひ子をうたがひ怒り
 さかまくこれはわが父
 はらばひて煙草くゆらすわが父は五十八年間
 世に生きて居る
 酔ひ狂ひてもわれをたよらすおんこ、ろかた
 じけなわが怠るべしや

かなり性癖の變つてらしい父に仕へてゐる人の歌、第一に難有く思ふのはさうした父に對つて作者が實に靜かに心を平かにして正面してゐるその態度である。イヤ、その態度がさながらに歌に出てる事である。誇張もせず、泣き叫びもせぬ生一本の心がそのまま、に三十一文字の上に現はれてゐる。これはなかく出来ない事だ。大抵は其處に空洞な誇張や芝居が這入るものである。

その六

砂の崖にいよりてふかき息をつくうつし身い

とし獨りぞけふも

砂丘にあそんで孤獨を楽しみ嘆く歌。

歌におちつきが乏しい。砂の崖にいよりて深き息をつく、といふのも何となくわざとらしく聞ゆる。深き息をつくも突然で且つ説明臭くなつて居る。うつし身いとしもこの作者位るの程度になれば既に甘すぎるし、ことにその下の獨りぞけふもは甘いこと夥しい。一首の姿に亂れがある。さういふ場合に於ける純粹な感情を現はすには今少し澄んだ引緊つた所がなくては不可ぬと思ふ。唯だ云ふ事をいつてしまつた、だけではいつも云ふ通り歌にはならない。

直すとなると常人以外には厄介な歌だが、

おのづから出づる吐息の深かるや砂山の崖に

ひとりまろびて

とした方が少くとも一首の統一はつくであらう。

欄により暮れゆく山を見てあればうらさびし

くも霧たちわたる

見てあればがいけない。甚だ間延びがして居る。續いてうら淋しくもといふ言葉までいかにも空虚

な響を持つことになつて居る。一首にひそまる感動が無いではないが、甚だうはついたそれである。それを押し静めて歌ふだけの用意が作者に缺けてゐたのだ。

放課後のまどにもたれてうつ、なく家など思

ふに青葉そよげり

これも第三句うつ、なくが不用意である。うつ、なくといふ強い言葉を用ひておいてすぐその下に家などおもふに、といふ様な曖昧な、だらけた云ひかたがしてある。

極く初歩なら兎に角、次第に言葉に對する感覺を強めて行きたいものである。此處には一寸目についた三首を引いたにすぎないが、この不用意な、無感覺なやりかたがいま一體を通じて行はれてゐる様である。歌を作る根本の心は極めて大らかに、極めて自由に、思ふさま手足を伸ばして歌ふがよいが、その心をやる言葉や句法に對してはみな相當の用意を以て對して欲しい。でないとは折角の歌の心を殺してしまふことになりがちだからである。

ぬばたまの闇の大地にふりそ、ぐ雨の音き、

こころたのしむ

赤だすき早苗とる子の手ぶりよさ見てをれば

ふと笑みの湧くかな

虚心なところがいい。歌に何等の臭みが無い。このまゝで今少し調子が張つて來ると本物だ。

波と波もみ合ひ白くくづれあふ川尻に來てさ

けぶ子等よし

波と波もみあひ白く崩れあふ、といふ句、大きくはないが鮮明である。その印象が一首を通じて輝いてゐる。叫ぶ子等も突然だと云へば突然だが、心持は解る。未成品ではあるが、きり、とした、よく作者の心の出た作である。

櫻咲くけふの旗日をつま子率て香良洲の宮に

詣でけるかも

これも素直なのが嬉しい。こせくした、思はせぶりの作のみ眼にふれる昨今、一層斯うした一本調子の歌がなつかしい。

ゆふさればわれのうからは一様にすげ笠つけ
てならび歸るも

並び歸るも、などは少々苦しいが、然しこの作にも歌を作るぞと狙ひをつけた所がない。いかにも大勢の田植歸りの中にあつておのづからに詠み出でた正直さが味はる、。

大浪のくだけしごときしろき雲梅雨のはれま

の山にかゝれり

梅雨ばれのこのあつき日を桑摘みに山にのぼ

れば風をつめたき

これなどもまたさうである。すべて感興を受けたまゝを正直に、そして正確に歌つてある。歌にどことなく大まかなところがある。探し歩いて種にするとか、安白粉を塗り立てたといふ淺間しいやな所が無い。これで作者その人が段々深く大きくなつてゆけば歌も従つてさうなつてゆくのである。此處等に舉げた人たちの多くはまだ野生のまゝの形である。これで自分で自分を培ふことを怠らなければ前途は有望だとおもふ。

ほのぼのと宵月出で、みなかみの野ずゑおぼ
ろに彌彦山見ゆ

おぼろなる提灯つけし車ゆく月夜の白き病院
の坂

雪どけの信濃川づらほのぼのとひかりてさむ
き春の月の出

この人にはいつも淡い色どりがある様だ。どちらかと云へば白粉組に近い。が、こゝに引いた數首のごときは程よきさまに塗つてあるのでさまで氣にもならず、いゝ心持の明るさをおぼえしめらる。然し、斯ういふ行きかたは——謂はゞ自分の趣味興味で詠歌の世界を作つて居ると云つた風の——ともすれば行きづまりがちなものだ。同じところに停滞してゐるうちにはいつか鼻持のならぬ臭氣を伴ふ様にもなつて來る。正直なもので斯うした作は早く眼にはつくが、その作から受くる力といふものは極く中途半端な、甘いものである。いはゆる底力といふ風の強みを持つてゐない。

笛吹の瀬の音いたくくゝもると見ればしらし
ら雨の降り來る

をとこひとり笠かたむけて桑を摘むむかひの

畠の霧小雨かな

この宿の竹の葉ならし降るあめのうらさびし

かもうぐひす聞ゆ

この人のにもそれと同じ傾向がある。先號のなどは餘程その抜けた方であつた。以上三首ともみな面白いが、謂はば即興風の小味こあじなところにとゞまつてゐる。斯ういふ側の人に限つて人一倍の才氣を持つてゐるものだから、今少しゆつたりと眼をひらき心をひらいて、自然にくくと心がけて行つたならば嘸ぞ進歩も早からうにといつても思はるる。

短歌作法

上 編

第一 歌が詠み度い、詠んで見ようといふ人

歌を詠んで見たい……歌を詠む素質……歌になる種子……人生に於ける欲求歡喜及び
不満……先づ着手せよ……その人にはその人の歌……不安と羞耻……案ずるより産む
が易し

歌が詠んで見たいが、私にも詠めるものでせうか、また最初どうしたら可いでせう、といふ風の質
問にをり／＼出會ふ。また、口に出して斯う云はないまでも、斯うした希望、若しくは疑惑を持つて
ゐる人は私の知る以外更に世間に多いこと、思ふ。私は常に言下に答へる。

「お詠みなさい、^{あなた}貴下には確かに詠めます！」と。

なぜならば、詠みたいがと思ふ程度の人には既に詠歌の素質が十分に備はつてゐることを、それ自
身に立派に示してゐるからである。

諸君は路上で諸君の友人に邂逅した時、必ずや、

『ヤ！』

といふ心持を持つであらう。

また、思ひがけなく梅や、山茶花の初花を見出でた時、

『ホ、もう咲いたか』

といふ感動に打たる、であらう。たとへそれが強い弱いに係はらず、それに類した微妙な感情が無意識のうちに諸君の心に動くに相違ない。それが直ちに言葉となつて現はれることもあらうし、或は唯だ微笑となつて終るか、それにすらならずに済むことがあるかも知れぬ。

そのいづれを問はず、それらは立派に歌になるべき種子なのである。その感動を唯だ或る形式に於て發表すれば、其處に『歌』が生れるのだ。

歌が詠んでみたい、といふ心持は、必ずやその裏に何か知ら一種の『欲求』『満足』若しくは『不満』を懐いてゐるに相違ない。他人が詠むから自分もやつて見度いといふのもあらうし、自分ながら解らぬやうな、たとへば齒の生へる時に子供のむづかるに似た或る一種の感動が常に自分の身のうちに、心の裡に動いてゐるのもあらうし、或はまた自分の朝夕の起臥に何といふ事なしに不満を感じて來た、そして捉へどころのない寂寥が断えず自分の眼の前に動いてゐる、どうかしてそれを追ひ拂はう、若しくはもつと寂寥に親しみ度いと思ふといふ種類の人もあるであらう。

いづれにせよさうした（イヤ、此處に私の引いた以外その人々によつて更に種々の原因からこの詠んで見たい心は起つてゐるであらうと思ふ。）心持が動いて來たならば躊躇するところなく詠歌の道に入らるゝがよい。出来る出来ないは先づ別としても、兎に角に直接にそれに當つて見らるゝが可い。そして、前にも云つた通り、さうした心の動きそめた人は必ず成功する、歌を詠み得るに相違ないのである。それは、成功するにしても限りはある。何しろ二千年から續いて來た日本のこの歌といふ藝術界に於て眞實に歌を詠み得たといふ人は恐らく二三を出ぬであらう、或はまだ一人も出てゐないと云へるかも知れない程のものだから、さうした境地まで成功するとはなか／＼に云ひ得ない。また、誰しもそんな事まで考へてゐる人はないであらう。そしてそれはまた考ふる必要のないことであるのだ。唯だその人はその人としての歌を詠み得たら充分ではないか。

兎に角に詠んで見たいといふ心持それ自身が歌の素質であることをば経験者として、またさうした無数の経験者に接して來た事からして私は斷言する。

其處で初心の人が躊躇逡巡してゐるのもまた無理もない事である。子供が小學校に入る前のやうに、初恋をする少女の様に、試験場に臨む受験者の様に不安と羞耻とが先立つのも道理である。戀が人生に於ける大きな分量を占めるやうに、否今少し大きな分量を占めるものでこの歌はあるかも知れないのだ。

が、案ずるより産むが易し、手をつけて見れば案外何でもないものである。そして、一步々と深く手を入れてゆくに従つて興味は愈々深く、理解は益々加はるものである。

繰返して云ふ、詠んで見たいと思つたならば猶豫なくお始めなさい、出来る出来ないは後として先づ手をつけて御覽なさい、貴下は多分その意外にも親しみ易いものである事と、考へてゐたよりも更に興味の深いものであることに驚かるゝであらう、と。

そして、いよく詠み始むるにはどうしたらよいかに就いて私の知つてゐるだけを以下各章に於て述べて行かうと思ふ。

第二 詠歌のすすめ

生きむとする本然の欲求……人生の歡喜……その歡びを歌にうたへ……人生の苦惱と

寂寥……その寂しさを歌にうたへ……歌を知るはわれとわが生命を知るに同じ……肉

の生活靈の生活……詠歌は本然の欲求……歌は美の力

詠んで見たいと思ふたならば直ぐ始めるが可いと云つた。更に私は一步進んでこちらからこの詠歌のことをお勧めしたいと思ふ。

詠んで見たいといふ中にも、他ひとがするからといふ物眞似や、或は一時の好奇心から來るものもある

であらう。若しかすると斯ういふのが寧ろ多いかも知れぬ。云ふまでもなくこれらは決して眞面目なものではない、眞實に道を求むる者の態度では決してない。

が、私わたしはこれをも尙ほ無きにまさると思つてゐる。ゐるところか、此等の人たちにさうした思ひ立ちを機縁に、更に眞面目な歌の追求者になつて貰ふ様に心から勧めたいのである。此等の人に限らず、更に一般の人たちにも何か機會があつたらば一應でもこの言葉を呈したいと思つてゐる。

歌が詠んで見度いといふ心のうちには何か知ら或る抑へ難い欲求が動いてゐると云つた。その欲求(希望と云ふか)は何か。

人間には、あらゆる生物には、自己の生命を、生命の力を出来るところまで押し伸べて行かうとする自らなる欲求が備はつてゐる。草を見よ、木を見よ、また人間自身を見よ。無意識に、また意識して、あらゆる機會に自己を生長せしめ、同時にあらゆる艱難から自己を回避せしめ、またその艱難に耐へて行かうとするために實にあらゆる努力を盡して居る。殆んどそのためにのみ、すべては生存してゐるかの如きものである。多くはぼんやりしてゐるが、考へてみれば大抵さうでないものはないであらう。各自靜かに自己を省みて見るがよい。

斯くの如くして首尾よく望むがまゝに生長してゆく者に抑へ難い満足、隠しあへぬ歡喜よろこびの溢れて來るのもまた自然であらう。その歡喜をどうして人は現はさうとするか。方法は誠に種々であらう、私

は此處で、それを歌にうたへ、と云ひ度いのだ。

歌にうたふ——めい／＼に歌ひ上げるその歡喜の裡に人は必ずまた新たなる歡喜を感じ、と共に更に新たなる希望、自己の生に對する向上心を起して來るに相違ないであらう。よろこびのために歌ひ、歌ふためによるこび、斯くて相互に相促し相助けつ、己が一生を深めてゆく。

また斯ういふ場合もあらう。人の生れて居るといふことは一面また云ひ難い苦しい事である、寂しいことである。我等は生れながらにして先天的に、本能的に、生きて行かねばならぬ運命を負はせられて居る。極めて稀にこの運命から逃るゝためにみづから自己の生を斷つ人が無いではないが、それはまた容易な苦惱から出た事ではない。多くはみな苦しみながらに賦與せられただけの生命を、運命を、背負ひつゝ、辛うじて彼岸まで、死まで辿つてゆく。人によつてはこれは實に年數を離れた長い長い行程であらねばならぬ。その長い間の苦しさ、それに耐へてゆく寂しさ、それをどうして漏し訴へようとするか。私はそれを歌にうたへといふ。

さうした抑へ難き心より溢れた歌は、また直ちにその疲れ悲しめる心に響いて、われより知らぬ尊き慰藉を與へ、深きちからを添ふるに相違ない。

翻つて云ふ。人眞似や好奇心から歌を詠まうとする人達は、恐らくは未だ曾てこの自分みづからの生命のよろこび、いのちの嘆きを知らぬ人であらう。生きてゐるといふ事を自ら知らぬ人に相違ない。

さうでなくばどうしても人眞似や出來心で歌を詠んで見やうなどと思へる筈がないからである。歌は元來さうした人生の深い底に根ざしてゐるものである。少し云ひ過ぎるかも知れないが、畢竟歌を知るは人生を知ることである。人生を、自己自身のいのちを知るは、即ち歌を知ることであると云ふも敢て過言ではないからである。

生きてはゐるが、自分の生きてゐるといふことを知らない、といふのは何たる哀れな、慘めなことであらう。さうした人たちに私はいま、歌をうたへ、少くとも歌を知らうとせよと勧めたいのである。歌には限らない、あらゆる藝術や宗教はすべてそれを教へるものであるが、私はいま歌についてののみ云ふ。ことに、それらの中で歌は最も入り易いものであると思ふからであるのだ。

讀者よ、以上聊か早まつて私は此處に歌の原理論抽象論を持ち出して來た様な傾きがある。若し以上の話に充分了解が出來なかつたならば出來ないまゝ、でよろしい。然し、大體然うしたものであるか位の考へをば先づ懷抱してゐてほしい。さうして私はいま一度云ひ直して見よう。

歌をむづかしいものであると思ふのは誤りである。めんどろなものと思ふのもまた誤りである。詠みたいと思ふ人には自然と詠歌の素質のあることを前に云つた。詠みたいと思つたことのない人にしてもし少し努めてこれに面すれば必ずや多少なりとも心が動くであらう。歌は(また根本論になる様だが)人の心の糧である。靈と肉とより人間の生活はなるといふ。その肉のための、單に物質上の糧を

のみ欲する人ならば乃ち止む。多少なりとも心の生活、靈魂の生活を營まうとする人であつたならば自らこの糧に心の動くが當然ではないか。謂はゞ斯うした自然的必然的欲求のあるべき歌がさうむづかしい、めんどうなものである筈はないのである。故に、その喰はず嫌ひに似た臆病と懶怠とを棄てて兎に角に歌に親しまうとして欲しいと思ふのである。

尙ほいまだこれをも抽象に傾いた話だとするならば、今少し云ふ。

諸君は諸君の顔や身體の美しく活々いきくとあることを願はないか。と同時に心の美を望まないか。常に美しく、常に活々としてゐようとの希望を懐かないか。若しその希望を懐くならば須らく歌を詠め。歌はまことに疲れ汚れた心を洗ひ浄め、歩一步美しく、且つ活氣づけて行かうとする使命を帯びてゐるものである。理由は上に説いたすべてを總括して考へて來れば直ぐ解ると思ふ。よろこびにうたふ歌、悲しみにうたふ歌、いづれもその力を持つてゐぬものはないのである。線路工夫のうたふ唄、荷積人足のうたふ歌、軍人や學校生徒のうたふ歌、酒に酔うてうたふ唄、勞働に、宴樂に、あらゆる俗謠唱歌もみなこの目的に添うて居る。唯だ、和歌はその一層内的に、靈的になつたものに過ぎぬのである。

山川風土の美を見てもそれを解せぬ人がある。人情の極めて微妙な動きを見ても一向それを感じぬ人がある。歌はそれらの人々に對してよく自然を見る眼をひらき、人間の微妙さを感じる心をひらく

事を教へるものである。

心を開く、——上に人生を知り、自己の生を知れと云ふた、およそ大抵の人には無意識にしてこの『知らうとする念願』が多少にか、はらずひそんでゐるものである。愚夫愚婦の間にも何か知ら一種の宗教心が流れてゐるのなどはその證である。歌はその開かうとして開きかねてゐた心の眼をこ、ちよく開かしむる力を自然に持つて居る。自然に開いて來た各自の心の眼の前にこの人生といふものがまたどんなに明かに不思議に映することであらう。

第三 先づ讀書せよ

歌は最初どうして詠んだらよいか……景樹が豆腐屋の歌……先づ讀書せよ……歌と直覺……詩歌の難有味……讀書の樂しみ

詠み度いといふ心が少しでも動いたらば早速それを三十一文字にまとめて見るがよい。

が、幾らか下心のある人ならば兎も角、あまりに突然に『さア詠め』と云つたところでその人はただ途方に暮れるであらう。誰であつたか、多分香川景樹かがはかひきであつたと思ふ、或人から歌はどうして詠んだらい、ものかと問はれた時に、何のことはない、思ひついた通りをそのまま、に詠めばよい……と云ひかけてゐるところへ豆腐屋の賣聲が聞えて來た。景樹は早速それをとらへて、

それ其處に豆腐屋の聲きこゆなりおさん出て
呼べ行き過ぎぬまに

と詠んで、先づ斯の通りだと云つた話がある。景樹は徳川時代の末方の大きな歌人で、當時の歌は多くはたゞ傳統的に古代からの歌風に拘泥し、徒に形式にのみ流れてゐたのを慨して、極端にこの實感實情主義を説いた人であつた。恰度明治に於ける新派和歌の勃興したのと事情がよく似て居る。であるからこの豆腐屋の歌なども面倒臭い形式主義に對する反抗として幾らか故らに詠まれた形があつて、當意即妙の味はあるかも知れないが、歌としては決してよく出来たものではない。が、これも矢張り景樹なればこそ斯う詠めた。頭から歌に親しまなかつた人に幾ら思ふ通りに詠めと力説したところであらう。では、どうすればよいか。

私は何は擱き、先づ讀書を勧める。

書籍は多くの場合、それ／＼の道の先輩が自ら苦しみ、自ら経験し、自ら發明した所のものを書き記して置いたものである。我等はそれを讀むことによつて、謂はゞ一足飛にその先輩の歩いて行つた境地まで到達し得るわけであるのである。到達する、といふことはそれは唯だ到達し得る筈であるといふだけで、なか／＼實際にはあり得がたいところであるが、それにしてもそれらを讀めば自らその道に就いて啓發せらるゝ所が少くないのである。ことにこの詩歌の道などは科學向きのものと異り別

にさう秩序的に種々の準備を経てから讀まなくとも、突然讀みついて相當に理解することが出来る便利がある。

同時にこの詩歌の道は一面また科學向きのものと異つていかに秩序を立て準備を積んで説明し教導しようとしてもどうしても理解の出来ぬところがある。即ちその人自身直接に體得せねばならぬ——理論や説明からでなく、自己の直覺から自ら悟らねばならぬ極めて微妙なところがある。そのためには千百の議論や説明を聞いてゐるより、先輩の作つた作物それ自身を讀むことによつて、その作物の底にひそんでゐる靈魂に自ら觸れることを心がくべきである。また、讀む方の心がけひとつでは實に容易に、實に直截にその靈魂はその作物——書籍から讀者の靈魂に通じて來る。また、それでこそ詩歌の難有味はるのである。

以上、私は行きがかり上方便として餘りにためにするための讀書をのみ説いて來た様である。さう功利的にのみ讀むことは實は眞實の讀書の意旨には適つてゐないのだ。たゞ讀みたいから讀む、讀んで難有いから、楽しいから讀む、といふのが眞實であらうと思ふ。まつたく讀書の楽しみを知つた人は一生それから脱することは出来まいと思ふ。靜かに自己の愛する書籍に面した時、心は油を得た火のやうに徐ろに燃え入つて、其處に一個の絶對境を作る。疲れてゐる心は蘇り、潤れてゐる心は潤ふ。

農家のための言葉であらうと思ふが、『晴耕雨讀』といふ私の好きな一句がある。晴れては野に出でて耕し、雨降れば窓を閉ぢて書に對するといふのである。い、言葉ではないか。私の好みとして若し斯うして一生を送り得たら申し分はないと思ふ。

第四 何を、如何に讀むべきか

先づ歌を讀め……古今萬遍歌千首……現代の歌……了解と感興……感興より詠歌……

萬葉集……歌の作法書……歌以外に何を讀むべきか……貧しき靈富める靈と歌……藝

術としての歌……讀書の態度

讀書の效能と楽しみとをば説いた。サテどんな書籍を、どんな態度で讀むべきか。

先づ歌の本を讀むがよい。歌だけ集められたいはゆる歌集を讀むがよい。作法書（本書の如きもそれだが）や註釋書ごときものもあるが、歌といふものに少しも親しまなかつた前には却つて解り難いかも知れぬ。解つても解らなくても、兎に角に歌といふものを讀むがよい。昔の人は『讀書百遍、意おのづから通ず』と云つて居る。眞實である。解らないのは解らないなりに繰り返し／＼讀んでゐるうちに自然と何か知ら其意味に觸れて來るものである。また『古今萬遍歌千首』とも俗に云ふ。古今集を萬遍繰返して讀んでゐるうちには自づと千首の歌が詠める、といふのである。古今集に就いて

は異見もあるが、讀書の功を説いたものとしては同感である。

歌は古代のより先づ現代のものを讀むがよい。第一その方が解り易くもあるし、年代といふものに壓迫されない（人は何か知ら古いもの、昔のものを難有がる習癖を持つて居る）親しさをも持つことが出来る。

現代のを讀むのはよいが、實を云へば現代の歌はまだ大成したものではないやうだ。幾つも流派があつて、幾人かの秀でた歌人がめい／＼に根をつくして詠んでゐるが、私の見るところではまだどの流派も、どの歌人も未成品の域を脱してゐない様に思ふ。みなそれ／＼にかなり露骨なその人獨特の癖を出して（想ふに斯ういふ創設時代は一種の戰國時代だけに各自が自づと自己に執し過ぎてゐるものらしい）詠んでゐる。で、初めてこれらのものに讀み入らうとする人は先づその心を以ていづれもの歌集に向ふがよい。

現代では誰の作を讀むべきか。

この質問が直接に私に向つて發せられたのなら私は先づ私自身の作をお讀みなさいと云ひたいが、實は躊躇せらるゝ。自分ながら未成品の甚だしいのを知つてゐるからである。では他の誰のを讀んだらよいか。それにも一寸答へ兼ねる。いざと云つて心に浮ぶ誰の作もないからである。で、誰のでもよい、初めは手あたり次第に誰のをでも讀むがよいと思ふ。さうして讀んでゆくうちには自然と

自分の性に適ふ人の歌集に出あふであらう。さうすればまた心を改めてそれに読み入るが宜しい。また、相當の地位に居る人の作にはそれ／＼の癖はあるもの、またそれ／＼に必ず秀でた、長所を持つて居る。これは事實だ。

斯くして一冊か二冊の、或は數冊の歌集を讀んでゆく間には必ずや不用意の裡に歌といふものに対する了解が出て來るに相違ない。充分には解らずとも、何か知らそれに心を惹かる、の感ずるであらう。一二冊も讀んで寸毫もこの事のないのは、それはよく／＼のことだ。その人こそは全く縁無き衆生であるのだらう。若し少しでも心を惹かる、節が出て來たならばそれをたよりに一層心をこめて讀むが宜しい。必ずほの／＼と夜の明けてゆく様に眼の前が明るくなつてゆくに相違ないのである。

斯くして讀み重ねてゆくうちには次第に了解が深くなり、了解が深くなるに従つて自然と自身にも詠んで見度いといふ感興を催すのが人情であらう、自然であらう。さうしたならば遠慮なく詠むが宜しい。今まで讀んで來たことによつて幾らかでも作歌の手ごころ、詠歌のこつといふものも自然に會得せられて來てゐるに相違ない。斯くて一首作つてみれば具體的にその手ごころが解る。一首より二首、三首と重なるに従つて新たな興味も湧いて來やう。それに伴つて次第に作つてゆけばよろしいのである。(後に引く『ロダンの言葉』参照)。

手あたり次第に誰のをでも讀め、と云つたが、それも程度問題である。その社會に相當の地位のある、

そして出來得べくんばあまり詠風に癖のない人のを最初選ぶのがよいと思ふ。方今印刷術が普遍的になつてゐるので、さもない人たちまで皆競つてめい／＼の歌集などを出して居る。斯ういふ歌集のうちにはどんなにかはしい、作歌の参考にする上に危険なものが無いとも限らぬ。矢張り相當に注意してその書をば選擇すべきである。

歌集なり、または幾つか出てゐる歌の雜誌なりを通じては、歌といふもの現代の歌といふものが了解出來たならば須らく古代の歌に眼を向くべきである。古代の歌と云つても例の歌の最古のものとして傳へらるゝ素戔鳴尊すさのをのみことの『八雲たつ出雲八重垣妻ごめに八重垣造るその八重垣を』以後二千數百年來に作られた歌を悉く詠まうとしても到底一朝一夕に出來る事でない。また、讀む必要もない。私のここでいふ古代の歌といふ意味は彼の奈良朝時代に編纂せられた歌集『萬葉集』まんやふしふには、盡きてゐるのである。

日本に歌の行はれ出したのは前に引いた素戔鳴尊の一首を初め神代にもかなりあつた。それは日本最初の史書である古事記日本書紀に出て(いはゆる『記紀の歌』がこれである)居るが、歌の形も充分には纏らず、數もまたとびとびで多くない。それが持統天皇より聖武天皇の朝にかけ、柿本人麿かきのものむら、山部赤人やまべのあかひと、山上憶良等やまのへのおくらの出づる頃に及び、歌を詠む風俗が殆んど日本の一般に行はれ、上は天皇より下は遊女乞食の輩までこの道に遊ぶ風になつた。その當時の作を集めたものが即ち『萬葉集』である。

謂はゞ萬葉集は、この歌集に收められた歌は、歌といふものが出来るやうになつたそもゝの所以を物語つてゐる様なものである。歌を知らうとか詠まうとかするにはこの點からだけでも是非一讀せねばならぬものであるが、更にこの歌集はその自分の帶びた使命を充分に果たしただけの優秀の作物を收めてゐる。『萬葉集』の次に出た歌集は『古今集』であるが、この集に及んでは多少萬葉集の脈を引きながらも餘程悪く變化して居る。その後次第に悪くなつて徳川時代に及び多少異色ある作家を出し、更に明治時代の所謂新派和歌に及んで居る。その他その間彗星的に一二優秀な歌人の見えなではないが、先づ歌と云へば萬葉集、それと聊か歌ひぶりが違つて來てゐるが現代の和歌、先づそれだけを読んで見れば歌の大意は飲み込めると云つていい。

萬葉集は現代よりは千年以上も昔の歌集である。しかも現に我等の使つてゐる假名文字すら無かつた時代に出來た歌集である。その用ゐられた言葉などに現代に通ぜぬもの、多いのは道理で、従つて現代のものを讀んだよりも難解である。そのための註釋書も多く出て居るが、最も簡略で要を得てゐるのは橘千蔭の著した『萬葉集略解』であらう。これは活版本になつても幾種か出てゐる、中で博文館から出版せられた佐々木信綱、芳賀矢一兩氏校訂のものが一、かと思ふ。今一つ、これは同集全部の註釋ではないが窪田空穂氏の『萬葉集選』といふものも出て居る。これは言葉のみではなくその意味をも現代ぶりに評釋してあるので、解り易いには最も解り易からうかと思ふ。これらを読んで

で先づ萬葉集の如何なるものであるかを知り、更に『萬葉集略解』により、その他の註釋書（例へば鹿持雅澄著『萬葉集古義』、僧契沖著『萬葉代匠記』などその他）に及ぶもいゝであらう。が、これは特に萬葉集といふものに深く立入つて研究しようといふ人の爲すことで、單に萬葉集の歌を讀んで見る、讀んで樂しむといふには『略解』あたりで間にあふことであらうと思ふ。また、萬葉集は元來はいはゆる萬葉假名（漢字を日本の言葉にあて、認めたもの）で認めてあるので其儘ではよし振假名がしてあるにしてもいかにも讀みづらい。これを普通の假名まじりに書き改めたものに（もつとも双方とも短歌ばかりで長歌は無い）千勝義重氏の『萬葉短歌全集』及び土岐哀果氏の『個人別萬葉短歌集』がある。ことに後者は全部二十卷に涉つた各卷から作者別に歌を集めて（人麿の作は人麿のだけ、赤人の赤人のだけ）あるので讀むに便利のみならず各個人の特長を知るに恰好である。その他にも尾山篤二郎氏の『萬葉集物語』、及び正岡子規時代から萬葉研究に努めて倦まない『アララギ』派の歌人たちがあつたこの派の人々にはまだ一卷に纏まつた著作がないので不便である。

現代の歌と萬葉集とを讀めば歌を讀むには先づ充分である。サテ、その次には何を讀むべきか。

歌の作法書のごときものも讀まぬにはまじであらうが、強ひて讀むがよいとは私は云はぬ。現に本書のごときもこれによつて直接に歌を知り、歌を詠むやうにならせようといふより、さうなるに到りやすい方便を説いてゐるに過ぎないのである。歌は要するに自得すべきものである、自ら會得すべき

ものである。他から説かれ教へられて覺るべき種類のものではない。歌を説いたものを見て歌を知るより、歌を見て歌を知るべきである。

では歌の本のほかに何も讀まなくともよいか。

否、大いに否、讀まねばならぬ大切なものがある。歌以外の文藝上の作品である。

先づ小説である、長詩であり俳句であり評論である。その他哲學上のもの、宗教上のもの、すべて人間の心靈に直接關係のある書き物はすべて讀まねばならぬ部類に屬するものである。

歌は心の糧である、と私は前に云つた。が、これは實は第二次の言葉で、云ふまでもなく歌は我等が心そのもの、現はれである。今少しつきつめて云へば心そのものである。靈そのものである。(云つておく、私は「心」といふ言葉、「靈」といふ言葉、乃至は「生命」若しくは單に「人」といふ言葉を常に同意義に使つてゐる。)故に、心の小さきよりは小さき歌生れ、心の大きなよりは偉大な歌が生れて來るのは當然であらう。貧しき靈よりは貧しき歌以外生れ出でず、豊かなる靈には必ず豊かなる歌が生れる。小さき心靈を大きくし、貧しき心靈を豊かならしむるにはどうすればよいか。豊かなる歌偉大なる歌を詠むにはどうすればよいか。

その人の生れつきにもより、その人の經驗にもより、大きくも小さくもなるであらうが、その天稟を助け、その經驗を磨き、更に未知の世界までを窺知せしむることに於いて讀書が最も有效であると

私は信ずる。歌を知るために萬葉集を讀め、といつたのも畢竟はこの「人」を知るために、人の心を知るために、己れの心を富ますために讀めといふのと同じことになるのである。歌を詠むためには、といふ直接の目的から方便として先づ歌を讀むやうにとだけ初めに云つておいたが、歌を詠まうとする、「心」のために、歌の生れて來る、「人」そのもの、ために讀むとなると決して歌には限らないのである。限らないのみならず、歌ばかりを讀むために自然と「心」の境界を狭くし、従つて其處から出て來る歌は愈々狭小となつて終には歌の上に最も忌む「形式のみの歌」となりがちである。人間自然の心を離れた、人間本來の生命の根ささぬ歌となり終る懼れがあるのである。歌のみに執した所謂歌よみの歌には多くは生氣が無い。歌の源である靈が涸れては生氣のあるべき筈がないのである。歌としての歌、といふより藝術としての歌といふことを常に頭に置いて作歌に従ふべきことを私は勧める。

前に述べた宗教哲學の書、及び小説戯曲評論等は歌の如く形式に據らずして直接に人間の内生活に肉迫し、問題を極めて自由に取り扱つて居る。それだけ私の謂ふ「心」や靈に對して關係が直接である。で、靈を養ふためには内生活を豊かならしむるためには、どうしても此等歌以外のものに由る方が便利であり有效である。無論歌そのものもまた此等と同じ意味を持つものではあるが、歌のみに執することは前に云つた如き弊があるのである。

宗教哲學小説評論と随分私は大づかみな物言ひをして來た。それらに皆通曉し得れば大抵の大學者

にはなる筈である。さういふ意味で言つたのではない。先づ『聖書』だけを読んでいい。なまなか
 哲學概論などをば抜きにして名のある小説を読むがよい。小説も私は方今の日本作家のものをばこの
 際あまり勧めたくない。何となれば彼等の方今取り扱つてゐる範圍は極めて狭く、形こそ大きけれ、ど
 うかすると歌よりも更に窮屈な形式主義技巧主義に傾いてゐるかも知れないからである。それより西
 洋もの、翻譯を読むがよい。原語で讀めれば幸だが、翻譯で結構である。大きなものになればなるだけ、
 初めは一寸讀みづらいが暫く讀んでゐるうちには手離し難くなるものである。また一篇か二篇を讀ん
 だだけで、これでどれほど自分の心は養はれたらうなどと考ふることは禁物である。心を養ふ、といつ
 てもなか／＼範圍の廣い問題で、幾つか讀んで行くうちに自然と『人間』といふもの、『人生』といふ
 ものが解つて来る、其處を指していふのであるのだ。これは云ふまでもなく眞面目な讀者には自らに
 會得せられてゆくことである。

私などは幼い時から好んで種々のものを讀んで來た。随分くだらぬものにも讀み耽つて來たが、然
 しどのためにといふことなく自づと眼の前を明るくせられたのを思はずには居られない。いま此處で
 どういふものをお讀みなさいと、たとへば日本では國木田獨歩のもの、外國ではツルゲネーフのもの
 などと、あらましのものを勧められないではないが、それでも矢張り遍り過ぎる懼れが無いではない。
 先づ各自に好きなものをお讀みになるが宜しい。

先づ現代の歌を讀め、次いで古代の歌を讀め、而して轉じて聖書、小説の如きものを讀めと云つた。
 極めて大づかみな話であるが私の斯ういふ意味は先づ大體ながら『歌』を知り、次いで歌を詠む『人
 間』を知れといふに外ならぬのである。讀むべき種類は解つたとして、此等のものをどう讀めばよい
 か、どんな態度で讀めばよいか。

幾度も云ふやうに思ふが、私は説明の便宜として以上を大抵何々するために何を讀めと云つて來た。
 これはこれを讀んだらこれだけの利益があるぞ、といふ風の云ひかたになり易いが、實はさうとられ
 ることは甚だ迷惑なのである。何等かの欲求があればこそ本をも讀む。讀めばまた何等か（例外はあ
 るとしても）獲るところがあるに相違ないのであるが、その獲得すべき利益を先に頭に置いて讀み始
 めることは甚だよろしくない。著者——書籍に對して禮を失する事にもならうし、第一さうした態度
 で讀んだのでは當然獲得し得べきその効果——利益をよう獲ないで終るからである。何となればそん
 な眼ばかりの事を考へて讀む様な心がけでは、色眼鏡をかけて讀む様では、書いてあることの神髓
 まで了解することは到底出來ないからである。

一つの書籍に讀みか、つたならば飽くまでも虚心淡氣、水のやうな心で而も熱心にそれに讀み入る
 べきである。なまなかな反撥心や批評心やを起すことなく、出來るだけ作者に同情を持つ氣持で讀む
 がよろしい。そして、表面に露はれたるもの、裏面に隠れたるもの、その書の持つ特色のすべてに餘

すところなく觸れゆくやうに讀むべきである。と同時にまた、眼光紙背に徹る、といふ言葉がある、讀みかけたからにはその書の缺點に對しても是非この覺悟を持ちたいものである。善く讀む讀者には自然と斯の結果は出て來ずには置かない。

歌を作らうとする人が他の人の作つた歌を讀む時にかゝりやすい最も悪い癖は、讀み進みながらその歌の趣向やまたは言葉に感心する個所があればそれを直ちに自分の作の上に持つて來ようとすることである。これは強ちに摸倣とまでは行かずとも、最も卑近淺薄なる功利的讀書法である。斯ういふことをしては讀んでも讀んだ甲斐なく、作つても作つた甲斐が無い。僅か眼の前に見える、この句がいゝとか趣向がどうだとか云つて直ちにそれを自作の上に持つて來ようなど、する讀みかたでは到底その作物の本當の味など解る筈がない。それより、靜かにそれを讀み終へてその歌の根本の價值特色を知悉し置き、他日自作をなす時の參考に供するがよいではないか。

いま一つ悪いのは、兎もすれば他人の作を輕視し、蔑視せむとする人のあることである。これは幾らか眼のおきかけた、いはゆる半可通時代の人に最も多い癖であるが、この小さな我執のために彼は當然受け入るべき光をも幸福をも多くは自分から追ひ退けてゐる。水野葉舟氏も矢張り讀書に關して次のやうに云つてゐる。

元來騒がしい心、反撥し易い心、素直でない心を持つてゐる人は不幸である。誰でも自ら養は

むとするならば、いつも靜かで素直な心を持つてゐるやうに心掛けたいものである。激動し易く反撥し易い心は、健かな心ではない。また強い心でもない。強い心は、靜かで、素直である。その靜かな心で人の言葉を聞き、それをよく判別し、味ひ、その値を嚙みしめてゆけば、おのづからその人は自分を養ふことが出来る。

と。悉く私もこれに同感である。

あれこれと拾ひ讀み、飛び讀みをするのもいけない。これでは心のおちつくひまはない。落ち着かぬ心はどうしてもものを充分に咀嚼し吟味する力があらう。

尙ほ最後に、何から如何讀み始めてよいかわからぬといふ氣持にもよくなりがちなものである。それに就いて同じく水野葉舟氏がロダンの言葉を引いてさうした際に於ける注意を呼んで居らるゝのを此處にも引いてみる。

『——何處から始める。

——初めはない。諸君の行き當つた所からおやりなさい。最初諸君の目にとまつた所に立ち停りなさい。そして勉強なさい！少しづつ、統一がついて來る。方法は興味につれて生れて來やう。最初見た時は眼がいろいろの要素を解剖的に分解するが、やがてそれは互に投合して來て全體を形づくる。(高村光太郎氏譯「ロダンの言葉」より)』

『方法は興味につれて生れて来やう』この一語は讀書法のみならず、讀書より一步進んで實地に於ける詠歌法に就いても實に適中してゐる。然り、方法は興味につれて生れて来やう！

附記、本章のみならず本書中に引いた書籍には一々發行所を明記しないが何れの書籍でも東京神田表神保町東京堂書店に問合せられれば大抵手に入れ得ると思ふ。

第五 摸倣可なり

藝術と摸倣……道程としての摸倣……練習としての摸倣と摸倣のための摸倣……發表

慾と摸倣……摸倣境の脱却

私はいま作歌の初歩として努めて他の人の手に成つた歌を讀むことを勧めた。讀み讀むに従つて自身に作歌の興の湧くことを述べた。そしてそれに乘じて親しくみづから作るべき由を説いた。斯くして作られた歌に先づ現れて来るのはいはゆる摸倣である。

本來から云へばこの嚴肅なる藝術界に於て摸倣のごときが許さるべき道理はない。すべての藝術はいづれもみなその作者自身のものであらねばならぬ、作者自身の現はれであらねばならぬ。摸倣とは元來自己を失くして他の形を假ることである。自己の現はれであるべきものに初めから自己を失くしてかかるごときが許さる、道理は無いのである。が、此處に歌を作る上に於ける一道程としての摸倣と

いふものがあると思ふ。

元來他の人の作つたものを見て自身にも作つて見る氣を起すことからして摸倣ではあるまいか。それは先づ作歌の根本義——内容に於ての摸倣であらう。サテ親しく作らうとするに際して矢張り前に讀んで心を惹かれたもの、句の調子なり事柄なり、言葉なりに就いて自然とそれに類似のものを用ひようとする傾向の生ずるのは止むを得ぬことであると思ふ。充分に作歌の手ごころの解らぬ時に於てことに然りである。私はこの時代に於ける摸倣は少しも恥づるに及ばぬこと、寧ろ進んで摸倣すべきであるといふほどに思つて居る。

まことに摸倣は作歌道に於いて一度は經なければならぬ一階段である。讀書が作歌を誘ふ一機縁であるならば、摸倣はまたその道に於ける練習の一であらう。試みにいま歌壇に立てる大家の一人々々に就いてその人の過去にこの摸倣時代のあつたか無かつたかを問うてみるがよい。恐らくは一人として否と答ふる人はあるまいと思ふ。寧ろ或る可懐しい思ひを以てその過去の一時代を語り出づる人があるかも知れぬ。摸倣をしなくてははるられなかつた時代は一面最もその人がみづ／＼しい作歌慾に促がされてゐた時代であつたかも知れぬからだ。

さういふ摸倣は實におのづからなるものである。知らず／＼他に眞似て居たといふものであらねばならぬ。これは前云ふごとく最も無理のないものであるが、また斯ういふのもあらう。『ひとつ自分も

あれを真似て作つて見よう』といふ意識して爲すところの摸倣である。私はこれまた許さるべきであると思ふ。つまり前に云つた如く練習の一としてである。人真似ながら兎に角一つなり二つなり作つてみれば幾らか呼吸がわかる。續いて幾つか作つてゐるうちには漸く完全に飲み込めて来て、サテも他の厄介になつてゐなくともよいといふ時期に到達すべきであるのだ。

右云ふごとき摸倣は捨て、おいても自然に直つて来るものである。否、とても他の摸倣などしてゐられない真正の創作慾が自然と自己の身内に燃えて来るからである。斯くてこそ即ち『摸倣は許さるべきもの』であるのである。空しく手を束ねて眺めてゐるより寧ろ進んで人真似なりにも作つてみるがよいといふ所以であるのである。

此處にひとつ困つたことがある、それはこの摸倣といふことが全然摸倣それ自身を目的として行はれやすい一事である。摸倣せむがために摸倣するといふ憎むべく憐れむべき傾向がやゝともすれば行はれがちなことである。

摸倣性といふものは人間には生れながらにして備はつてゐるものらしい。かの子供たちを見れば解る。が、それは要するに無自覺の間のことで、子供にしろ少し物ごころがついて來れば大抵な物真似は止めてしまふ。それであるのに、年をして、しかも人一倍ものごとの解つた、高尚な心を持つて居るべき筈の歌人がこの摸倣性を抑制し得ないとは嘆かほしき限りである。況んや歌人の摸倣は多く

の場合單なる摸倣でなくて盜癖を帯びてゐることに於てをやである。

これらは要するに歌を詠むといふ事に對する無自覺から來るのであらうが、右云つた方便として階段としての摸倣をいつの間にか習性となし、その安易に慣れて其處から脱出する意氣を缺いてゐるのにもよるであらう。また、歌を詠むといふ自分だけのための事業を忘れて、詠んだらば直ぐそれを他に示さねばならぬもの、示すべきものといふ風に思ひ違へてゐるやうな所から自然さう思ひながら無理をして斯ういふ横道へ踏み込む者もあるだらう。自分だけで作るもの、他へ示すはそもくの末であるといふ考へを初めて持つやうに習慣づける必要を斯ういふことに關しても思ふのである。彼の懸賞に應ずるために他を摸倣するときには性質最も下劣なもので、沙汰の限りである。

初めから摸倣しなくてすめばこの上のことではない。が、右云ふごとき階段として、練習として爲さるゝ摸倣ならばさし支へないものと私は思ふ。但し、斯ういふ意味で自分はいま摸倣時代に在る、といふことを自ら心に深く記して置く必要がある。そして一日も早くその境地から抜け出づることを心がくべきである。また、斯の時代の作品はたゞ練習品たるに止まつてその人自身の眞實の作品でないことをも承知しておかねばならぬ。

第六題 詠

題詠の起り……題詠の弊……作歌上の一階段……經驗と題詠……題詠と配合……練習としての題詠

題を出して歌を作る、却ち題詠といふことは近來は殆んど廢れて來て（いはゆる舊派の方では盛んにやつて居るけれど）、よし行ふにしても一種の座興か餘興のごとき風にのみとり行はれて居る。これは極めて自然なことで元來題詠といふもの、起つたのは平安朝の頃に朝廷に『歌合』といふことが行はれた、これは歌を材料にした堂上人の一種の遊戯で、その歌合の歌はみな題詠であつたのだ。そして後には歌は殆んど悉く題詠であるといふ風になつて來て、そのためかあらぬか次第に生氣を失し、造りもの臭くなつて來たのである。

題詠の弊は歌を一種の型に入れることにある。自由自在なるべき人の心を束縛して、わざとらしい、いはゆる月並な歌しか作らしめないやうにする。しかして後、終にはその『不自由』を一種の安息所と心得るやうになり、その中で安價な慰安を求めようとする。即ち遊戯としての詠歌を樂しむやうになりがちなのである。新たに新しい歌（といふと語弊があるが即ち藝術としての歌）を詠まうとする者は心して斯ういふ危険に近づかないやうにするがよろしい。

けれどもまた斯ういふ場合がある。初め歌を詠み始めようとする時など、唯だ漫然と詠み始めようとしたところでもいかにも捉へどころが無いので途方に暮れるものである。さういふ場合に『菊』とか『梅』とかいふ題があるとすれば、まがりなりにも菊なり梅なりについての想をまとめ得ることがある。乃ちこの題詠といふことも前に述べた摸倣と同じく、作歌の一階段として暫らくこれを借り用ゐるも強ち悪いことではないと思ふ。然し、今いふ通り題を設くれば兎に角詠み易いため、いつかその易きに馴れて、やがて心からこの題詠を難有がるやうにならぬとも限らぬ。さうなれば即ち俗にいふ人參喰つて首くゝるのと同じ結果に陥る。何處までも一方便としての題詠であると意識してかゝらなければならぬ。そして一日も早くその幼い境地から脱け出ねばならぬのである。

また、斯ういふこともある。我等は行住座臥の間に詠歌の材料ともなるべきかなりいろ／＼なことを経験してゐるのだが、それが形を成さぬうちに大抵は影を消してしまふ。たとへば菊の花を見るにしても、種々の場合に見て種々の感じを抱いたことがあるに相違ない。が、その時々別に一首の歌に詠むといふほどのこともなく過ぎてしまつた。が、いま『菊』といふ題に接して過去のことを振り返つてみると當時の印象がその當時よりも却つて明瞭に蘇つて來るものである。で、さういふ意味で自分自身にこの『題』を課して詠んでみるがよい。題を置いて心を其處に集めてみると思ひのほかにはつきりと恰度寫真機のピントがよく合つたやうな鮮かな印象を舊い記憶から拾ひ出すことがあるであ

らう。斯ういふ場合、かりに題詠とは云つてもその題は假物で、實際は矢張り自己の経験を主としたものである。これらは題詠の善用とも云ひ得るであらう。

『鶯宿梅』とか『松上鶴』とかいふと我等には極めて陳腐な、わざとらしい、不自然な感じを誘ひやすいが、然し斯んな題を流行らせた最初の人には鶯は矢張り梅にとまつた姿が一等よく見えたのかも知れない、またそれが自然であつたかも知れない。が、なるほど鶯は梅の枝にとまらせるに限る、といふ風に直ぐ他にそれを真似るやうになつては鶯も梅も共に『自然』に根を斷つて死んでしまふ。斯ういふ風に自然物を自分の好むまゝに都合よく按排して、配合して、一首の歌に作り上げることは甚だよろしくない。また、この配合の弊は題詠に最も多く出て來がちのものである。よし題詠にせよ、決して斯く頭で按排した趣向の歌をば作らないやうに心がけたものである。何處までも自然に出でたいものである。目さき手さきの利く小器用な配合歌より、間の抜けた自然の歌の方がどれだけどつしりした氣持のいい、——確實な存在性を持つてゐるか知れない。

斯ういふ見地から初心の人たちが集まつて歌を作り試みようとする場合など、練習法の一としてこの題詠を採るのは適當である。

題が出たならばその題に心を集めて、それに關聯した自己の経験記憶を考へ出すがよろしい。そしてそれを一首に纏めるか、若しくはその経験や記憶から推し進めて一の新しい想像の歌を作り出すもよいであらう。(その際、いはゆる配合の歌になり易いから注意すべきである。配合の歌とは謂はゞ材料のみの歌で作者の精神の籠つてゐないもの、ことである)。また、あゝ詠み度い、斯う詠みたいと氣ばかりあせつても言葉が自由にならぬのは誰しも経験することである。この言葉を自由にする方法としては矢張りなるたけ澤山詠み試みるがよい。それには題詠などが便利である。

第七 寫生

やゝ進める練習としての寫生……歌と材料……詠む態度と詠む技巧……感興を呼ぶ一法……靜かに視よ……作例二三

練習としての題詠を説いた。が、題詠は何と云つても窟屈だ。詠みよいとはいふもの、何しろ一つの題についてあちこちと心を走らせねばならぬ。少し作歌の程度が進んで來ると、自然とこの題詠には倦いて來るものだ。つまりそれだけ不自然なところがあるのであらう。其處へ來ての練習として私はいま『寫生』といふことを勧める。

歌が作り度い、といふ氣持がしてサテ作る手蔓を得るに苦しむといふ場合がある。その時には手帳を懷中にして戸外へ出るがよろしい。

作り度いといふ一種醗酵した氣持の時、眼に觸るゝものは大抵作歌の材料となり得るものである。

昔の歌、即ち舊派の歌などに於ては『何の歌を作る』といふことが先づ問題であるやうだが、新しい歌ではその『何の』といふのは殆んど問題にならぬ。即ち材料は何でもいゝのだ、唯だ作る人の心それ自身が問題であるのである。『何の歌』は問題ではないが『何う詠むか』『どんなに詠むか』が問題である。即ち詠む態度と詠む技巧とが主となつて居るのである。で、詠み度いといふことゝろが萌して居る時には、あまり材料に選り好みをしてゐないで、先づその詠み度い心を満足さすまで手當り次第に作るがよろしい。門を出ると桐の木がある、その桐の白い幹を詠むもよろしい。桐の根もとには大きな新しい枯葉が落ちて居る、その落葉を詠むもよろしい。その落葉の蔭には白い藪草が咲いてゐた、それも充分に歌になる。花のかげの地は微かなしめりを帯びて朝の日影を受けてゐる、それもよければ、その地の上を這つてゐる小さな名もない蟲、その蟲を追つてゐる蟻といふ風に心のまゝに詠み進むべきである。何を詠んでいゝか解らないと云つて苦しむのは愚かである。詠み度いといふ心が出れば——それはなか／＼貴重な大切な心である。——その心の消えぬうちに何でも先づ詠むべきである。若し室内にゐてその材料に困つたならば、右いふ如く室外に出かくるがよろしい。(室内でも大抵の材料にはことを缺かぬものであるが)そして静かに眼の前のものに心を留めて一首々と詠むがよい。また、その『詠みたいといふ心』を誘ひ出すべき必要のある時がある。即ちその下地はあつてもまだはつきりと詠みたいとまで心の纏らぬ時である。そんな時にも私はこの『戶外に出でよ』と『寫生』

とを便利とする。

先づ、ものを静かに見よ、と私は云ひ度い。何でもよい、門に續く杉垣の嫩芽、その側に立つて静かにそれを見つめてゐてみよ、心は次第に洗はれて來るに相違ないであらう。疲れた心にはかすかな活氣を感じ始め、鈍い心には次第に感觸が生じ、見る眼を通じて心は知らず／＼新鮮になつて來るものである。さうして捉へどころのなかつた、纏りのなかつた心に次第に纏りがついて來る。心に目鼻があいて來る。其處で『詠まう』と思ひ立つて見れば大抵は效能のあるものである。ものを静かに見てゐよ、といふのは謂はゞ一の精神集中の法かも知れない。

單に斯うして心を纏めるために見るのでなく、一步進んで眼で見らまゝを一首に纏めようと努めて見るもよろしい。さうして出來たのが必ずいゝ歌だとはゆくまいが、物を見る眼を養ふために見たままを歌に詠む練習をなすために、初めさうしてゆくのもよい事と思ふ。うまく行くかどうか知らないが、いま斯うして此處を書きながらその流儀でひとつ私がやつて見ようか。

庭さきに萩と薄とが植ゑ込んである。萩はすつかり散りはて、薄のみ二三本の穂を高く抜いてゐる。
萩の花はや散りはてて薄のみひとり咲けども

淋しくぞ見ゆ

久しくも咲きるし萩の散りはててこの草むら

のすすき穂に出づ

その向ふの杉垣はいま恰度秋のわか芽を出してそれに散り遅れた糸瓜の花が咲いてゐる。

杉垣の秋のわか芽の葉のかげに糸瓜の花の色

冴えて咲く

見ればその杉垣には雀が遊んでゐる。

杉垣の下葉は枯れて秋の日のあきらかなるに

雀あそべり

など、いづれも前に云つた景樹の『それそこに豆腐屋』式ではあるが、眼に見るもの、大抵が歌になるといふことはこれでも解ると思ふ。歌といふと大層むづかしいもの、やうに固くなる癖はいけない。平かに、靜かに、常にその心を澄ませておいて、眼の前の草にでも小鳥にでも徐にものを云ひかくる氣持で作れば案外に易々として作れるものだ。

此處に云つた『寫生』は昨今歌壇でむづかしく論議せられてゐる『寫生論』とは違つてゐる。これは唯眼の前のものをよく見て、直ぐこれを歌に詠む練習をせよといふまで、の『寫生』である。

第八 散歩及び旅行

心を新しくせよ……手帳と鉛筆……散歩の方法……船室車窓……想像と實際……佳景と佳歌

いま説いた寫生の方法を少し押し進めて行くとこの散歩となり、旅行となる。

氣を變へる、心を新しくする、といふことは作歌の上には大切なことである。机に向つて考へ倦じた際など、ぶらりと戶外に出て冷たい風に吹かれると先刻頭の痛くなるほど考へ込んだ時にはどうしても出来なかつた微妙な歌が殆んど無意識に心に浮ぶ事などあるものである。何か用事のある時など急いで路を歩きながら、あとから〜と歌の出来ることもある。で、歌ごゝろのある人は一寸出るにも手帳と鉛筆とをば離さないがよろしい。ひよつと心に浮んですぐ消えてゆくやうな歌に、なかなか棄て難い佳作が混つてゐるものである。歌はその歌はれた材料や趣向よりその言葉その調子が常に主なものであるが故に、ひよつと心に浮んで消えるといふ歌などをばその出来た時々になんかに書き記して置かないと初め自然に心から漏れて來た微妙な調子をば直ぐ逸してしまひがちのものである。斯う〜いふ趣向の歌ではあつたがとその歌の筋をばあらまし覺えてもそれは多くは役に立たない、筋だけでは最初心に浮んだ時の微妙な心持がなかく出ない。その心持といふものは大抵言葉や調子

の上に含まれてゐるからである。散歩に限らず、夜床に就いてから思ひがけず歌の出来ることなどある。そんな時には直ぐ起き上つて紙筆を用意すべきである。明朝起きてから、など、考へてゐては大抵失敗する。

散歩は先づ獨りの方がよい。雑念を除いて徐おもむろに歩む。歩むにつれて心は次第に統一されて來るものである。さうした時、初めは少し無理でも一首二首眼前の何でもを材料として詠んで見るがよい。初めその一首二首の間は一向面白くなくともさうして續けてゐるうちにはわれ知らず感興が湧いていつか本氣になつて作り出すものである。散歩ごとに必ずさうだとはゆくまいが、多くさうなりやすい。いつのまにかまたさうした癖もつくものである。初めは努めてやつて見なくては駄目かも知れない。兎に角實地にやつて御らんない。

旅行は散歩の大なるものである。汽車の窓、汽船の室、またはぶら／＼と山を越えながら、次第に移りゆく大きな景色を眼にしてゐると努めずとも作り度くなるのが當然であらうが、さうでなくとも前に云つたやうに最初二三首強ひても作つて見ると自然それに誘はれて作り度くなつて來るであらう。また、繪葉書や手紙の端などに何の氣なしに書きつけて出した歌に極めて自然な、佳い作を見ることもある。

散歩にせよ旅行にせよ、兎に角に餘りに心を騒がせてはいけぬ、餘りに思ひ昂つてはいけぬ。

自然に湧き上つて來る感興をも力めて抑ゆるやうにして靜かに一首二首と詠んでゆくべきである。作者自身餘りに昂奮してしまふと、出來る歌は極めて粗雑な、概念的なものになりがちである。それは、どうかすると居ても立つてもゐられないやうな昂奮を覺ゆることがある。私としても折々さういふことに出會つた。ちつと坐つてゐて手帳に歌を書きつけてゐられない、で、私は立ち上つて（相模三崎港の宿屋の二階で）部屋中をそろそろと歩き出した。けれど、力めてその自分みづからの昂奮を噛み味ふやうな氣持で、やゝ遠くに置いて眺めるやうな氣持で、手で觸るさわのも恐いやうにしてその感興を守りながら三首五首と作つて行つた。一度は武藏秩父の奥の溪間を歩きながらこれは三日間に互つて續いた感興を守りながら詠み耽つたこともある。斯んなにして歌が出來出すと自分ながら何だか神々しい氣に満たされて、自分自身のこともなか／＼かりそめにはよう扱はないものである。

昔の言葉に『歌人は居ながらにして名所を知る』といふことがある。これは秀れた歌人はよく直覺を以てまだ見ぬ遠い土地の景色をも知ることが出来るといふ風にも解せられるが、事實はさうでなく、即ち概念を以てその景色を想像し、そしてそれを歌に詠み得るといふ事に當るらしい。甚だよくない言葉である。概念で以て世に名所と謳はれてゐるやうな大景を歌はうとしたところで到底出来るものではない。たとへば富士山が中空に聳えて、その中腹に白雲がたなびき、麓には松原が續いて居る。松原の蔭には波が寄せてゐるといふ景色を概念で頭に描くとする。そしてそれを一首に詠まうとする。

それはさう困難なことではないかも知れぬ。かりに、

波寄する松原のうへに白雲のなびきて富士の

峰晴れにけり

としてみると、とにかくに右云つただけの景色は詠んである。が、歌としては少しも出来てゐない。つまりさうした景色だけは眼に見えるが、一首の基調を成すべき作者の心といふものが少しも動いてゐないからである。矢張り實地に見て實際に感じた所を歌はなくては駄目だ。

また、初心の人は何でも仰山に歌はなくてはならぬものと考へてゐる傾きがある。これは『歌！』といふと直ぐ固くなるのとは、同じで、景色の歌を詠むとすればそれがどうしても餘程秀れた絶景佳景でなくてはならぬやうに思ひ込む癖である。これも大變に間違つてゐる。前にも云つたやうに歌に詠むに材料は問題ではなく、常に作者の心が問題であるのだ。作者の心がよく澄んで、よく張つて居れば——充分に感動が發して居ればよいのである。だから感動もなくて強ひて拵へた富士山の歌より充分な感動を以て詠んだ名もない丘の方がよい歌になるのである。景色のよいのに心を動かされたから佳い歌が出来た、といふのならば當然だが、景色のよい所が詠んであるから佳い歌だとは決して云ふことは出来ない。心すべきである。

第九 同好の友、會合及び回覽雜誌

一夜百首……歌會……點取りの面白味とその弊……即題と兼題……回覽雜誌

獨りで靜かに勉強するのもよいが、それは餘程後の事で初めの間は勉強仲間があつた方がよいやうだ。自然にさうした仲間が出来ることであらうし、『自分は此頃歌を始めたが、どうだ君も一つやつて見ないか』といふ風に勧めて見るやうな場合もあらうし、または雜誌の上などで知合になつた仲間もあるであらう。萬事につけて獨學より便利なことのあるのは他の學問などと變りはない。

お互に歌集其他持つてゐる書籍を見せ合ふとか、種々作品上の話を爲合ふとか、お互に作品を見せ合つて批評をするとか、一緒に集つて作り試みるとか楽しみながら勉強することが出来る。此頃ではあまり流行らないけれど、一時は歌壇の先輩達の間にも一室に集つて各自に一夜百首詠を試みるなどといふ事がよく行はれた。單に練習のためにもなるし、また、初めは練習や座興のつもりで始めたのがわれ知らず感興を呼んでツイ眞面目になつて作り出すことがある。最初二首三首、または五首十首作つてゐる間は強ひて作つてもその間に心が統一され、自然に感興が湧いてそれから本氣になつて作るといふのはよく經驗する事である。一夜百首詠などといふことは後になると億劫でやれないものだが、若い間初歩の間にはなかく面白事だ。仲間でも無くば單獨では一寸やりにくい、さう

した仲間があるならばやつて見るがよい。題を幾つか出してやる事もあるし、題無しで自由に詠み競ふ場合もある。出来のよしあしは別としても百首揃つて出来上ると誠によい氣持のものである。また、百首も作るうちには自然氣に入つたのも幾つか出来るであらうし、さうして作り重ねてゆくうちには作歌の呼吸に就いて自然に會得する所があるものである。

百首でなくとも仲間が集つてする競詠の一方法として點取りといふ事も行はれる。これは大抵最初に題と作る時間とを限つて置いて行ふやうだ。題を出すのはその席にある先輩が混つてゐたならばその人に出して貰ふし、でなかつたらば合議の上で時季のものとか何とか適當なものを選ぶとか、またはその場に在り合せた書籍を手當り次第に開いてその頁の中から題になりさうな文字を拾ひ出すとかいふ風にして定める。題がきまつたならば時間をきめる。三題一首づつ（即ち三首）一時間とか、五題（數無制限とすれば出来たゞけであるがこれは不便である。矢張り一題一首づつ位るがい、だらう）二時間とかいふ風だ。そしてその時間が来たならば出来たゞけの各自の歌を集める。集めた歌をば豫め誰か幹事を定めて置いて題ごとに紙を別にして清書させる。（これは筆蹟により作者の解らぬやうに）。その間に他の幹事は選歌用の紙片を各自に配る。配られたその紙片に各自は名前を認めて置く。その間に清書が済めばその歌に番號を打つて各自の間に順次に廻すのだ。廻された人たちはそれらの歌をよく讀んでみて各自の好みに従ひ豫め定められた數（大抵三首づつ選ぶのが常だが、集つた人の

少い時には五首位るにせぬと選の點數の纏まらぬことがある。）だけの歌をその中から選んで（歌全部を書きぬくのはめんどろ故その歌の上に記された番號だけを書く。）前に渡された選歌用の紙に認め、それを幹事に渡すのだ。幹事はそれを全部受取つた後、一枚々々づつ大きな聲で讀み上げてゆく。たとへば「何誰選」と先づ選者の名を云つておいてそれから「何番」、「何番」と選まれた歌の番號を讀み上げる。スルト今一人の幹事はその時その前に清書された歌の紙を持つてゐてその何番といふ聲に應じてその番號の歌を讀み上げるのである。讀み上げらるゝとその歌の作者は「何誰」と自ら自分の名を名乗る。斯くしてこの歌には一點だけ點數が入つたわけである。（そのやうにその歌の上には點數を歌の下には作者の名を書き入れる。）斯うして讀み上げてゆくに従つて佳い歌には自然に點が澤山入るので誰のどの歌が何點で最高點、次點がどれだといふ風にその成績を見て楽しむのである。これは練習といふよりたゞ「楽しみ」といふべきもののやうだが、初步の間はまつたく面白いものである。これにより作歌欲を誘はれることが少くない。斯うして楽しみながらに作歌熱を増進させてゆくのもよいことだと思ふ。たゞ注意すべきはこの點とりの時、點のとりにさう一杯でいろ／＼きたないことをする人があるものである。たとへば先輩の歌を摸倣したり、剽竊したりする如きである。これはいけない。これでは折角の練習のためといふ目的が全く零になつてしまふ。また斯ういふ席上で選ばれる歌は多くは器用な眼さきの利く歌が選ばれるものだから、自然つとめてさういふ歌をのみ作らうとする、こ

れも躬ら進んで病弊に陥るものである。斯ういふ際にも矢張り虚心平氣自分の信ずる歌を作つて居るだけの信念を持たなくてはいけない。遊戯のための歌よみとならぬやうに心がけねばいけない。

此處に云つたのは『即題』、即ちその席で題を出して作るのだがこの外に『兼題』といふのもある。これはその時の幹事が會の數日前に題と歌の數とを定めて各自からそれを取り集め置き、會の日までに清書をも濟ませて置いてサテ後は右いふごとく集つて共選するのである。また一切題を定めず、近詠何首つづを『持寄り』といふ風にして行ふのもある。

この點取りよりや、研究的なものに『廻覽雜誌』といふを作る法がある。

廻覽雜誌と云つてもそれを作る方法は幾つもある。たとへば單に各自の作品だけを集めて一冊に綴ぢ、それを順次に廻覽するといふのもあらうし、またその卷末にその批評や雜感を書きつけるやうにするのもあるであらうが、初歩の人には最も興味深く且つ利益になると思ふ一法を御紹介しよう。幸ひさうした廻覽雜誌を作つてゐる人達の一冊が手許にあるのでそれを見本にする。

豫め幹事を定め、その幹事は廻覽雜誌をやらうといふ仲間から三首なり五首なりの數を定めて歌を寄せ集める。そして一冊の帳面を作つてその一頁の右端に（次の表に於ける星闇の如く）一首づつ書きつける。斯くして全部の歌を帳面に書きつけたのをば順序を作つて各自に廻覽するのである。これは每號二度づつ廻すのであるが、第一回に廻す時には單に歌のみを記して作者の名をば書かずに置く。

白木茶花

星闇の濱邊に立ちて物思へば三崎の山にいなびかりすも

(A) 悪い歌ぢアないと思ふ、三崎の山の見える邊に會遊の經驗があつたら一層この歌になつかしさを覺えたゞらうに。

(B) 感激が足りない。

(C) :の.:に.:の.:の.:にの.:にが耳にさわる、立ちると云つたのを受けて物もへばはあまり大まかな云ひかたすぎる、稻光といふ焦點に生命がうすい。

(D) 恐しい自然である、人間の弱さがしみく感ぜられる、恰度惡魔の響の様だ、けれど私はそれを悲しまない、たゞ生きて行けばそれでいゝ。

(E) 成程感激が足らぬやうです、しかし佳い歌ですネ。

(F) 印象が電信略符の様に羅列されてゐるやうに思はれて至極つまらない、「物もへば.:いなびかりすも」といふあたり、益々くだらなくさせてゐる。

それを受取つた各自は右の表に於けるA、B、C、(實際はいづれも本名を記す)の如く順次にそれぞれの歌に對する批評を書きつけて次ぎへ廻すのである。斯くして第一回が一巡し終つたらばそれを幹事の手に戻す。その時幹事はそれまで自分だけ知つてゐた作者の名を歌の上に(表に於ける白木茶花の如く)朱書する。そしてそれを今一度會員に回覽するのである。各自はその時に初めて作者の名を知るので今迄はそれを知らなかつた、め批評も遠慮なく出来るといふわけである。

これは研究にもなるし興味も深い。五六人も集つてゐる人たちには私はよくこれを勧める。斯くして眞面目に研究し合つてゆく間にはお互に知らず知らず啓發される所が少くないものである。

第十 先輩に就いて

第二期か……單獨の勉強……先輩に就く……師弟關係

同好の友人同志で勉強しながら満足の出来てゐた時代は多く最も楽しい時代であるやうに思はれる。ほど同じ程度の人たちがめいめいお天狗になつてわけもなく唯だ無闇に作つては喜んで居るが、その時代も餘りに永くは續かないやうである。さうしてゐる間に次第に作歌上の種々の疑問に出會つたり、または自分自分の才分に疑ひを抱くやうな事にもなる。或はまた同輩間の作歌能力や批判能力に慥なくなつて獨り其處から脱け出ようとするに到る。

それからは單獨に一層深い研究創作に志す人もあるべく、その間に自分の私淑してゐた先輩に就いてその人と共に更に新たなる努力を續けようといふ人もあるであらう。或はまた右いふ作歌上の疑問や、自己の才分に對する疑問を徹底させる事なくして其儘あやふやに中止してしまふ人もあるだらうし、または甘んじてその程度で停つてしまつてそれからたゞ遊戯骨董のやうに歌を遊ぶ如き人もあるであらう。謂はゞこの時期は作歌行程の第一期の終りに屬するもので、今まで殆んど無意識に自然の力に驅られて來た作歌欲が漸く盡きてこれから臚げながら自ら意識して作り出さうとする時期に際するもの、やうである。すべて物の變遷期に起り易い種々の危険はまた作歌上のこの時期にも起りがちである。

その時に際して最も安全な、また賢き方法は自己の信ずる先輩に就いて更に新たなる歩みを起すことであると思ふ。單獨で自己の路を開いて行く、といふのは云ひ易くして行ひ難い事である。少くともまだこの時期にあつては早過ぎる。斯ういふ人に限つて妙に獨りで思ひ昂つて一種病的な、ひとりよがりのものを作つて自然に伸ばして行つたらば充分に伸ばすべき折角の自己の才能をも殆んど故意に自分から枯らしてしまふものである。そして徒らに他を罵り、強ひて自ら高うし、次第に自己の悪い殻を作つてゆく。瘦我慢の強いだけ、斯うした人はさうした際に於ても救はれる機會が少い。

先輩に就く、といふうちにも種々あらう。單に斯界の先輩だから、といふものもあらうし、個人的

の縁故から近づいてゆくのもあらうし、その人の人格や作物を信じて進んでその下に就くのもあるであらう。いづれもよろしい。いづれにせよ、その人に就いたからにはよく心を平かにして其處に安住し、その人の才能を知り明め、その人から受くべき感化をば充分に受くる様に常に己を空しうして仕うべきである。そして少くともその先輩の持つて居るだけの才能までには漕ぎつける覺悟を以て努力すべきであると思ふ。

昔の歌の道に於ては師弟關係といふものが非常にむづかしかつたさうである。これは詠歌といふ事が一種の儀式の様にも解せられてゐた、めでであるが、現今單に藝術として歌を取り扱ふやうになつてからは自然その間に少からぬ相違が生じたわけである。嚴密な意味で云へば藝術には師匠も弟子も無い筈である。元來が藝術は各個それ々の仕事であらねばならぬ筈故、弟子だからと云つて師匠の行つた道を否應なしに踏襲せねばならぬといふ法はない。要するに師匠は多少とも弟子を啓發すれば足るし、弟子は師匠の或る點を自己の参考とすればよい様なものである。が、さうはいふもの、歌は藝術の中で最もその作者の人格の直接に現はれるものであるが故に、單にその作物を参考とするといふ以外にその作者自身に動かさるゝところが多くなる。その才能や作物のために就くと云ふよりその人自身に就くといふ場合が多くなる。これはいかにも自然でまた奥ゆかしい事であるが、それだけにまたその下に就くべき先輩についてもよく充分に先づ知つておく必要があると思ふ。

ことに今の歌壇ではそれ々々詠風の異なるにつれて流派を立て、互に相譲らぬやうな形を呈してゐるのでそのいづれに就くべきかは先づ充分に考ふべきである。西も東も知らぬ時にそのいづれの派に入つて、やがて物が解るやうになつてどうでも我慢が出来ぬといふ如きか或は何か特別の事情があつたのならば途中で止すもよいであらうが、その人の下に就いて見たりこの人の下に走つて見たり、それ々々の人の鼻息と自己の僥倖とを窺つてゐる如き、若しくはその先輩を自己の踏臺同様に心得る如きはまことに態度がきたなく且つ不届である。そんな態度でそれ々々の歌だとして了解出来る筈はない。一度その人の下に就いたならば一生其處に居る積りで靜かに身を處すべきである。若し自然に詠風が違つて行つたならばそれは違ふに任せておくべきで、それに就いては先輩の方に先づ充分の理解があらねばならぬ。作歌上に於ける主義の相違を生ずるは止むを得ぬ、この事に關しては自由に異を樹つべきであるが、その情誼の上に於ては飽くまでも師弟又は先輩後輩の道を盡すべきであると思ふ。

第十一 投書といふこと

投書の面白味……投書に就いての自覺……投書の危険……所謂投書家の歌……創作欲と發表欲

幾らか自分で歌が作れるやうになる、それを何處かの雑誌へ活字にして發表して見度くなる。そし

て投書といふことをやつてみる、するとちやんと活字に組まれて自分の名と自分の作とが誌上に現れて来る、といふのは嬉しい事に相違ない。それに勵みを得て更に氣を新たにして作る、投書する、といふのも無理の無い話である。そしてそれはよきことである。

斯ういふ風に單純な楽しみから、または自分の力をためてみる心から、投書といふを爲るのはよいことである。そのために幼いながらも刺戟を受けて思ひがけなかつた作歌欲を誘はれて行く事があるものである。が、これらは謂はゞ投書は一つの方に過ぎない、『歌を作る』といふ大道を進みながらの一つの道草に過ぎない。それを誤つて若し『投書』といふことそれ自身に興味を持つやうになると極めて危険である。

投書するといふことは、謂はゞ一つの投機である。投書して果して當選するかどうか、當るか外れるか、それを待つ間の投機的興味が餘程投書するといふことの原因をなしてゐる様である。自ら作つて投じた歌そのものに對する興味よりこの載るかそるか待つ興味の方が確かに強い。即ち歌といふものを材料にした一つの遊戯、進んでは一つの商賣である。イヤ戯談でなく、事實この投書を商賣の様にしてゐる人が世間に少くないのである。これらが眞實に歌を作るといふことのためによいものか悪いものかは既に論議を要せぬ事である。私の特に此處に一言を費し度いのはそんな商賣人的投書家の事ではなく、知らず／＼さうした危険に陥らうとしてゐる、無垢なる作歌者のためにその注意を呼び

度いと思ふがためである。

人は生れながらにしてかなり多量に勝負事を好む心、または僥倖を待つ心といふ風のものを持つてゐるものらしい。あれだけ法律でやかましく取締つてゐても種々の勝負事は斷ゆる事なしに行はれ、射倖心を唆る様な種類の事業は殆んど毎日の新聞紙の廣告面を賑してゐる。悪しき意味の投書も謂はば斯うした人情の弱點に對して設けられた觀が無いではない。多くは年少の人たちが知らず／＼斯うした誘惑に導かれて行くのも無理は無いのである。投書をするからには當選したく、當選するとしてもさう下位で當り度くない、それには大抵許多なる競争者を相手にせねばならぬ。従つてこの『投書心』を満足するには『どうしても當選したい』『當選するにはどうすればよいか』といふ事を極め盡すにあることになる。程度の如何はあるにしても兎に角に選者の鼻息を窺ふのが一法である。器用な氣の利いた、眼につきやすい様な歌を作つて出すことも一法である。その他あれ、これ、と種々方法があるであらう。讀者よ、これでどうして投書といふことが『歌を作る道』の利益になり得やう。第一、投書する人自身が先づ『自己の歌のため』といふことを考へるであらうかどうか。

斯うした、投書をする人たちの心理状態やその動機やは要するに私の推量にすぎぬ。或は邪推であるかも知れぬ。此處に私はさうした投書熱に浮かされてゐる人たちの作品の上に現れた諸現象に就いて更に一言を費し度い。これは推量ではない。斷えず眼に見てゐる事實の報告である。

第一に彼等の歌は器用である。いかにも手際よく、あるべきものをあるべき所に置いて作つてある。なるほど、と思はずには居られぬ様な歌である。そして彼等はみな相當に作歌のコツを知つて居る。斯うすれば斯うだといふ作歌上のかけひきをよく飲み込んで居る。痒いところに手の届くやうな、細かな技巧が施されてある。『やつてるナ!』とわれ知らず微笑せずには居られない微妙な呼吸を使つて居る。『うまいもんだ!』と漏らさずには居られない或る種のうまさをそれ／＼に持つて居る。(云つておくが、これらは皆投書家中の優秀なるものを指すのである。その劣等なものに至つては殆んど噴飯にも値しないものがあるや勿論である)。時としては私もそのうまさに釣られやうとして、ハツとする事が屢々だ。然し、實際それ等に釣られる、べく此頃私は餘りに多くの彼等に接して居る。

彼等の歌を作るや、既に動機が違つて居る。(また、歌ほど正直にその作歌の動機を物語るものはないのである。)即ち『歌』は方便に過ぎず、目ざす所は『當選』である。歌に『本當の歌』が、『生きた歌』が出来やう筈がない。いかに巧に、如何によく呼吸を飲み込んで作つてあつても、要するに歌の『靈魂』が死んで居る。ところが歌は殆んどその『靈魂』のみで持つてゐるものであるのだ。

然し、斯うした立人筋の投書家は先づそれでよろしい。彼等自身『歌』といふものに對してはさほどの顧慮を持つてゐぬかも知れぬからである。唯だ氣の毒なのは最初何の氣もなく投書といふことをしていつのまにかその悪い面白味を飲み込み、知らず／＼眞正の投書家になつてしまふやうな人たちが

である。これらの人は初め方便として『投書』といふことをし、やがては『歌』の方が方便になつて行つたのを氣づかずに居る人が少くないらしい。そして、次第にその深みに陥つてゆく。

時にさうした深みに陥つてゐる事に氣のつく人がある。私はよく自身にさう嘆いてゐる人たちに出席する。が、その時はもうな／＼に其處から脱け出ることが出来ぬらしい。脱け出ようと苦しみながらもその作は常に血の氣を帯びず、靈魂を持たず、徒に巧緻なる常識の作であるのを見る。よくよく執拗なる痼疾でこの『投書病』はあるやうである。

投書そのものは悪いものではない。投書によつて作歌欲を進め、知らず／＼歌壇一般の傾向といふものを知り、思はぬ知己をその間に得るといふやうなことがあるものである。が、其處には右云ふ如き恐るべき悪弊悪疾が流行して居る。忘れてもそれに罹らぬやうに心がけねばならぬ。その病氣を持つた人は多くは小伶俐な一種の才能を持つた、理窟なども相當に云ひ得る半可通の人に多いので、初めは眞實に偉いのだと思つて近づき度くもなるものである。近づけば大概傳染させられるであらう、それだけの力をば大抵彼等は持つて居る。で、投書をするならば充分にその覺悟をきめてか、らねばよくない。飽くまでも『歌を作るため』といふことを忘れないで、『投書をするために歌を作る、雑誌に發表するために歌を作る』といふ風にならぬやうに本末を誤らぬやうに注意すべきである。

ついでに云つておく。發表するために歌を作る、といふ云つた。これは投書とは違ふが(一種の投

書病の變疾とも見べきものもある。少し自由に三十一文字を並べ得るやうになると先づ自分が主になつて同臭の四五人を誘ひ合はせ、月々雑誌を出して自分等だけの作品を發表する事がいま流行してゐる。歌壇に一派を作りそのため特に一つの雑誌を出さねばならぬだけの特質を持つたものならばどんな小さな雑誌でもその必要があり權威もあるであらうが、たゞ自分等のものを思ふやうに活字にしただけの欲望、お山の大将になりたい虚榮心、そんなことをお上品な、女道樂より金がかゝらぬと考へてゐるやうな道樂心、または社交心、などからさうした事をするのは誠に憐れむべき事である。つまりさうした人たちも此處に引いた投書家たちと同じく、『歌を作る』といふのは客で、先づ『作品を發表する』といふことや『名前を出す』といふことや、唯の『お道樂』が主となつてゐるのである。そしてその結果は自分から進んで自分の歌の芽を摘み棄てるか枯らしてしまふやうなことになるがちなことに終つて居る。兎に角に歌を作るといふ創作欲と、歌を發表するといふ發表欲とを轉倒せぬやうに心がくる事が肝腎である。發表を念とすれば自然『作る』方は留守になりがちである。作る一方であれば自然その作物も優れて來やうし、優れて來ればこちらが拒んでも世間でそれを發表せずには置かぬものである。

第十二 推敲及び批評

出來たままの歌……一首の仕上げ……一首のもと……一首の假成……表現法……心と言葉……心と調子……自得と直覺……技巧といふことの誤解……推敲の危険……實例
 一三……批評と岡目八目……批評に對する態度……實例二三

歌に作つたまま、で自らなる光を放ち立派に一首として輝くものと、最初は殆んど形をも成さず添削に添削を加へ推敲に推敲を加へてゆくうちに漸く燦然たる光を放つに到るものと二種がある。そして前者は大抵な優れたる作者にも先づさうざらにあることでなくして、先づ大方の作はこの後者に屬するものであるやうである。

最初腹のうちで、心のうちで、充分に醗酵し純化するのを待つてから一首として作り出せばよいのであるが、人は大抵この作り出すことを急ぐ、また一首の形として兎に角に早く作り出しておかないとそれを忘れてしまふことなどがある。前に散歩に出る時、床に就く時紙筆を用意せよと云つたのもそれがためである。然うして置いて後徐おもほろにその一首の作り上げ、仕上げにかかるのである。これを推敲といふ。

ふつと詠みたいと思ふこと、一つの趣向が心に浮ぶ。その時はまだ形をも何をも成さないものであ

る。それが充分に醗酵して形を成すまで待ち得ればよいのであるが、單に氣が急ぐといふのみでなく、そのまゝではいつまで待つても醗酵せぬ場合がある。さればとて棄て去るのも惜しい。さういふ場合は取りあへずそれをそのつもりで未熟のまゝに一首の歌として假りに作り上げて置くのである。而して後、形となつて其處に出て居る未成品の歌に對して更に心を集めて改めてその醗酵を圖るべきである。つまり先に「チ、ラ、リ」と心をかすめた一つの感興がやがて充分に纏まるに到るまで自爲的にその計畫を廻すのである。成るやうで成らず、身體の何處かに何かくつ附着してゐるやうな兼好法師けんこうほふしの所謂「思ふことを云はぬは腹ふくるゝわざ」の氣持わるさを感じる場合を作歌上誰しもよく經驗するであらう。さういふ時は先づ何でもいゝから三十一文字の、形のあるものにしておくのだ。そして改めてそれに對して工風を凝すがよい。これは他處で見えて來た景色なり何なりに就いてかなり心に動かされ、一首の歌にしたいなアとは思つたがその場で出來ない、といふ風の場合にもよく適應出来る。さういふ時はよし三十一文字に纏まらずとも自分の心おぼえだけなりと何かに書きつけて置くがよい。そして折にふれてそれに心を集めて見る、次第々々に心のうちにその『一首にしたいなア』と思つたものが形を成して來て、寧ろ最初思つたより餘程いゝ歌になることなどある。また、たとへ出來る出來ないに係はらず、ハツとしたやうな感じ、一種の靈興インスピレーションつまり前に云つた『一首にしたいなア』といふ背景を置いて時々突發的に心に感ずることをばそのまゝに忘れてしまふことをせぬがよろしい。多少に係

はず、ハツと感じたからには其處に歌を成すべき何ものか、屹度ひそんでゐるのである。それ自身で歌になるか、それが端緒となつて更に他の感興を呼ぶか、どうかする。『斯ういふことを詠んでやらうかな』といふ風に豫てから考へ込んでゐたことより、斯うした突發的な感じから生れて來る歌に却つていゝものがあるものである。

以上は主として歌を成す内容についての推敲だが、それより更に推敲を要するものは心に感じたことと思つたことを如何に形に表すべきか、思つたまゝに表はすにはどうしたらよいかといふ即ち表現に關する技巧上に關してである。歌は『私はいま斯うく感じた』といふ風に自分の感じたことを單に描寫し説明するのではものにならぬ、感じた感じ、若しくは思つたおもひそのまゝを表はさねばならぬ。自分の感じた感じそのまゝを、そつと持つて行つて、言葉の上に觸れしめ、そしてその感じそのまゝが言葉の上に或る調子を帯びて再現する、いや、言葉そのものを自分の感じた感じと同化せしめてしまふ。それではなくてはならぬ。つまり言葉が自分となり、自分の神經となり、自分の心となつて動かねばならぬ。言葉の上に自分を見、自分の心の動きを見ねばならぬのである。これは云ふべくして實に行はれ難いことである。それだけに表現に苦勞し、その技巧に骨を折る。

この表現の技巧については（歌の道はすべてさうではあるが）斯ういふ場合には斯うせよといふ定められた方法がない。まづたく各個が獨自に工夫し發明し會得えとくして行かねばならぬのである。そ

れには先づ自分で苦しむよりほかはない。これでもか、これでもかと自ら苦勞して、そして自ら會得すべきである。その間の行程、それが即ち推敲である。云ひかたが悪いかもしれぬ。満足出来るまで、即ち自分の思ひが充分に言葉に移るまでに推敲に推敲を重ねて行く間にこの表現の秘法を自得するのである。推敲の任務や重且つ大なりと云はざるを得ぬではないか。歌にあつてはことに詩形が小さいだけ僅か一語一言又は半句一句がよく一首全體の死活を司つてゐる。言葉と、その言葉がおのづからにして帶びて來る調子と、それをよく調和させてそして首尾一貫した、活きた、心の動いてゐる一首を成さうといふのである。最初作る時も苦勞だがその時はまだ内に自然に押し出して來る感興がある。一度出してしまつたものに不満足を感じながら推敲してゆく時の苦心は更に一層なるものがあるのである。

推敲に際して心すべきは言葉の選擇法である。推敲の目的は自分の思つてゐること（その思つてゐることそのものをよりよく洗練せるもの、よりよく豊かなるものにするのも推敲の一である、即ち前に云つた内容の推敲がそれである。）をそのまゝに表現するにはどうすればよいか、といふにあるのである。それを考へ違ひをしてたゞ徒に綺麗な言葉、歌らしい言葉を選んで一首を飾れば推敲の目的が達せられたやうに思つてゐる風習が無いではない。それでは却つて改惡にこそなれ、寸毫も歌を佳くする目的には添はぬ。感じそのまゝの言葉、少くともそれに最も近い言葉、近い調子、それを選んで當

て填めることにせねばいけない。推敲とは充分に現はれてゐない『感じ』や『思ひ』の光を、それを掩つて居る不純なもの（即ち不純の言葉や調子）を取り除いて充分に光り輝かせることである。徒に綺麗な（と思はれる）言葉や調子でその表れかけてゐる光を塗り隠すことでは決して無い。

また、角を矯めて牛を殺す、といふことがある。角の曲つてゐるのを眞直に直してやらうと思つて（曲つてゐるのがその牛の本来なのに）その愛する牛を殺してしまつたといふのである。どうかしてこの歌を今少しよくしたいと徒に思ひあせつて、あゝでもない斯うでもない無闇に弄り廻してたうとうその歌を臺なしにしてしまふことがある。推敲する時にはまつたく最初作つた時と同じ氣持になつてゐる必要がある。力めて、もさうなつて、その時と同じ感興を以て従事すべきである。でないとならば徒に油に水をさしたやうな、初めより却つて悪くする懼れがある。

また、直し初めていろ／＼行つてゐるうちに次第に最初の思ひ立ちより歌の意味の變つて來ることなどもある。これにはよき場合と悪き場合とある様である。よき場合は外形、表現法を改めて行きつつある間にそれと共に次第に内容、歌はうとしたことの純化を呼ぶに至る如き時で、これならばさし支へない。悪き場合は右に云つた如き推敲の誤用である。つまり形のために内容を左右するやうな本末轉倒を爲す場合である。

弄り毀すといふ場合もかなり多いが、矢張り作りつ放しのまゝで捨て、置くより推敲を重ねた方が

よいものが出来るやうである。私などは一首の歌のために手帳テイブの一頁若しくは二頁（それもかなり大型の手帳である）を眞黒にする事が少くない。一度作りかけて出来ず、すて、置いたまゝに三年間ぐらゐ、折にふれてその一首のことで心を使つたこともある。果してその歌が佳い歌であるか、佳くなかつたかは問題外として、ほどくで捨て、置くのはいかにも心が濟まぬのである。甚だうしろめたい氣がするが、兎に角に右の手帳テイブの或る一頁を此處に引いて見ようか。

この春の初め、伊豆の海岸に行つてゐた時の作である。或る朝起きて見ると暖かい海岸にも似ず、珍しく雪が降つて来た。そして斑に小さな山に積つてゐたが、程なく消えてしまつた。それに興を催して先づ詠んだ。

菅山の菅野が原にはだらにも降れる雪見ゆこのあけぼのに

これでは云ひ足りない、最初思つたゞけのことが出てるない。で、

菅山の海近みかもこの朝けしばらく見えて雪

消えにけり

思つたゞけのことは云へたが、『暫らく見えて雪消えにけり』はいかにも説明じみてゐる。更に、

菅山の海近みかもこの朝けほのぼの積みて雪

消えにけり

いくらかよくなつたが、まだ言葉が据わつてゐない。

菅山の海近みかもこの朝けほのかに降りて雪

消えにけり

まだ今見れば不十分なのを感じるが、その時は兎に角こゝまで、切りあげてある。

同じ時同じ所で或る野梅ヤバイを詠んだもの、これはたゞ作り變へて行つた経路だけを示さう。

枯草の小野の傾斜ななへの春の日に浮き出でて咲ける
白梅の花

原作はこれで、歌はうとした意味だけは出てるが下の句が説明臭い。で下句だけを左のやうに改めてみた。

浮き出でて見ゆる白梅の花

匂ひて咲ける白梅の花

匂ひて咲ける梅の一もと

けぶりてぞ咲く梅の白花

最後に先づ斯うしてみた。